

平成 28（2016）年度

文部科学省生涯学習政策局青少年教育課委託事業

平成 28 年度「青少年国際交流推進事業」

日独青少年指導者セミナー B3（芸術分野）

**「日本とドイツのダンス（バレエ）教育の
システム・制度の違い」
に関する報告書 2016＜受入・派遣事業＞**

平成 29 年 2 月

公益社団法人 日本バレエ協会

はじめに

本冊子は文部科学省による「平成２８年度“青少年国際交流推進事業”」における「日独青少年指導者セミナー部門」Ｂ３「芸術分野」に於いて公益社団法人日本バレエ協会が行った受入、及び派遣事業に関する報告書である。

文部科学省による本事業は国内外の青少年指導者及び次代を担う青年リーダー、高校生の海外派遣・日本受入を行い、内外の青少年の現状・課題点等についての意見交換や、青少年育成活動、施設等の現地調査を行うなど研修を伴った相互交流事業を実施することを趣旨としており、中でも当協会が企画応募した青少年指導者セミナー部門、Ｂ３「芸術分野」は、芸術分野に於ける日独の相互交流や研究協議、意見交換等を通して両国の理解と親善を深め、信頼関係を構築することを旨としている。

今回の相互交流はドイツ側による訪日が平成２８年５月１日から１３日までの実質１２日間、日本からの訪独が平成２９年１月１５日から２９日までの実質１４日間に亘って行われ、それぞれ７名の派遣団員が相手国を訪問した。

本交流事業に於いては、日本側ホスト団体である当協会と先方ホスト団体であるドイツ連邦ダンス連盟との事前折衝で取り決めた「日本とドイツのダンス（バレエ）教育のシステム・制度の違い」をテーマに設定し、それに沿ったプログラムを双方で組むことになるのだが、一言で“ダンス”と言ってもその範疇には様々な種類の舞踊が、伝統的なものもあれば近世から現代にかけて発生発展したもの、一般の人々が自ら踊って楽しむことが目的とされるものもあれば専門に訓練された者が演じることで主に鑑賞することが目的とされるもの、更にはその国、地方に於いてスポンタニアスに発生したものもあれば外来して定着したもの、等が含まれ、とりあえずは両国に於ける“ダンス”の現状を知る事が必然的にその導入部分となる。

そのため初めてドイツ側を受け入れたわが国サイドは、まず現代日本に於ける舞踊の多様性をご覧頂くプログラムが中心になったのに対し、前年ドイツを訪れて既に現代ドイツに於ける舞踊の多様性、そしてその国民にとっての親和性についての紹介を受けていたわが国訪独団に対し、今回ドイツ側が用意して下さったのは現代ドイツに於ける様々なジャンルに於ける舞踊教育の現場と、そこでの試行錯誤の現状、そして舞踊の社会参画、社会貢献への取り組みの視察を中心としたプログラムであった。

所謂学校教育の分野では様々な日独の比較研究が成されている様であるが、こと舞踊に関してはその教育制度、システムについての比較文化論的な言及は従来殆ど見当たらない。本報告書が昨年度の第一回報告に続いて今後の研究の一助になれば幸いである。

尚、本報告書は第一章、及び第二章受入事業を事務局小林秀穂が、第三章の派遣事業以降を訪独団メンバーがそれぞれ受け持ちを決めて執筆した。

また本報告書掲載写真の撮影は第二章受入事業を小林が、第三章派遣事業を訪独団員柴田英悟が行い、本報告書編集は小林と訪独団員松村とも子が統括して行った。

平成２９年２月
公益社団法人日本バレエ協会

目 次

第1章 平成 28 年度事業の概要

1. 平成 28 年度における日独交流事業の概要	P. 1～3
2. 関係者名簿	P. 4～7
3. 本年度の受入・派遣事業の総括	P. 8～10

第2章 日本への受入事業（受入プログラム）

1. 受入事業の概要	P. 11～12
2. 日本での視察行程	
① 5/1 来日／初回ミーティング	P. 13
② 5/2 東京女学館中・高等学校	P. 14～15
③ 5/3 明治神宮春の大祭／浅草	P. 16～17
④ 5/4 花柳千代稽古場／小林紀子バレエシアター	P. 18～19
⑤ 5/5 スタジオ・アーキタンツ／チャコット株式会社ダンス・カフェ	P. 20～21
⑥ 5/6 芸能実演家団体協議会／神楽坂セッション・ハウス	P. 22～23
⑦ 5/7 都立総合芸術高校／歌舞伎座（歌舞伎観劇）	P. 24～25
⑧ 5/8 中間ミーティング／新国立劇場バレエ観劇／日独レセプション	P. 26～27
⑨ 5/9 新国立劇場バレエ研修所	P. 28
⑩ 5/10 法村友井バレエ団／山村友五郎稽古場	P. 29～30
⑪ 5/11 大阪芸術大学	P. 31～32
⑫ 5/12 京都／最終ミーティング	P. 33～34

第3章 ドイツ派遣団のレポート（派遣プログラム）

1. 派遣事業の概要／事前研修	P. 35～36
2. ドイツでの概略行程	P. 37
3. ドイツでの行動地図	P. 38
4. 訪独研修プログラム詳細	P. 39～43

ドイツ派遣団員のレポート

1. 平成 28 年度ドイツ派遣事業に参加して（諸角）	P. 44～46
2. ドイツで訪問した施設等について	
① 1/16 フランクフルト音楽舞台芸術アカデミー（若佐）	P. 47～52
② 1/17 ハインリッヒ・シュルツ記念コンセルヴァトワール（松村）	P. 53～56
③ 1/18 パルッカ舞踊大学（柴田）	P. 57～60
④ 1/18 テア・マアス・フォークダンスアンサンブル（諸角）	P. 61～64
⑤ 1/19 ヘレラウ・ヨーロッパ芸術センター（松村）	P. 65～68
⑥ 1/19 ドレスデン工科大学における青少年ダンススタジオ（錦見）	P. 69～74

⑦ 1/20 ドレスデン市内視察 (若佐)	・ ・ ・ ・ ・	P. 75～78
⑧ 1/20 コンテンポラリーダンス公演「BABEL」(錦見)	・ ・ ・ ・ ・	P. 79～80
⑨ 1/21 ケルンでの懇親会(松村)	・ ・ ・ ・ ・	P. 81～82
⑩ 1/22 ケルン市内視察 (錦見)	・ ・ ・ ・ ・	P. 83～86
⑪ 1/23 フォルクヴァング芸術大学(諸角)	・ ・ ・ ・ ・	P. 87～90
⑫ 1/23 エッセン州立ヴェルデン・ギムナジウム(柴田)	・ ・ ・ ・ ・	P. 91～94
⑬ 1/24 ノルトライン・ヴェストファーレン州立応用科学カトリック 大学 (若佐)	・ ・ ・ ・ ・	P. 95～96
⑭ 1/24 ドイツ連邦体育大学舞踊・行動(運動)文化研究所(貞松)	・ ・	P. 97～100
⑮ 1/24 エイリーⅡダンス公演鑑賞(貞松)	・ ・ ・ ・ ・	P. 101～104
⑯ 1/25 フェルバート市ランゲンベルグ・ギムナジウム(錦見)	・ ・ ・	P. 105～108
⑰ 1/25 カルト・ステージダンス・スクール (市川)	・ ・ ・ ・ ・	P. 109～112
⑱ 1/26 ランゲン・インスティテュート(市川)	・ ・ ・ ・ ・	P. 113～116
⑲ 1/26 ダンスハウス nrw (貞松)	・ ・ ・ ・ ・	P. 117～120
⑳ 1/27 ヒュルト市長表敬訪問 (松村)	・ ・ ・ ・ ・	P. 121～122
㉑ 1/28 ザビーネ・オーデンタール・ダンススタジオ (若佐)	・ ・ ・	P. 123～126

3. 派遣事業の報告会	・ ・ ・ ・ ・	P. 127
-------------	-----------	--------

別添1 日本とドイツの一般教育制度の違い

別添2 ドイツにおける大学制度について

別添3 派遣団員募集要項

1. 平成 28 年度における日独交流事業の概要

a) 交流テーマの設定

本事業は文部科学省によって実施された企画コンペ、「平成 28 年度“青少年国際交流推進事業”」における「日独青少年指導者セミナー部門」の B3「芸術分野」に当協会が企画応募し、採択された事により実施の運びとなった事業である。

当協会が企画提案した交流テーマは「日本とドイツのダンス（バレエ）教育のシステム・制度の違い」であるが、このテーマを選んだ意図はドイツという国の特性にある。

この国はヨーロッパのほぼ中央に位置する事からして当然の事ながらその伝統の一分野として欧州発祥の所謂クラシックバレエを育んできたが、一方に於いてヨーロッパで最も早い時期からモダンバレエ（ダンス）、コンテンポラリーダンス、創作舞踊等、現在の呼び方は様々であるが広義での舞踊の革新、と言うか舞踊の持つ様々な可能性に着目した国である。加えて一般論としてドイツは教育、及びその制度の先進国であり、歴史的にも明治以降、わが国の教育制度作りの参考とされている点からも学ぶべき所は多いと考えられた。

舞踊史に於いて 20 世紀初頭に始まるノイエ・タンツ（新しい舞踊）と総称される同国に於けるこの舞踊革新のムーヴメントは、所謂ドイツ表現主義運動の中での舞踊、鑑賞を目的とする舞台芸術創作の範疇に留まらず「身体表現」としての切り口から、例えば思想背景は異なるものの R. シュタイナーによるオイリュトミーの様な新感覚の表現様式から児童・青少年の感性・情操教育に於ける方法論的応用、生理整体学的応用、更には J.P. サルトルの言うアンガージュマン的な舞踊の社会参画等へと多方面に派生する稀有な展開を先駆的に見せている。

片や我が国は極東の地に在りながら欧州生まれの、他者の伝統であるクラシックバレエを移入して 100 年程の短期間に、身体的なハンデキャップを克服して欧米一流バレエ団にダンサーを多数送り出すまでに急成長した国である。然るに我が国がバレエを自家薬籠中の技に成し得た過程にあつて、先達欧州からの指導は決して手取り足取りのものではなく、その多くの部分に於いて我が国独自の何等かがこの急成長を促しており、その何等かが何たるか、教育制度なのか、民族的メンタリティーなのか、或いは社会構造なのかを、漠然とはイメージできるもののそれをより鮮明に明らかにする手段として舞踊を拡大的に諸分野に応用しようと試みたドイツとの比較は最適であると考え、本交流のテーマを表記のものとした。

主要都市には概ね公立の劇場が設置され、音楽やオペラと並んでバレエやコンテンポラリー・ダンスが劇場付属のバレエ団、或いは民間のカンパニーによって上演されて多くの国民の楽しみとして供され人気を博している欧米（ドイツ）と、ある意味、社会的ニーズ以上のカンパニーの乱立によって只でさえ決して多いとは言えない舞踊愛好家のパイを分散させて公演の経済的自立を達成し得ないでいる我が国の、すなわち受け手側の土壌の違いに日欧の舞踊文化に於ける相違の原因の殆どを見出す事は従来からの常套であるが、公演団体同士の交流なら兎も角、それは今回の指導者サイドによる文化交流とは次元の異なる

る議論であり、今回の訪独にあつては敢えて「新たな観客層の開拓についての工夫や努力」といった観測点は割愛した。

尚、以下に事業の流れを時系列で概説するが、具体的な受入・派遣事業内容については後段のレポートを参照願いたい。

b) 事業の経過

本事業の企画コンペ締切は平成 28 年 2 月下旬であつたが、企画採用の内諾を 4 月初旬に受け（正式文書通知による契約発効日は 4 月 26 日）、ドイツ側ホストとなるドイツ連邦ダンス連盟（Deutscher Bundesverband Tanz : DBT）との具体的調整を開始すると同時に訪独団を構成する為に団員の公募準備作業に着手した。

尚、本企画コンペに応募するに際して先方と合意していた派遣・受入期間は以下の通りである。

受入事業：平成 28 年 5 月 1 日（日）来日／5 月 13 日（金）離日

派遣事業：平成 29 年 1 月 15 日（日）出発／1 月 29 日（日）帰国

■ ドイツからの訪日団受入プログラムの検討（～平成 28 年 4 月下旬迄）

本件に関しては来日時期が文部科学省との契約発効時期直後になる事が予想されたため、平成 28 年度早々より具体的手筈は開始していた。

プログラムは基本的に現代日本に於ける広義での“舞踊（ダンス）”の多様性をご覧頂くこと、各種伝統的舞踊と各種外来舞踊がどの様に現代日本に生きているか、を目的として選定し、関連各団体に協力を要請した。

更に伝統的舞踊に関してはその触りを体験して頂くことで西洋舞踊との基本的違いを実感して頂く事を企画し、また外来舞踊に関してはそれがどの様にこの極東の島国に根付き、開花しているかを出来るだけ幅広いジャンルの実演をご覧頂くことに配慮した。

■ ドイツからの訪日団受入プログラムの実施（平成 28 年 5 月 1 日～13 日）

<第 2 章参照>

■ ドイツ派遣事業参加者募集要項の検討（平成 28 年 7 月より）

事業実行委員会において訪独団募集要項の内容、募集開始時期、人選のポイント等を検討。

尚、今回の訪独団員選定に関しては 5 月の訪日団との打ち合わせにより前回（平成 27 年度）訪独団員を全員入れ替えて新メンバーでの訪問になると既に前回メンバーに対して行った各種解説を再度繰り返す必要が生じて不合理であり、最低半数は前回メンバ

一を残そうとの合意があった。

従って新たに採択する人員は3名、乃至4名となるが、前回訪独メンバーにも志望動機書を再提出してもらい、7名を絞る事とした。

■ ドイツ派遣事業参加者募集要項の決定と募集の開始（平成28年7月）

事業実行委員会において訪独団募集要項（本冊子巻末参照）が決定され、8月初旬を目処に当協会会員約2,300名にダイレクト・メールとして発送、並行して当協会インターネット・ホームページに掲出して一般公募とする事も併せて決議された。

■ 派遣メンバーの決定（平成28年9月）

応募締切が8月31日に設定されていたことを受け、同日迄に書類提出があった16名を事業実行委員会にて検討の結果、平成27年度派遣の3名を加えた別紙の7名を選出、決定の案内と同時に参加意志の最終確認を書面にて本人に送付した。また訪独団の団長として前回訪独団員の諸角佳津美女史を選出した。

メンバー選定に当たってはとりわけ応募書類記載の志望動機、また研修結果を帰国後それぞれの現場に還元できる立場にあるかを重視した。

■ 事前研修会の内容決定（平成28年11月）

訪独団員の人選を広く全国から行った関係上、事前研修会の実施は出発前日とした。また同月、ドイツ連邦ダンス連盟から受入プログラムの概要が送られてきた事を受け、事務局で訪問視察先の概略資料を作成することとした。

■ 事前研修会の実施（平成29年1月14日）

前項に挙げた資料を用いて事前研修会が事業実行委員、訪独団メンバー出席の上、当協会品川区五反田の事務所に開催した。また効率的かつ成果の上がる視察・取材を行うために現地に於けるメンバーの担当重点視察箇所と役割分担が決められた。

■ ドイツへの派遣（平成29年1月14日～29日）

<第3章参照>

■ 報告会の実施（平成29年2月10日）

事業実行委員会に対する訪独団メンバー全員による派遣事業報告会が当協会品川区五反田の事務所に於いて開催された。

尚、今回の派遣・受入事業の成果は平成29年6月14日（水）の日本バレエ協会総会に於いて出席会員に報告される予定である。

2. 関係者名簿

ドイツ側パートナーについて

受入団体のドイツ連邦ダンス連盟（Deutscher Bundesverband Tanz : DBT）は 1953 年、当初はドイツ各地に伝わる民族舞踊（フォークダンス）の継承と振興を図る団体として発足し、その後、広くドイツに於けるダンス文化の振興を図る組織として各種舞踊団体や専門家集団を取り込み、ダンスのための全国統括組織へと発展してきた非営利団体である。

同連盟の所謂定款のよると同連盟の目的は文化的、教育的、社会的更には政治的レベル等、様々な場面に於いて舞踊文化の重要性をアピールすると同時にそれら場面に於いての舞踊文化の貢献度を増すことにあると謳われており、フォーク・ダンスやバレエやモダン・ダンス、ジャズ・ダンス、ヒップ・ホップやコンテンポラリー・ダンスといった様々な舞踊の教授、研究、普及を図る会議、公演の実施及び関連出版物の刊行を連邦省の助成を受けてボランティアで行っている。

組織形態としては傘下に様々な舞踊ジャンルの統括団体、研究機関、専門家団体、大学、専門学校等を組み入れて活動しており、その点、バレエに特化した活動を行っている当協会より幅広い活動領域を持つ団体であり、同時に社会的影響力も強い組織だと考えられる。またドイツは 16 ある州のそれぞれが自治権をもって独自の文化施策を行っている状況があるが、DBT は各州に連携ネットワークを構築してドイツ全土の文化教育にダンスの分野から様々な貢献を行っている。

尚、特筆すべきは活動の対象・目的が所謂プロフェッショナル・ダンサーに力点を置いているのではなく児童・学生、一般社会人等幅広く対象としている点であり、職業舞踊家のための権利団体、互助団体というイギリスやアメリカ合衆国に於ける「ユニオン」とは別組織である。

従って例えばダンス指導者の派遣先、ダンス・イベントの開催場所といった事業の場も、子供や青少年、一般社会人、専業主婦、高齢者等のサークル、学校、諸施設等が中心であり、そのスタンスの点ではプロフェッショナルを志す人材の育成・支援に活動の主点を置く当協会とは方向性を若干異にする。

しかしながら公益社団法人としての当協会の有り様としてはむしろその方向性も視野に入れる必要があると思われ、その意味で学ぶべきところの多い団体だと思われる。

受入事業（訪日団メンバー）

ウーラ・エレマン博士 Ellermann, Dr. Ulla

- ・ドイツの舞踊団体のための包括的組織であるドイツ舞踊連盟(DBT)会長。
- ・ドイツ文化協会に属するドイツ舞踊団体 Beirat Tanz の一員。
- ・舞踊教師育成学の第一人者。

ディータ・クノーデル氏 Knodel, Dieter

- ・ドイツ連邦ダンス連盟 副会長。フォーク・ダンス・グループ “Zugvoel:渡り鳥” 主宰。

- ・ハンブルク舞踊連盟 Hamburger Landesverband Tanz の会長。
- ・Lola Rogge Schule(ローラ・ロゲ・スクール)で民族舞踊を指導する。
- ・日独交流プログラムのリーダー。

ゲルト・ヘルツエル氏 Hölzel, Gert

- ・ドレスデン工科大学の子供と青少年のためのダンス・スタジオにおけるダンス教師及び主宰者。
- ・ドレスデンにあるザクセン州ダンス連合 Sächsischer Landesverband Tanz の創設者であり役員。
- ・ドレスデン専門大学の Thea Maass 民族舞踊チームで長きにわたりリーダーを務めた。

カーチャ・ボルシュドルフ女史 Borsdorf, Katja

- ・ハンブルクにある、Lola Rogge Schule(ローラ・ロゲ・スクール)にて教職の為の舞踊や体育の舞踊教育マネジメントの補佐を務める。
- ・モダンダンスや即興、舞踊教授法(メソッド)といった科目を勤労学生へ指導する。

シモーネ・マイシュ女史 Meuche, Simone

- ・ダンス教師及び振付師。
- ・Brandenburg(ブランデンブルグ)ダンス協会 会長。
- ・およそ 550 人が所属するアインシュタイン子どもと青年の舞踊団体を創設し、更に 1989 年からはそこで子供のダンスやバレエ、民族舞踊、ジャズダンス、リリカルダンス、タップダンスの指導者、及び振付家としてだけでなく芸術監督も務めている。

サブリナ・ソドヴァスカ女史 Sadowska, Sabrina

- ・代表者兼ファースト・ミストレスとしてケムニッツ・コミュニティー劇場で役員を務め、オペラ・バレエ学校や文化教育の為の事業を監督する。
- ・TANZ(ドイツ・トランジション・センター)財団の創設者であり会長。この財団は引退後のダンサーの再就職斡旋、ケアを行う団体として設立された。
- ・ドイツ連邦バレエ協議会の役員、及びダンス劇場監督。

ラルフ・スターブル博士 Stabel, Prof. Dr. Ralf

- ・ベルリン国立バレエ団やバレエ芸術学校、アクロバットダンス学校の校長を務める。
- ・舞台ダンスとアクロバットダンスの為のプロフェッショナル訓練コース(9 年間)を設けている公立学校の校長も務める。ダンス・バレエ関係の著書多数。

通訳：ハイケ・パチケ博士 Patzschke, Dr. Heike

- ・ドイツ外務省指定通訳。ベルリン、ケルン、ボン、ライプツィヒの各大学の日本語非常勤講師を歴任。
- ・三菱商事、第一勧業銀行のドイツ支店職員、日独学術文化関係促進財団理事会付き専門員等を経て現在はフリーランスの日本語通訳 森嶋外作品等のドイツ語訳も手がける。

派遣事業（訪独団メンバー）

諸角 佳津美 (Katsumi Morozumi) ※第一回訪独団団員

今回団長・慶應義塾大学法学部卒。

1972 年より井上バレエ団にてダンサーとして踊ると共に事務局に勤務。

1983 年、バレエ団が財団として認可された時に事務局長に就任。

井上バレエ学園教師。池袋コミュニティーカレッジ、NHK 文化センター、聖セシリア・バレエ講師。

柴田 英悟 (Eigo Shibata)

現日本バレエ協会理事

栗林キミ子、高木俊徳、笹本公江・永江巖氏等に師事。

日本バレエ協会公演を中心に、井上バレエ団、小林紀子バレエシアター、バレエチャンブルウエストなどのバレエ団公演に出演。

現在 Minori Ballet Studio 主宰、教師としても活動。

ほかに学校法人舞台芸術学院講師を務める。

松村 とも子 (Tomoko Matsumura) ※第一回訪独団団員

お茶の水女子大学文教育学部舞踊教育学科卒、同大学院人文科学研究科舞踊教育学専攻修了。ニューヨーク大学大学院修了。玉川大学文学部教育学科通信教育課程修了、学芸員資格取得。

お茶の水女子大学助手、東京家政大学短期大学、東京ビジュアルアーツ、白梅学園短期大学、鶴川女子短期大学、近畿大学豊岡短期大学、尚美学園大学にて非常勤講師を歴任。

日本児童教育専門学校、白鷗大学幼児教育学科、法政大学社会学部 非常勤講師。

現在、パティオダンススクール主宰。日本バレエ協会会員

貞松 正一郎 (Shoichiro Sadamatsu)

貞松・浜田バレエ団芸術監督。

英国ロイヤル・バレエ・スクールに留学の後、松山バレエ団で活躍。

1980 年、埼玉県舞踊コンクール第 2 位。

1982 年、プリ・ド・ローザンヌ受賞。同年、第 1 回こうべユース賞。

1987 年、第 1 回村松賞。 1993 年、第 1 回兵庫県芸術奨励賞。

1994 年、神戸っ子ブルーメール賞。 1998 年、大阪舞台芸術奨励賞。

1999 年、神戸市文化奨励賞。 2014 年、KOBE ART AWARD 大賞。

チャイコフスキー3 大バレエや「ジゼル」「コッペリア」の演出・振付に加え、「カルミナ・ブラーナ」「セイラーズ・セイリング」など、数多くの創作作品がある。

市川 みどり (Midori Ichikawa)

1981 年、お茶の水女子大学文教育学部教育学科表現体育学専攻卒。同大学院人文科学研究科舞踊教育学専攻修了。エリアナ・パヴロバ・バレエスクール出身。

日本バレエ協会、神奈川芸術舞踊協会、小牧バレエ団、NBA バレエ団等の公演に多数出演。

1999 年～2001 年、新国立劇場登録ダンサー（フィギラシオン）

お茶の水女子大学舞踊教育学科助手を経て、湘北短期大学幼児教育学科講師。東洋英和学院大学、白百合女子大学心理学科にて非常勤講師を務める。

1987 年よりミドリバレエインスティテュート設立。日本バレエ協会会員

若佐 久美子 (Kumiko Wakasa) ※第一回訪独団団員
6 歳より松江市にてバレエを始める。
1989 年、京都バレエ専門学校卒業。同年、若佐久美子バレエスクール開校。
2008 年、株式会社ラルジェス設立。
日本バレエ協会山陰支部支部長

錦見 真樹 (Maki Nishikimi)
母・藤原悦子、石川恵己、深川秀夫、ハンス・マイスター、ジャン・クロード・ルイーズ
に師事。大阪大学法学部 卒業。米国インディアナポリス市ショートリッジ中学にてクラシ
ックバレエクラス指導助手を務める。
2002 年～2012 年、日本バレエ協会関西支部総務部補佐。
2009 年、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター「パフォーミング・アーツの世界」
コース終了。クラシックバレエ振付・指導の他、来日振付家やダンサーの通訳も務める。
日本バレエ協会会員

事業実行委員会（設置場所：公益社団法人日本バレエ協会内）

岡本佳津子	日本バレエ協会代表理事・会長 【委員長】
小林 紀子	日本バレエ協会代表理事・副会長
高木 俊徳	日本バレエ協会業務執行理事・専務
漆原 宏樹	日本バレエ協会業務執行理事
篠原 聖一	〃
本多 実男	〃
早川恵美子	〃
小林 秀穂	日本バレエ協会事務局主任

※ 本派遣・受入事業に携わって頂いた協力団体、及び関係者ご芳名は各章各項に記載

3. 本年度の受入・派遣事業の総括

本交流事業は「日独のバレエ（ダンス）教育・制度の違い」をテーマに設定しているが、その手順としてはまず両国で現在広く“踊られている”舞踊の現状を把握することから始め、続いてそれらが社会的にどの様に位置づけされているかを理解し、その上でその教育制度なりシステムの考察に移るという手順で展開する予定であった。

なぜならどの様なジャンルにあっても、「教育」とは社会そのものの制度・体制を反映しているものであり、更にはその対象の社会的ステイタスによってもそれは影響を受ける。

例えば語学教育は、自国・他国を含め殆どの国で経済活動における重要度とも相まって最重点要目とされ、様々に試行錯誤の結果、その国民に最適と思われる教育制度が国家レベルで施行されていよう。しかしながら嗜好・娯楽的分野の技能、芸能ともなればその殆どがそれに携わる関係者の間で考案され、経験的に改良されてきたものが大半であると思われる。

その代表的な分野が芸術やスポーツの分野であると思われるが、近世に至って国家レベルでその人材育成が図られる場合が登場してきた。良く知られている例としては所謂国威高揚、イデオロギー宣伝のために旧共産圏、特にソ連に於いてバレエや各種クラシック音楽、各種スポーツが社会主義の成果を喧伝するプロパガンダとして利用されたことが挙げられるが、それとは別の潮流として芸術・スポーツは特に青少年の健全育成や情操教育の手段に供することができるとして国家主導でその応用方法が研究、実施されているのが20世紀以降の多くの先進国である。

前述のソ連の例は、予め優れた素養を持つ児童を国家が選抜して英才教育を施し、才能を開花させる手法であったが、無論現在でもその種の制度はわが国を除く各国で英才教育の最も有効的な手段として継続されているのだが（国立バレエ学校などはその最たる例である）それには多分にそれぞれの国の文化保護的観点が含まれている。従ってある意味、そうした例は特殊な例であって多くのジャンルに汎用して考えるべきものではない。

ドイツにもベルリン国立バレエ学校の様な選抜された子供を対象とする英才教育機関は存在するが、多くの子供はわが国の子供達と同じように一般の義務教育機関に通いつつ民間や公共施設でバレエなりダンスなりピアノなりを学んでいるとの事前情報をもとに、まず我々日本側は今回のテーマを考察するに際し、まずドイツにおける一般的な教育制度がどうなっているかを知る必要があった。

調べてみるにわが国のそれとは大きく異なる部分があるのにまず驚かされる。（別添1参照）そして特徴的なのはまず義務教育機関に通う学校が志望進路によって複数種類あること、次にアビテュア、バチュラーといった資格を取ることが次のステップへのチケットになっている点である。

個別の高校なりとりわけ大学の入学試験の可否により将来がかなり方向付けられるわ

が国とは大きく異なる教育コンセプトによって制度が動いていることはドイツの大学入学制度を見てもわかる。(別添2参照)

すなわち現代ドイツの子供達はかなり早い段階で一応の自分の将来の職業的な道筋をつかなければならず、それによってたとえば技術者の道を選択したとして完全に音楽家になりたい、舞踊手になりたいという道が閉ざされてしまう訳ではないが、日本スタイルのプロセスを歩む事になる。

前述のベルリン国立バレエ学校の様に日本の小学生年齢から入学できる舞踊・音楽関係の国公立の教育機関が存在しないわが国では、義務教育年齢期に小中学校と平行して市井の民間教習所に通ってダンスなり音楽なりを学ぶ訳であるが、ドイツでも前述国立バレエ学校の様なところに入学できなかった子供（勿論そちらが圧倒的多数である訳だが）は、わが国と同じく義務教育を受けながら別の施設でそれらを学ぶ事になる。

ただわが国とドイツが圧倒的に違うところは、それらの子供がダンスなり音楽を学べる場所が非常に多彩である点である。

話題をバレエ・ダンスに絞るが、わが国にも数は少ないが高校や大学でバレエ・ダンス・コースを設けているところがある。

今回の受入プログラムに加えた都立総合芸術高校や日本音楽高等学校、洗足学園高校、昭和音大高校、大学ではこれも今回の受入プログラムに加えた大阪芸術大学や日本大学芸術学部、日本女子体育大学、昭和音楽大学等がそれである。

しかしドイツでは今回の派遣プログラムでもその多くを視察できた様に、バレエ・ダンスのコースを設けている高校や大学はわが国のそれに倍する数があるのみならず、多くの州立、市立の組織、あるいは州や市の助成を受けた組織でそれらを学ぶことが可能で、上記以外は個人経営、あるいは企業運営のバレエ、ダンス・スタジオに求める以外にないわが国と大きく異なる。

さらに付け加えるなら、ドイツのそれら施設、組織で学べるダンスの種類は非常に多彩であり、当協会の印象値であるがダンス関係の教習所の約5割をクラシック・バレエが占め、残りの内の3割をソシアル・ダンスと日舞が分け合い、後の2割をモダンやジャズ、フラメンコやヒップ・ホップなど多様なダンスが占るといった構成比のわが国とは異なって多彩なダンスがプログラムに含まれている。

ただ印象的なのはモダン（コンテンポラリー）系のダンス・コースがクラシック・バレエとほぼ同じ程度、若しくは若干上回る割合で設置されているところはお国柄、といったところであろうか。同時にそれらの様々な組織、施設が決して青少年だけを対象としているのではなく成人一般、特に勤労者にも受けやすく運営されている。

一昨年、及び本年度の訪独、そして本年度の訪独団受入でドイツにおける広い意味での舞踊の現状はほぼ把握でき、その社会における「立ち位置」的な部分、例えばダンスの応用による各種の試み等もわが国に無い、若しくは欠けている部分として視察できた。

前述教育環境上の両国における類似点、相違点を含め、それらは創作活動の成果とし

ての、あるいは鑑賞を目的とした「ダンス芸術」とは別スタンスで語られるべき「ダンス」文化の範疇に属する部分であるが、その中で両国の間で未解決の懸案事項となっている問題が舞踊手、舞踊教師の認定の問題である。平たく言えば誰でも手を挙げれば舞踊手、舞踊教師を自称して許されるのではなく当協会やドイツ連邦舞踊連盟の様な統括団体が社会に対しての“お墨付き”を交付して然るべきではなかろうか、またそうする義務があるのではなかろうか、という議論である。

ドイツ側は決してその方式に全面的な自信を持っている訳ではないが現行のバチュラー取得（学士資格）をもってその認定の第一歩とする動きを加速させている。（但しバチュラーを取得しないと舞踊教師職に全く就けない、という法制度がある訳ではない。採用する側がバチュラー所持を条件とする流れが出来つつある、という事である）

舞踊手の認定というのは「ダンス芸術」の中である意味、オーディエンスによって自然淘汰されるであろうとの推測から社会にその総てを委ねても良いのかもしれない。しかし教師という立場は「文化」として野放図に社会に放たれるべきではないとする考えは当然である。

しかし何をもって「教師」とするかは非常に難しい問題で一朝一夕に答えが導き出せるものとは思えないものの、生徒数に対して相対的に不要なほど「教師」が増えてしまったわが国としては、自己申告による舞踊教師マスプロを黙殺していただける状況にはなく、ドイツの試みを今後も注視して行く必要がある。

第二章 日本への受入事業 受入プログラムのレポート

1. 受入事業の概要

平成 28 事業年度におけるドイツへの派遣事業は、訪日団の人選をドイツ連邦ダンス連盟が、日本滞在中のプログラム企画並びに実施は日本バレエ協会がそれぞれ担当した。

受入に至るまでの経緯は第一章を、プログラムの詳細内容については後段レポートを参照願ひ、ここでは派遣事業内容の概要を記す。

■ 受入実施期間：

平成 28 年 5 月 1 日（日）羽田着、5 月 13 日（金）羽田より帰国。

本邦滞在期間は 12 泊 13 日間である。

■ ドイツ側パートナー団体について：

第 1 章第 2 項「関係者名簿」の「ドイツ側パートナーについて」＜P. 4-＞の項参照。

■ 来日メンバーと所属組織について：

第 1 章第 2 項「関係者名簿」の「受入事業（訪日団メンバー）」の項＜P. 4-5＞参照。

■ 受入プログラムのコンセプト

受入交流を開始するに際してまず紹介すべきは現代日本に於ける「舞踊（ダンス）」の諸相である。

それを紹介するにあたって幾つかの切り口が想定されるが、今回主に設定したのは以下の 3 点である。

- A. わが国固有の伝統文化として継承されている「舞踊」と、外来文化として特に明治以降流入した欧米由来の「舞踊（ダンス）」。
- B. 舞台芸術として“鑑賞”目的に供されている「舞踊（ダンス）」と、趣味や娯楽に供されている「舞踊（ダンス）」。
- C. 中・高・大学等に於ける「舞踊（ダンス）」教育と、民間教習所における「舞踊（ダンス）」教授。

まず A に関しては現代日本における「舞踊（ダンス）」の多様性を紹介する事を目的とし、B についてはわが国における「舞踊（ダンス）」の社会的位置づけを紹介する事を目的とし、C についてはわが国における「舞踊（ダンス）」教授・教習の現場を視察して頂く事を主な目的としている。

そしてこれら3つの切り口から現在のわが国に於ける「舞踊（ダンス）」の姿を浮き出させ、ドイツとの比較を容易ならしめる事をコンセプトとし、その他に必要なと思われる事柄に関する視察を加えてプログラムを構成した。（続く「受入プログラムの概略」に、それぞれの訪問先に前記AからCのどの意図を持ってセッティングしたかを記載した。）

■ 受入プログラムの概略

※ Dはその他意図

月 日	訪問・視察先	設定意図
5月1日（日）	来日・羽田空港に到着 顔合わせミーティング	
5月2日（月）	東京女学館中・高等学校	A・C
	<駐日ドイツ大使館>	<ドイツ側希望>
5月3日（火）	明治神宮春の大祭見学	A・B
	浅草界限	A・B
5月4日（休・水）	花柳千代稽古場	A
	小林紀子バレエシアター	A
5月5日（休・木）	スタジオ・アーキタンツ	C
	チャコット株式会社	B
5月6日（金）	芸能実演家団体協議会	D
	神楽坂セッション・ハウス	A・C
	セルリアンタワー能楽堂（能鑑賞）	A
5月7日（土）	都立総合芸術高校	
	歌舞伎座（歌舞伎観劇）	A
5月8日（日）	中間ミーティング	
	新国立劇場オペラパレス（バレエ鑑賞）	A
	レセプション	D
5月9日（月）	ゲーテ・インスティテュート	<ドイツ側希望>
	新国立劇場	D
5月10日（火）	法村友井バレエ団	A・C
	山村友五郎稽古場	A・C
5月11日（水）	大阪芸術大学	C
5月12日（木）	京都 金閣寺・銀閣寺・清水寺	A・B・D
	終了ミーティング	
5月13日（金）	帰国	

2. 日本での視察行程

5月1日（日）：来日

午後3時、ドイツ連邦ダンス連盟会長ドクター・ウーラ女史以下7名の訪日団が英国航空B A4600 便にて羽田空港に到着。

事務局小林の他、第一回訪独団メンバーだった両角佳津美、松村とも子、吉田まり、及び通訳のハイケ女史で出迎える。



新宿に移動の後、同駅から宿泊先の新宿ニュー・シティー・ホテルの送迎バスで同ホテルにチェック・イン。

荷解きの後、同ホテル内会議室にて日本バレエ協会会長岡本佳津子、副会長小林紀子、専



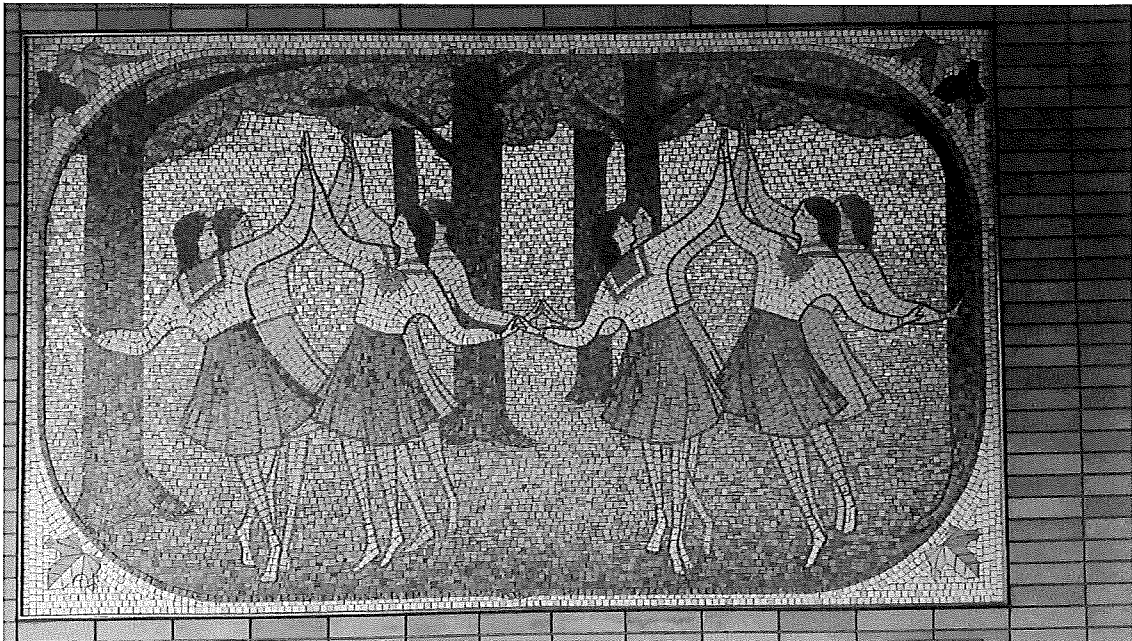
務高木俊徳を交え、双方の団体と個々人の自己紹介、ならびに今後のプログラムのスケジュール説明等が行われた。尚、初日の夕食は近隣の和風居酒屋でとった。

5月2日（月）：第1日目

午前中、渋谷の東京女学館中・高校を訪問。明治21年創立の同校には「カドリール」と「プロムナード」と呼ばれるダンス及び集団行動が創立当時から体育の授業に取り入れられ、高校3年生時には必ず踊るものとして（現在は体育祭の時）今日まで連綿と受け継がれており、同校に於ける貴重な、かつ誇るべき伝統となっている。

「カドリール」は17世紀、ルイ王朝時代のフランスに誕生した4人1組で踊る宮廷ダンスの一種であり「プロムナード」（仏：散歩）は集団によるいわゆる“行進”であるが、わが国では戦後主にアメリカ産（といってもそのルーツは各国に及ぶ）フォークダンスが学校教育の場に取り入れられたが、フランス生まれの古式の舞踊スタイルが現代に伝えられているのは希な例である。

フォークダンスが学校教育現場に取り入れられた理由には諸説あるものの、「男女七歳にして席を同じゅうせず」をもって徳となしたある意味女性蔑視的な教育制度を抜本的に改革し、男女同権による集団生活をわが国に根付かせようとのGHQの目論見によるとの説はあながち間違っているとは思われないが、逆にドイツではフォークダンス（ここでは伝統的なゲルマン民族舞踊の意味）がヒトラー・ユーゲントに代表される少年少女組織の国威高揚に利用された為、戦後、国粹主義的なものとして忌諱された時期すらあるとのこと。



同校のシンボルとなっているカドリールの壁画

我々は高校3年生生徒によるカドリールの練習風景を見学したが、訪日団の面々にとっても極東の島国にヨーロッパの古い様式のダンスが、それも女子校に伝えられていることに非常に関心を寄せ、特に音楽については専門的な蘊蓄を傾け論じ合っていた。

また指導教諭によれば生徒たちは高校3年になってこの踊りを踊れることに一種の憧れすら抱いており、踊る事に対する気恥ずかしさなどは殆ど抱いていないとのこと。

練習終了の後に校長室にて同校福原校長先生と生徒三名が訪日団メンバーと語り合う機会が設けられたが、生徒たちの言葉もそれを裏付けていた。

同校は開校以来、子女に対する作法しつけで有名であるが、茶道、華道等に並んで西洋ダンスが伝授されていることは象徴的であり、わが国ではダンスが明治の開化以降、鹿鳴館を

例にひくまでもなく西洋文明のある種の象徴として認識されてきたこと、そしてダンスは教育の一手段として学校教育の一部としても取り入れられた好事例であり、それが同校訪問の主目的であった。

尚、昼食は同校のお取り計らいにて校内学食で福原校長とご一緒に学食を頂いた。



高校3年生によるカドリールの練習風景

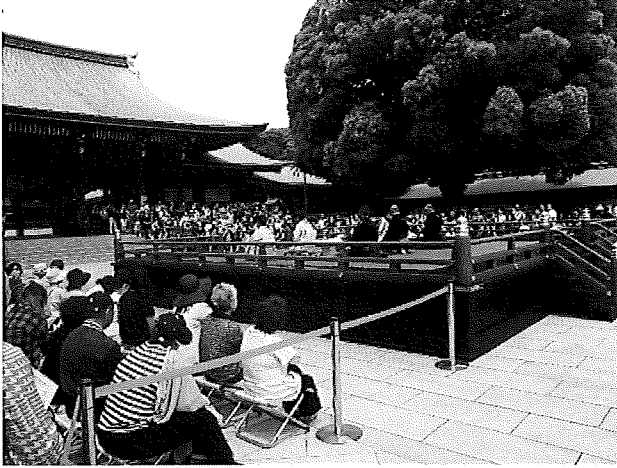


午後は訪日団メンバーは在日ドイツ大使館による行事に招かれており、日本側は同行していない。

5月3日（休・火）：第2日目

午前中、明治神宮で開催された春の大祭における郷土芸能奉納を見学。

見学の意図はわが国で最も古くから伝わる舞踊の様々な様式をご覧頂くことにあり、主だったところでは明治神宮崇敬会の方々による奉奏、神楽巫女舞「浦安の舞」の鑑賞を予定していた。



神楽は所謂神事奉納のための歌舞であり、記録に残るところで二千年近い歴史を持っており、その当初からスタイルが殆ど変化せずに現代まで継承されているものである事を解説。

しかしながら炎天下の屋外でしかも連休中の大変な人出となり、遠方から立ち見することしか適わず演奏も満足に聞こえない状態で早々に鑑賞を打ち切り、大鳥居付近で演じられていた舞囃子（恐らく重松流）を見物。

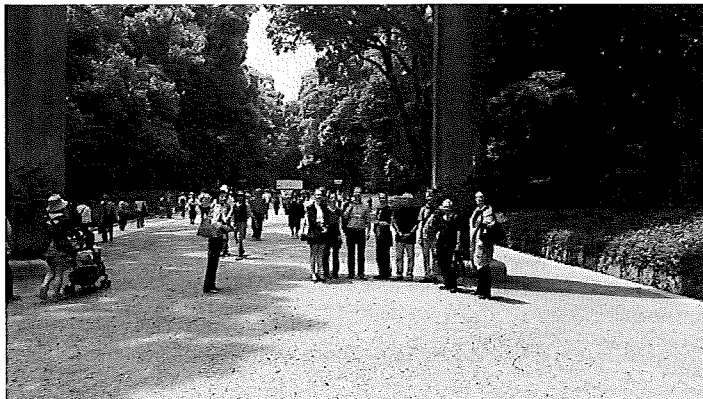
訪日団の面々は笛太鼓の軽妙なりズムに乗って白狐の面をして舞われる狐舞いに非常に



興味をそそられた様子、わが国では狐は神の使いとして崇拝される一方、憑依や化けるなど人に祟る存在として恐れられている事を伝える。また獅子舞では獅子はライオンからイメージされた架空の動物で中国経由でわが国に伝播し、獅子舞は縁起物として正月などに今でも盛んに舞われるものであることを伝える。

わが国には野生動物を擬人化し、その動きを模した踊りが数多く伝わっているが、その多くが何らかの祭礼と結び

ついていること、また宗教説話的題材に則ったものが多い事などもその場で伝える。



またわが国ではこの様な民間に伝わる舞踊の多くが「無形文化財」という国による保存保護の対象となり、古来の様式が継承される様に努めているが、人口の都市集中、農村の過疎化などで跡継ぎとなる踊り手が減少していることが問題視されている事を伝えたが、ドイツでは島国である日本と異なり、広大な

ユーラシア大陸の一部であるヨーロッパ諸国（というかユーラシア総ての国々）は、歴史的に民族すらも入り混じり、それぞれの民族固有の文化が減びたり、あるいは他民族文化と交じり合って新たな文化が生まれるという文化的興亡の繰り返しであること、同時にひとつの民族の居所がかならずしもひとつの国を形成して他民族との間に国境を形成している訳ではないという事情から、伝統的なものの保護は国家よりも民間が担う例が多いとの事。

その他、この大祭では能、狂言、三曲や薩摩琵琶なども演じられていたが、いずれも当協会の専門とするところではない芸能であるため、専門の解説者を同行すべきであったと反省した。

午後遅くから夕刻にかけて浅草を訪れ、高層ビル群が立ち並ぶ現代東京を離れ、つかの間、江戸情緒を味わって頂こうと思ったものの、仲見世通りは三社祭りを思わせるすさまじい人出で落ち着いた雰囲気は全く味わえなかったと思われる。



訪日団一行

写真右よりディータ・クノーデル、通訳ハイケ・パチケ、シモーネ・マイシュ、団長ウーラ・エレマン、カーチャ・ボルシェドルフ、サブリーナ・ソドヴァスカ、ラルフ・スターブル、ゲルト・ヘルツェルノの各氏

5月4日（休・水）：第3日目

昼過ぎより目白の花柳千代女史の稽古場を訪問。女史は日本舞踊の名高い踊り手であるのみならず一対一の対面指導、徒弟相伝が原則の日本舞踊をメソッド化してその基礎をわかりやすく解説することで特に若い世代にその普及を図る活動を推進し、またそれから派生して日本舞踊の海外紹介にも積極的に取り組んでいることでも知られ、今回の訪問に際してはわざわざドイツ語の資料まで作成してお迎えして下さいました。

訪問の目的は言うまでも無く日本舞踊の紹介であり、女史には日舞の最も基本的な所作や扇子の持ち方など手ほどきを受けた後、同門子弟による長唄、琴曲を鑑賞、最後に名人花柳貴彦氏による義太夫「萬歳」を鑑賞。

懇切丁寧な女史による解説と完璧なドイツ語資料により訪日団の面々も日本舞踊と西洋舞踊の基本的な違いを実感した様子であり、後半に訪問した山村流家元の稽古場での体験レッスンと合わせて極々概略ではあるが日本の伝統的ダンスに触れられたことに興味深か気であった。



日舞を一見して動きが非常に緩やかである事、摺り足が基本で両足が床から離れる（ジャンプ）事が無い事、上半身と手首（腕）の表現が非常に多彩である事など日舞の特徴をドイツ側の面々は即座に指摘してきたが、加えてこれだけの複雑な動きの踊りを長い作品の中でどうやって覚えるのかという事に興味を持って質問していたのが印象的であった。

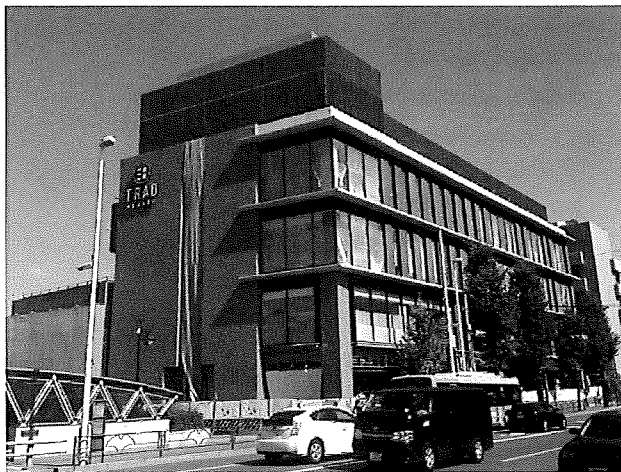
扇子の使い方を体験



花柳貴彦氏による義太夫「萬歳」の演技

続いて同じく目白で花柳女史と「目白三人会」を結成しており、当協会副会長小林紀子率いる小林紀子バレエシアターを訪問、同シアターの施設、レッスン風景を見学した後、小林紀子がわが国代表を務める英国RAD（ロイヤル・アカデミー・ダンス）のわが国における普及の実情などを聞く。

わが国において現在は伝統的な日本舞踊よりも従事し、習う人口が多いクラシック・バレエは、西欧生まれながらその実、今やわが国を代表する「舞踊」となっており、世界の桧舞台で活躍する日本人ダンサーは枚挙に暇が無い程である。実際、訪日団の一人であるサブリナ女史が主宰するケムニッツのバレエ団には日本人ダンサーが2名所属しているそうで、ドイツ側もわが国でバレエが非常に盛んであることの知識は持ち合わせていた。



しかしながらその教育が殆ど総て民間で行われており、国立のバレエ学校が存在しない事（新国立劇場バレエ研修所は彼らの基準ではバレエ学校ではない）、国公立のバレエ団に至ってはたった一つしかないことなどは知っておらず、この小林紀子シアターの様な民間カンパニーが日本バレエの原動力である事を伝えたが、かなり意外そうであった。

小林紀子バレエシアターの入るビル

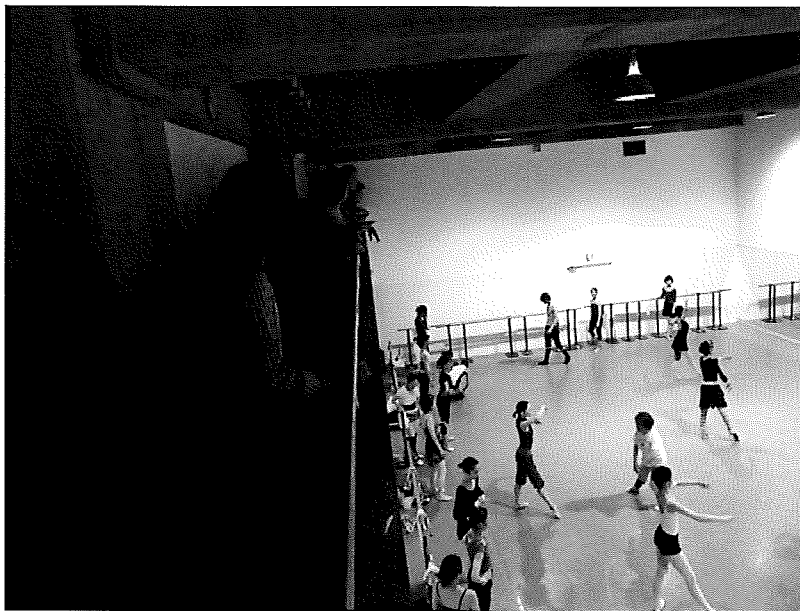
5月5日（休・火）：第4日目

午前中、田町のスタジオ・アーキタンツを訪問。

現在、わが国の各種バレエやダンスの教習所は、ダンサーが主宰者の個人経営スタジオと、スペースを提供して様々な種類のダンスが学べる複合教習所の2種類に大きく分かれる。

そしてその種の複合施設の中には、単にスペースを提供するだけでなく独自の企画事業を行うところもあり、その代表が都内ではこのスタジオ・アーキタンツと翌日訪問するセッション・ハウスである。

まず様々なダンスの教習所機能としては物価の高い都内に自らの稽古場を建てるより安い費用でスタジオを確保出来るという教えた側のニーズと、様々なジャンルのダンスを、様々な教師の中から選んで受講できるという習いたい側のニーズが一致しており、このスタイル自体はわが国の場合、かなり以前から所謂カルチャー・センターやスポーツ・クラブで取り入れられていたのだが、カルチャー・センターやスポーツ・クラブの客層はどちら



かと言えば趣味としてダンスを楽しみたい、あるいは習い事としてダンスに取り組んでいる主婦層や子供が中心であった。それに対してこのスタジオ・アーキタンツやセッション・ハウスなどはプロを志す層やセミ・プロ、あるいはプロのダンサーをターゲットとして運営されており、そのため教師も海外から著名な人物を招聘したり、あるいは招聘した教師による独自企画のワークショップなどを行っている。



一応の施設見学の後、同スタジオ代表福田氏（本職は建築家であり、それ故“アーキ”の名称が用いられている）からこのスタジオのコンセプトについての説明を受けた。

午後は勝どきにあるチャコット株式会社の経営するダンス・カフェを訪問。

同社は昭和25年創業のわが国最大かつ老舗のダンス用品専門メーカーであり、言ってみればわが国バレエ・ダンス業界をずっと横から眺めてきた立場にある。

昼食を取った後に、同社の吉野広報部長より同社から見たわが国ダンス界の変遷を語って頂く。



創業当時、扱う商品はバレエ用品のみであり、店舗も1店舗を構えるのみであったが、昭和30年代のバレエ・ブームに乗って急成長、平行してソーシャル・ダンス用品も扱い始め、昭和50年代にはエアロビクスを中心とする所謂フィットネス・ブームで更なる成長を遂げ、現在では国内外に数十店舗を構える大企業であるが、それでも今世紀に入ってからインターネットの普及で無店舗販売の同業者が多数現れ、以前はほぼ業界独占状態であつ

たものの今は競合も多いとの事。

特にわが国ダンスの様相は、昭和50年代のフィットネス・ブームで大きく様変わりし、それまでの子女の習い事としての位置づけが一気に大人社会に拡大し、健康志向と相まって様々なジャンルのダンスが大人社会に浸透し始めたとの事。曰くジャズ・ダンス、フラメンコなどの従来から存在はしていたジャンルが拡大し、フラダンス、ベリーダンス、レゲエなどそれまでは極特殊な人しか習っていなかったジャンルが表に表れてきた等々、直接ダンスに従事している我々よりも幅広く、また経済・社会現象的観点からの長年に亘る観察は、我々日本人にとっても興味深いものであった。



チャコット勝どきダンス・カフェ



店舗内に併設されたダンス・スタジオ

夜は第一回訪独団メンバーの諸角宅でホーム・パーティーを行った。ドイツ側からは直前にホーム・ステイを希望されたが諸般事情で間に合わず、このホーム・パーティーとなった。

5月6日（金）：第5日目

午前中、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会、通称芸団協を訪問。NPO法人芸術家の薬箱代表の福井女史にもご同席頂いた。芸団協からは事務局の米屋女史が応対して下さいました。

訪問の目的は、わが国における芸能実演家（舞踊家を含む）の権利が如何に拡張され、かつ守られているかを知って頂く事であった。

しかしながらアーティスト・ユニオン制度が発達している欧米に対し、現状わが国では音楽著作権管理（JASRAC）を除いて芸能実演家の権利保護と拡張のための組織としてはこの芸団協しかなく、制度的にも組織の多さから言ってもドイツの方がかなり取り組みが進んでおり、ドイツ側からの鋭い質問に日本側が「残念ながらその方面はまだ手つかずで」と答えざるを得ない局面がしばしばあった。



またNPO法人芸術家の薬箱はダンサー・音楽家・俳優・スタッフのヘルスケアをサポートし、芸術家と医師・治療師・トレーナーをつなぐ特定非営利活動法人で、わが国では稀有な存在である。

そうした活動を行っている団体がNPOとしてしか存在していないこと自体がわが国のこの方面での後進性を象徴しているのかもしれない。

午後は先日のスタジオ・アーキタンツと同様の神楽坂セッション・ハウスを訪問。

スタジオ・アーキタンツの項でも触れたが、このスタジオも主にダンサーや俳優、パフォーマンス・アーティストなどを志す若い世代を対象に、様々なジャンルのダンス・クラスを設け、かつ独自企画のミニ公演なども行っている。

今回の訪問目的は、わが国舞踊界でも現在最も異彩を放ち、世界的に見ても特異なダンス（パフォーマンス）を展開するコンドルズ率いる近藤良平氏のワークショップを見学することであったが、訪日メンバーの内、二人の女性が実際にワークショップを体験する事になった。

欧米からダンスという概念がわが国に持ち込まれて100有余年、わが国で創作された最先端のダンスの姿と、その独特な指導 — 指導と言うよりも如何に受講者一人ひとりに自分なりの世界を引き出し、構築させるかの暗示めいた誘導 — は、所謂インプロビゼーション・トレーニングとも異なり、氏のそれは言葉の持つイメージと身体表現を直結させ、そこに生まれる偶然的かつ非恣意的な表現を重視するダンスと見受けられ、その分野の舞踊の草分けでありモダン・ダンス、コンテンポラリー・ダンスのメッカと呼んで差し支えないドイツの関係者たちも非常に興味深く体験、及び見学していた。



遅い昼食をセッション・ハウス代表の鈴木氏ご夫妻、近藤良平氏を交えてダンス談義に花を咲かせた後、渋谷セルリアンタワー能楽堂にて素囃子による高砂、東北、紅葉狩、大蛇、石橋、猩々乱の6演目を鑑賞。いずれも舞囃子の名作であるが如何せんお能の事、スローモーな動きとまた素囃子であるために視覚的にも地味で退屈してしまったのではと危惧したが予想に反してある程度物語も理解できて楽しめたとの感想を頂いた

5月7日（土）：第6日目

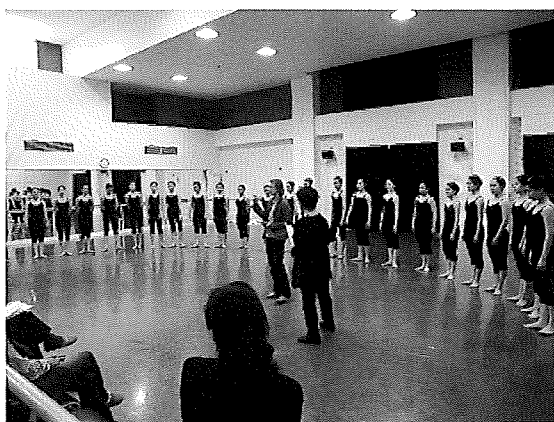
都立芸術総合高校を訪問。

同校はわが国では非常に珍しい芸術分野の公立高校であり、絵画、彫刻、音楽などの他、舞踊コースを設けている。

まず校長室にて市川校長の他、教員の方2名を交えて懇談、同校の沿革、教育理念などのお話を聞く。



続いて舞踊コース（このコースはモダン・ダンス科とクラシック・バレエ科に分かれている）のモダン・ダンス科の生徒たちによるパフォーマンスを見学。

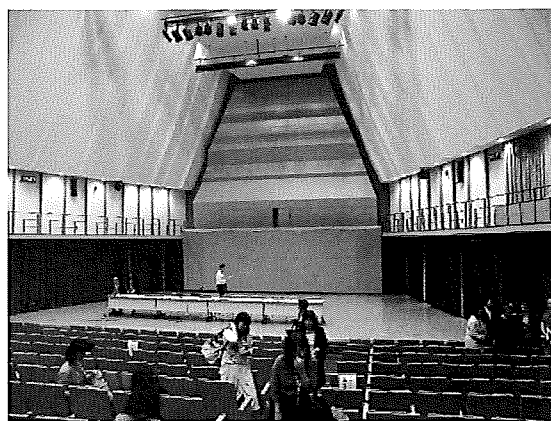
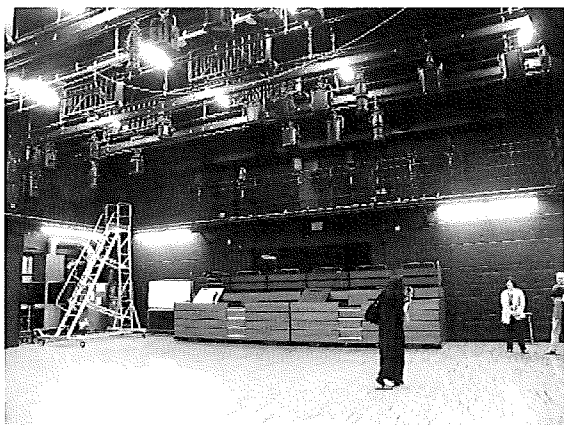


訪日団の面々は一様にそのレベルの高さに驚いておられたが、演技終了後の生徒たちとの懇談が何よりも重要であった。

わが国ではプロのダンサーを目指すには、国公立のバレエ学校が無いいため義務教育の小・

中学校に通いながら市井のバレエやダンス・スタジオに通って平均週2回から4回程度のレッスンを受け、バレエの場合なら高校生以上になればコンクールに挑戦して上位入賞できる実力がついていれば海外のバレエ学校留学、または国内バレエ団の下部組織に移籍し、プロへの道を目指すのが一般的である、と言うかそれしか道が無い事、またバレエやダンス教師を志すのにわが国では何ら取得すべき資格が無く自称すれば構わない事など、我々関係者の口からではなく実際にその只中にある生徒の口からドイツ側が取材できた事に大きな意味がある訪問であった。

尚、この高校は都立であるため基本的な授業料は無料だがドイツでも公立の学校は学費無料との事。また生徒たちとの懇談の後、学内の施設を見学したがドイツでも希な程、充実した施設であるとの感想を漏らしていた。



夕方からは歌舞伎座にて團菊祭五月大歌舞伎を鑑賞。出し物は勢獅子音羽花籠、三人吉三巴白波、時今也桔梗旗揚、男女道成寺であったがたまたまこの日は尾上菊之助の2歳の長男・寺嶋和史が勢獅子音羽花籠で初お目見得の登場をして和ませた。訪日団のウーラ団長は以前の来日時に見た歌舞伎が非常に長く難解であったと事前に漏らしていたが、今回は事前に白波三人衆や明智光秀謀反の話をしておいたためか全員が非常に楽しめた、舞台はきらびやかで美しく、演技も舞いも素晴らしかったと外交辞令抜きで言って頂けた。

やはり歌舞伎は対外的にわが国を象徴する芸能であると実感した次第である。



5月8日（日）：第7日目

午前中、協会事務所で日独合同中間ミーティングを行う。

今までのプログラムに脈絡が欠けていたとの反省から内容の整理を行い、事前に渡してある訪問先資料に基づいてプログラムの趣旨・目的を個別の訪問先ごとに再度説明した上でドイツ側からの質問を受ける。



質疑の主だった点は以下に集中した。

- Q. 現代の日本に於いて様々なジャンルの舞踊が興隆している事は理解できたがそのそれぞれの舞踊ジャンルに舞踊手のレベル（技能水準）を認定する制度があるのか？
- A. 外来舞踊の世界では統括団体が認定を行っているケースも希にあるが、ほとんどその様な制度はない。但し伝統芸能の世界には厳然とした位の設定がある分野が多い。
- Q. それぞれの舞踊ジャンルに教師資格を認定する制度があるのか？
- A. 外来舞踊の世界では統括団体が認定を行っているケースも希にあるが、ほとんどその様な制度はない。但し伝統芸能の世界には厳然とした徒弟制度が存在し、教授資格は上位の者が認めた者しか持てない分野が多い。
- Q. 舞踊科のある大学があるという事だが、そこを卒業することが舞踊教師の資格になるのではないか？
- A. 大学には教職課程というプログラムがあるが、それはあくまでも小・中・高の教員になるための資格認定制度で、舞踊科を卒業しても舞踊教師の資格が与えられる訳ではない。そもそも公による「舞踊教師資格」という概念が日本には存在しない。

Q. 希な例ではあるが教師資格の認定を行っている舞踊団体もあるそうだが、こういった方法を用いて行って認定を行っているのか？

A. 我々が知る限り、ソシアル・ダンスの協会と現代舞踊協会には教師資格の認定制度があるが詳しいことは言えない。ちょうど現代舞踊協会の会長と皆さんが会える機会を今夜設けてあるので直接聞いてみてほしい。

Q. プロの舞踊家の主な収入源は何か。

A. ジャンルによってばらつきはあるものの、大方は教授業である。わが国においては「踊ること」だけで生活するのは殆ど不可能に近い。伝統芸能の分野は比較的手厚く公によって助成が成されるが、外来舞踊のジャンルは公演でも「持ち出し」になる事が頻繁である。

このミーティングの後、午後からは新国立劇場にて新国立劇場バレエ団公演「ドン・キホーテ」を鑑賞。わが国唯一の国立バレエ団の演技をご覧頂き、ヨーロッパ生まれのクラシック・バレエが、極東の地で如何に花咲き、高いレベルに達したかを知って頂く事を目的とした。

夜は六本木の国際文化会館で日本側舞踊関係者と訪日団のレセプションが開催された。日本側からはクラシック・バレエ界のみならず現代舞踊界、日本舞踊界からも関係者が出席し、様々な会話が成された。前段で触れた様に舞踊教師の資格認定の方法についてはドイツでも非常に試行錯誤しているとのことで、現代舞踊協会の花輪会長からは同協会の方法についてウーラ団長、クノーデル副団長が熱心に取材していた。



レセプション記念写真

5月9日（月）：第8日目

午前中、ドイツ側の希望で青山のゲーテ・インスティテュートを訪問。日本側は同行しなかったなので訪問内容等は不明。



ゲーテ・インスティテュートはドイツ語とドイツ文化の海外紹介機関として古くから有名であるが、自国文化の海外普及という分野ではわが国は残念ながら欧米に比べてそのスタートがかなり遅かったと聞く。同じ第二次世界大戦の敗戦国でありながらその差は、自国文化に対する誇りの差かとも思われる。

ゲーテ・インスティテュート

午後からは新国立劇場を見学。

言うまでも無く同劇場は皇居脇の国立劇場（こちらは伝統芸能を専門に上演）に対し、オペラ、バレエ、演劇など外来舞台芸術専門の劇場として平成9年にオープン、名実共にわが国最高の設備を備えた劇場である。



訪独団はこの劇場の諸設備を当協会副会長小林紀子の案内で見学。

続いて新国立劇場バレエ研修所で学ぶ研修生のレッスンを見学。研修所所長の牧阿佐美女史、永田宣子研修主管との質疑応答を行い、同研修所の現状などについて説明を受けた。

新国立劇場

ドイツにおいてもわが国と同様、戦災によって古い劇場施設の大半が被害を受け、外観は伝統的様式を残して改修されたものが殆どで、そのため構造上の制約から最新の舞台効果機材の導入が出来ないなど若干の不便もあるとのこと。

夕方6時半、東京での全プログラムを終え、品川駅より大阪に新幹線で移動。

5月10日（火）：第9日目

当協会理事の法村牧緒主宰の法村友井バレエ団を訪問、来月に迫った「ドン・キホーテ」公演のリハーサルを見学。過日の小林紀子バレエ・シアターもそうであるが、わが国クラシ

ック・バレエは新国立劇場バレエ団が出来ずずっと以前よりこの様な民間バレエ団の力で成長してきたことを伝える。

現在日本にはバレエ団を名乗る団体が全国に50近く存在するが、その総てが東京・大阪・名古屋のいずれかの都市を拠点としており、バレエ団として拠点を劇場に置くことが出来ているのは新国立劇場バレエ団を除いてわずかひとつ（東京シティ・バレエ団）だけであり、主要都市にあるオペラ・バレエ劇場に付属のバレエ団がほぼ存在する欧州とは大いにわが国のバレエ団が置かれた立場は異なること、そしてダンサーたちはバレエ団からの俸給で生活するのではなく殆どの者がバレエを教えることを主な収入源とし、殆ど総てのバレエ団に於いてバレエ団員自身がノルマとして持たされたチケットを売らなければならないという現実を伝えざるを得なかった。

それは相当彼らの印象に残った様で、別の機会に聞いたところではドイツでも舞踊手の立場は決して恵まれてはいないが、少なくともチケット・ノルマが無いだけマシだということであった。

リハーサル終了後、短時間ではあったが訪日団とダンサー達が質疑応答。

たとえ上記の様な環境にあっても自分たちは踊ることが好きだから、という言葉に関係者として救われた思いがする。



続いて上方日本舞踊の山村座山村友五郎氏の稽古場を訪問。

一口に日本舞踊といっても幾つかの流派があること、日本舞踊界では徒弟制度が厳然と維持されている事などを事前知識として伝えておいたが稽古場では訪日団全員が日舞の簡単な所作、歩き方などを体験、更には立ち座りなどを体験。

ゆっくりした動きから簡単そうに見える見た目と異なり、実際にやってみると非常に難



しいことを身をもって実感して目から鱗の様子であった。

山村氏は上方舞山村流家元として120年ぶりに流祖襲名、明日訪問予定の大阪芸術大学でも教鞭をとっておられる。

尚、上方舞とは江戸の歌舞伎踊りとは異なり、主に酒宴などの座敷で踊られたことから座敷舞とも呼ばれており、また関西では商家の子女の行儀見習いの習い事として盛んであったもので表現は適切ではないかもしれないが実用的な踊りの流れである。

それ以上になると別物であることは比較的良く知られているものの、その違いとなると門外漢では殆ど説明のつかない「舞」と「踊り」の違いに言及せざるを得なくなるのかもしれないが、そこまでの知識はドイツの人々に必要ないこと故、ホスト役としては山村氏に説明は請わなかった。

5月11日（水）：第10日目

阿倍野駅より大阪芸術大学のある喜志駅へ近鉄電車で。

同大学は関西屈指の舞台芸術方面の学部を備えた総合芸術大学であり、その他に美術、デザイン、写真、建築、映像、音楽、放送など多岐に亘る分野の人材を育成している。



我々は同大学旗と共に掲揚されたドイツ国旗、日章旗に迎えられて広大な自然豊かなキャンパスに足を踏み入れ、同大学准教授を務める著名なダンサーであった堀内充氏、並びにTV俳優として知られた浜畑賢吉舞台芸術学科長の案内で校内を一巡、大学の運営方針、教育理念などのお話を聞く。



学内の映画映写室



ヒップホップ・クラス



放送学科学生による学内TVの取材を受ける



大学側がご用意して下さった昼食を挟み、午後からは堀内充氏がプロデュースして下さった舞台芸術学科舞踊コースの学生による「国際交流舞踊公演」と銘打たれたパフォーマンスを鑑賞。

作品は堀内氏と加藤きよ子女史によるバレエ、ダンス、及び前日訪問した山村友五郎氏による創作日舞の3本であった。

公演終了後、学生達としばし歓談。



訪日団のメンバーの全員が大学や大学のサークル活動で学生を教える立場にあるため、日本の学生達に対しても非常に親近感を覚えていた様であった。

ドイツの場合、基本的に大学は将来就くべき職業のスキルを学ぶ準備機関的意味合いが強いそうで、わが国の一般総合大学の学生の様に専攻した学部之余り関係なく就職先を選ぶのとは大分趣を異にする。

しかしながら同大学の様に専攻分野がはっきりと限定されている大学に入学する生徒は将来に対する志向性を持って入学してくる訳で、技術分野は別にして芸術分野を志向している学生にとって将来は総て自己責任という環境は、ある程度の職業上の資格認定制度が芸術分野の大学にあっても設けられているドイツに比べてかなり弱い立場にあると言わざるを得ない。

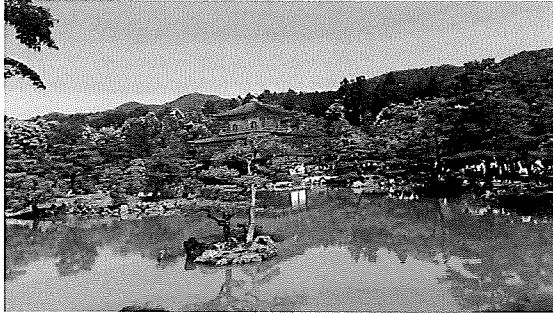


しかしその問題を考えるに当たっては入学制度、入学選考方法までにも考えを及ぼさざるを得ないと思われ、大学に於ける芸術分野の教育については広く世界各国に事例を求める必要があるだろう。

見学を終え、夜の列車で最終訪問地の京都に移動。

5月12日（木）：第11日目

京都ではわが国における伝統的舞踊が古来宗教的意味合いを持って成立、継承されてきた事、やがてそれが娯楽としての意味合いを持つ方向（所謂お座敷技芸など）、祭り等の大衆文化の重要な構成要素（阿波踊りや盆踊り）



に分化して行った様子が見聞できる所を訪ねたかったが滞在時間の関係からわが国伝統文化を常に大きく特徴づける契機となった北山・東山両文化の象徴、鹿苑寺と慈照寺、並びに世界的にも類例を見ない奉納舞用舞台にも供された大規模高台を持つ世界遺産清水寺を見学した後、午後の新幹線で東京に。



品川のホテルにチェック・インの後、協会事務所にて日本側と最終ミーティング。今回の受入プログラムに関する総括的話し合いとなったが、次回の交流を見据えてドイツ側から出された要望。希望は以下である。

- ・ 今回の訪日では日本の舞踊界が日本古来の伝統に根ざしたものとヨーロッパからもたらされた舞踊とその進化形が混在し、多種多様な舞踊が花開いていることはわかったが、それぞれの舞踊手の育成方法がもう少し具体的に知りたかった。
- ・ 特に子供（10代未満から10代前半）への舞踊教育・指導現場の視察が今回適わなかったのが残念である。
- ・ 舞踊が一般社会の中で「鑑賞する対象」として位置づけられているのは良くわかったがその他の面、例えば自分で踊って楽しむものとしての日本における舞踊の側面が知りたかった。たとえば現在、世界的にブームとなっているヒップ・ホップやストリート・ダンスは日本でも流行っているのか。
- ・ たとえば日本には人々がお祭りの様なときに大勢で着物姿で音楽に合わせて踊る踊りがあるのをTVで見たことがある。（恐らく阿波踊りか盆踊りと思われる）完成された舞台芸術としての舞踊以外の一般民衆の中で踊られている踊りを知りたかった。
- ・ 芸術高校や芸術大学での舞踊専門コースは視察できたが一般の学校や大学でダンスは

どの様な位置づけにあるのかを知りたかった。

- ・ホームステイの機会が無かったのが多少残念である。

等であった。また最終的に話題になったのは本年の日本側訪独時期の調整の問題であり、結局結論は出ずに双方関連省庁と打ち合わせという事になった。＜結論としては平成 29 年 1 月の訪独となった＞

その後、お別れパーティーを兼ねて付近の蕎麦店へ。



5 月 1 3 日（金）： 帰国日

品川プリンス・ホテルより空港バスで羽田空港へ。

午前 1 1 時 2 0 分発英国航空 B A 4 6 0 3 便で訪日団メンバーは無事帰国の途についた。

第3章 ドイツ派遣団のレポート 派遣プログラム

1. 派遣事業の概要

平成 28 事業年度におけるドイツへの派遣事業は、派遣団の公募並びに人選を日本バレエ協会が、ドイツ滞在中のプログラム企画並びに実施はドイツ連邦ダンス連盟がそれぞれ担当した。

派遣に至るまでの経緯は第一章を、プログラムの詳細内容については後段レポートを参照願ひ、ここでは派遣事業内容の概要を記す。

■ 派遣実施期間：

平成 29 年 1 月 15 日（日）羽田発、現地時間 1 月 15 日 19 時フランクフルト着。
現地時間 1 月 28 日 15 時 25 分ミュンヘン発、平成 29 年 1 月 29 日（日）羽田着。
ドイツ滞在期間は 13 泊 14 日間である。

■ 受入担当団体について：

第 1 章第 2 項（P. 4）「関係者名簿」の「ドイツ側パートナーについて」の項参照。

■ 日本からの派遣者について：

第 1 章第 2 項（P. 4）「関係者名簿」の「派遣事業（訪独団メンバー）」の項参照。

■ 事前研修会の実施（平成 29 年 1 月 14 日）

事業実行委員、訪独団メンバー 7 名出席の上、当協会東京都品川区五反田 7-17-5 宮下ビル 3 階の事務所にて事前研修会が開催された。

2015 年秋に実施された派遣事業に於いて訪日独団が作成した報告書によれば、前回ドイツ側が組んでくれたプログラムは概ねドイツに於ける舞踊の多様性をまず紹介する事を趣旨とし、その上でドイツには観賞を目的としたプロの舞踊手による「舞踊芸術」と、主に民間に伝承された舞踊、あるいは近代においては「踊る」目的以外の目的を持って多方面に応用されている舞踊を含む「舞踊文化」の二つの潮流が厳然としてある事を示してくれたと考えられる。

今回の訪問ではドイツ側による多様なプレゼンテーションに対応したわが国舞踊の現状を、比較対比してわかりやすく説明するためのディスカッションを行った。

またドイツ側が特に力を入れて見せて下さったのは各種舞踊の教育現場であるが、義務教育期間から高校、大学まで含めて私立、国公立を問わず舞踊が履修できる場所が極めて少なく、舞踊は特殊な、希望者だけが履修するものとしてほぼ市井に委ねられているわが国と、舞踊がある程度、一般的教育分野のひとつとして市民権を得ているドイツ

とで既に違いが明らかな上でどこに会話、討論の糸口を求めるかが事前研修では大きな課題となった。

事前研修会内容

日 時：平成 29 年 1 月 14 日（土） 14～16 時

会 場：公益社団法人日本バレエ協会会議室（東京都品川区五反田 7-17-5 宮下ビル 3 階）

出席者：訪独団メンバー、日独交流事業実行委員

	実施内容
14：00	開会の挨拶 日本バレエ協会会長 岡本佳津子
14：10	派遣者の自己紹介
14：15	前回訪独時の経験、課題、教訓等を諸角、松村、若佐から報告。 上記件に対して質疑応答
14：40	ドイツ側とのディスカッション・テーマの設定
15：00	ドイツ連邦ダンス連盟。及び受入担当者の紹介（今回初派遣メンバーに） 訪問先に関する個別組織の把握出来た範囲での概略説明 及び旅行保険についての説明 日本バレエ協会事務局 小林秀穂
15：30	派遣団メンバー間の打ち合わせ ※ 滞独中のメンバーの役割分担について ※ 訪独レポート作成、及びその分担について
15：55	閉会の挨拶 日本バレエ協会副会長 小林紀子



2. ドイツでの概略行程

	月/日	訪問地	視察先 研修内容
1	1/15(日)	東京～ フランクフルト	・15:20pm 羽田空港出発 (ルフトハンザ航空 717 便) ・19:00pm フランクフルト到着 ・ホテル到着後にミーティング
2	1/16(月)	フランクフルト	・フランクフルト音楽舞台芸術アカデミー
3	1/17(火)	フランクフルト～ ドレスデン	・午前中、ICE にてドレスデンへ移動 ・宿泊地ドレスデン工科大学ゲストハウスへ ・ハインリッヒ・シュッツ記念コンセルヴァトワール
4	1/18(水)	ドレスデン	・パルッカ芸術大学 ・ティア・マアス・フォークダンスアンサンブル
5	1/19(木)	ドレスデン	・ヘレラウ：ヨーロッパ芸術センター ・青少年ダンススタジオ
6	1/20(金)	ドレスデン	・午前中自由行動 午後ザクセン州立歌劇場見学 ・青少年ダンススタジオを再び見学 ・シエルカウイ公演『BABEL』を鑑賞
7	1/21(土)	ケルン	・ケルンへ飛行機で移動。 ・ケルン体育大学ゲストハウス到着後にミーティング ・ゲストハウスのレストランにて懇親会
8	1/22(日)	ケルン	・ケルン市内視察
9	1/23(月)	エッセン-ヴェルデン	・フォクルヴァング芸術大学 ・エッセン州立ヴェルデン・ギムナジウム
10	1/24(火)	ケルン	・ノルトライン＝ヴェストファーレン州立 応用科学カトリック大学 ・ケルン・ドイツ連邦体育大学 授業参加 ・エイリーⅡ 公演鑑賞
11	1/25(水)	フェルバート エルフトシュタット	・フェルバート私立ランゲンベルグ・ギムナジウム ・カルト・ステージダンス・スクール
12	1/26(木)	ケルン デュッセルドルフ	・ランゲン・インスティテュート ・ダンスハウス nrw
13	1/27(金)	ケルン ヒュルト	・午前中自由行動 ・ヒュルト市長表敬訪問 ・ザビーネ・オーデンタール・ダンス・スタジオ ・研修フィードバック
14	1/28(土)	ケルン ミュンヘン	・13:05pm ケルン空港出発(ルフトハンザ航空 1987 便) ・15:25pm ミュンヘン空港出発 (ルフトハンザ航空 714 便)
15	1/29(日)	東京	・羽田空港到着後に解散

3. ドイツでの行動地図



4. 訪独研修スケジュール詳細

1月15日（日） 東京→フランクフルト：晴れ

- 13:00 羽田空港 国際線ターミナル集合
- 15:20 ルフトハンザ航空 717 便出発
- 19:00 フランクフルト空港に到着
- 20:00 ウラ・エレマン氏、ディター・クノーデル氏、ハイケ・パチケ氏が出迎え
- 20:30 フランクフルト中央駅下車。駅前のホテル・エクセルシオールにチェックイン
- 21:00 夕食を兼ねてミーティング
エレマン氏より研修プログラムの紹介。訪問団新規メンバーの自己紹介。
- 23:30 解散

1月16日（月） フランクフルト：晴れ

- 9:00 ロビー集合、出発
- 9:10 フランクフルト中央駅から Hauptwache 駅経由 Grunenburgweg 駅へ
- 9:30 フランクフルト音楽舞台芸術大学到着
- 9:45 学部長達と面会
- 10:00 フロアーバー、バーレッスン見学後、教師とディスカッション
- 12:15 学生食堂で昼食
- 13:00 フォークダンスクラス見学。ディスカッション
- 14:30 コンテンポラリーダンスクラス見学。教師および生徒とディスカッション
- 16:30～18:15 学部長と懇談
- 18:20 電車で Schweitzer 駅まで移動
- 19:00 夕食
- 20:35 ترامでフランクフルト中央駅へ
- 21:00 ホテルに戻り、解散

1月17日（火） フランクフルト→ドレスデン：曇り

- 8:45 ホテルチェックアウト
- 9:19 ICE1557 でドレスデンへ移動
- 13:25 ドレスデン中央駅到着
- 13:35 ترامで移動、Reichenbach 駅下車。雪の中、スーツケースを運ぶ。
- 14:00 ゲストハウスに到着、チェックイン
- 14:35 ドレスデン工科大学内食堂で昼食
- 15:35 ترامで Nurnberger Platz 駅より Albertplatz 駅に移動
- 16:00 ハイน์リッヒ・シュッツ記念コンセルヴァトワールに到着
- 16:20 子供クラス（5, 6 歳）を見学
- 17:00 教師とディスカッション

- 17:30 コンテンポラリークラスとコンクール受賞作品を見学。学生とディスカッション
- 20:10 ドレスデンの北地区(戦争被害が少なかったため古い住居が多く残る)を散策
- 21:00 北地区内のレストランで食事
- 22:40 ترامでドレスデン中央駅まで行き、徒歩でゲストハウスまで移動
- 23:25 解散

1月18日(水) ドレスデン：曇り

- 8:20 集合、出発
- 8:30 ترامで Technische Universität 駅より Tiergartenstrabe 駅へ
- 8:45 パルッカ舞踊大学到着
- 9:00 広報担当者より、大学の概要、教育システムなどの説明を受ける
- 10:00 施設内(寮、衣装部屋)見学。授業参観。
- 12:25 学内食堂で昼食
- 13:30 学内図書館を見学
- 14:00 授業見学後、教師陣とディスカッション
- 17:00 ترامで Technische Universität 駅へ戻る
- 17:30 ドレスデン工科大学内食堂で夕食
- 18:15 食堂隣の部屋でティア・マアス・フォークダンスアンサンブル見学
- 19:40 徒歩で宿舎に戻り、解散

1月19日(木) ドレスデン/ヘレラウ：晴れ

- 8:50 集合、出発
- 9:00 ترامで Reichenbach 駅 よりヘレラウへ。
- 9:25 到着
- 9:30 ヘレラウのヨーロッパ芸術センターで芸術監督と面会
- 11:50 ترامでドレスデン市内に戻る
- 12:50 昼食
- 14:00～15:20 まで自由行動。各自市内を視察
- 15:30 ترامで Synagoge 駅からドレスデン中央駅まで戻る
ドレスデン工科大学にて青少年ダンススタジオのレッスンを見学
- 19:00 市内に戻り夕食
- 22:00 ترامでゲストハウスに戻る
- 22:25 解散

1月20日(金) ドレスデン ヘレラウ：晴れ

- 午前中 ドレスデン市内自由行動、各自で昼食
12:45 ザクセン州立歌劇場前に集合
13:00 歌劇場見学ツアー
14:30 ترامでドレスデン工科大学に移動
15:00 青少年ダンススタジオのパフォーマンスを観賞
18:40 ترامでヘレラウのヨーロピアン芸術センターに移動
20:00 シェルカウイ作品『BABEL』を観賞
22:30 ترامでゲストハウスに戻る 23:30 解散

1月21日(土) ドレスデン→ケルン：晴れ

- 8:00 集合、トラムとドイツ鉄道(ドレスデン中央駅から Flughafen へ)を乗り継ぐ
10:55 ドレスデン空港出発
12:00 ケルン空港に到着
13:00 マイクロバスにて移動
13:35 ケルン・ドイツ体育大学ゲストハウスに到着
14:00 ゲストハウスで昼食。今後のスケジュールについてミーティング
18:30 ゲストハウスのレストランで懇親会
21:30 解散

1月22日(日) ケルン：晴れ

- 10:50 ロビー集合。ケルン市内視察に出発。市電で Junkersdorf 駅から Heumarkt 駅へ
11:40 駅近くの Muhren Kolsch で、ケルン地域の伝統的な料理を頂く
13:45 エレマン氏の案内で市内視察。ケルン大聖堂や香水店ファリーナ社等を見学
17:25 Rudolfplatz 駅から Mohnweg 駅まで戻る。レストラン「Anno pomme」で夕食
ドイツのジャガイモをアレンジした様々な料理を頂く
20:45 徒歩でゲストハウスに戻り、21:05 解散

1月23日(月) ケルン エッセン・ヴェルデン：曇り

- 8:10 集合、マイクロバスで移動
9:50 エッセン・ヴェルデンに到着
10:15 フォルクガング芸術大学を訪問。ダンスクラスを見学
12:20 ディレクター、教師陣、日本人留学生、ドイツ人生徒を交えてディスカッション
13:50 近くのレストランで昼食
14:45 マイクロバスで移動
14:50 エッセン州立ヴェルデン・ギムナジウムに到着
15:00 5年生と9年生のクラシックバレエ、8年生のヒップホップの授業を見学
16:00 校長、教師陣とディスカッション

- 17:00 市内を短時間視察
- 17:40 エッセンを出発
- 18:50 レストラン「BilkenHof」で夕食
- 21:00 徒歩でゲストハウスに戻り、21:20 解散

1月24日（火） ケルン：晴れ

- 8:40 集合、マイクロバスで移動
- 9:10 ノルトライン＝ヴェストファーレン州立応用科学カソリック大学に到着
教授より学校についての説明
- 11:30 レストランで昼食
- 12:20 出発
- 12:45 ケルン・ドイツ連邦体育大学に到着
- 13:00～14:20 ボディパーカッションの授業に参加
- 14:30 学内見学
- 15:20～16:50 教授、教師陣とディスカッション
- 17:10 ゲストハウス内のレストランで夕食
- 18:30 アメリカのダンスカンパニー、エイリーⅡの公演鑑賞のためマイクロバスで出発
- 19:00 NEUS 劇場に到着
- 20:00 開演
- 22:00 終演
- 23:00 宿舎到着、解散

1月25日（水） ケルン/フェルバート：曇り時々晴れ

- 7:10 集合、マイクロバスで移動
- 8:30 フェルバート私立ランゲンベルグ・ギムナジウムに到着
- 8:45 校内見学の後、体育館でダンスの授業を見学
- 10:50 教師や生徒達とディスカッション
- 11:40 徒歩でレストランに移動、昼食
- 13:50 市内視察した後、マイクロバスで移動
- 15:20 カルト・ダンスステージ・スクールへ到着
スクールの概要説明を受け、レッスンとパフォーマンスを見学
- 17:50～18:30 生徒達とディスカッション
- 19:00 近隣レストランで夕食
- 20:45 ゲストハウスへ戻り、21:30 解散

1月26日(木) ケルン デュッセルドルフ：晴れ

- 8:40 マイクロバスでデュッセルドルフへ
- 9:30 ランゲン・インスティテュートに到着。施設内を見学
- 10:20～11:10 ダンスセラピー授業を体験。指導者や生徒とディスカッション
- 12:20 デュッセルドルフ市街で昼食。その後自由行動
- 15:30 マイクロバスでデュッセルドルフ市内のダンスハウス nrw へ
- 16:00 ダンスハウスにて、様々なクラスやスタジオ施設を見学
- 18:30 マイクロバスでケルン市内のレストランへ移動、夕食
- 20:20 徒歩でゲストハウスへ
- 22:35 解散

1月27日(金) ケルン ヒュルス：晴れ

- 午前中 ケルン市内自由行動
- 14:00 宿舎に集合。マイクロバスにてケルン近郊へ移動
- 14:35 ヒュルト市到着
- 15:00 市長を表敬訪問
- 16:00 ヒュルト市内のサビーヌ・オーデンタル・ダンススタジオを訪問
レッスンとパフォーマンスを見学後に、生徒とディスカッション
- 18:00 ヒュルト市出発
- 18:40 ゲストハウスに到着
- 19:15 ドイツ連邦ダンス連盟メンバーと研修フィードバックを行う
- 20:30 徒歩でゲストハウス近くのレストランに行き、夕食
- 23:00 ゲストハウスに戻り、解散

1月28日(土) ケルン→東京：晴れ

- 10:00 集合出発。マイクロバスにてケルン空港へ
- 11:00 チェックイン後、エレマン氏、クノーデル氏、パチケ氏とお別れ
- 13:05 ケルン空港出発 ルフトハンザ航空 1987 便 (10 分遅延)
- 14:10 ミュンヘン空港到着
- 15:25 ミュンヘン空港出発 ルフトハンザ空港 714 便 (20 分遅延)

1月29日(日) 東京

- 10:55 東京 羽田空港に到着
- 11:30 荷物をピックアップ後、解散

ドイツ派遣団員のレポート

・ 1. 平成 28 年度ドイツ派遣事業に参加して

平成 28 年度青少年国際交流推進事業・日独青少年指導者セミナー「バレエ（ダンス）分野における交流」の事業の中心となる互いの代表の派遣活動。平成 27 年 9 月に日本からの第一次派遣団が訪独し、平成 28 年 5 月にドイツの派遣団が来日した。3 回目の派遣事業として平成 29 年 1 月 15 日から 29 日まで、日本の第二次派遣団が訪独した。

第一次にも参加した 3 名（諸角、松村、若佐）と、今回初参加の 4 名（市川、錦見、貞松、柴田）からなる 7 名のメンバーで、フランクフルト、ドレスデン、ケルン、エッセン、デュッセルドルフ等の施設を訪問した。

この事業の目的は「日本とドイツのダンス教育のシステム・制度の違い」を見ることにあ
るが、ドイツ側では今回「ドイツのダンス教育の多様性を見せること」「今回の出会いをき
っかけに、交流が続いていくこと」を大きなテーマとして掲げている。

ホストであるドイツ連邦ダンス連盟が用意してくれた今回のプログラムは、このテーマ
がはっきりと打ち出された充実したものであった。15 か所の施設を訪ね、劇場での舞台鑑
賞が 2 回、また、ケルンにおいては、訪問する施設の関係者、前回と次回のドイツ側の派遣
団メンバーなどを招いてのレセプションが用意されていた。

フランクフルトに到着して翌々日には半日かけてドレスデンに移動、週末にはドレスデ
ンからケルンへの移動もあり、朝は早い日で 7 時、通常は 8 時半から 9 時の集合、解散は夜
の 9 時から 11 時くらいになる日もあり、かなり厳しい日程であったが、これをすべて計画
した上にアテンドし、行く先々で先方に我々を紹介し、自身も熱心にノートをとっておられ
たエラマン氏には心からの尊敬と感謝の念をささげたい。また、ケルンに移動してからはマ
イクロバスを用意して下さり、1 時間半ほどかかる近郊都市にも楽に移動をすることができ
た。

それぞれの訪問先には、訪問の目的がはっきりと伝えられていて、どの施設でも受け入れ
担当者が待ち受けていて丁寧に対応してもらった。多くの施設において、授業を見学した後
で教師や生徒たちとディスカッションする場が用意されていた。たくさんの質問に丁寧に
回答をいただき、おしげなく情報を与えていただいた。訪問先が多すぎて、時間に追われて
しまい、もう少し交流する時間がほしいと思う場面もあったが、おおむね満足のできる訪問
であった。

それぞれの施設に関しては、派遣団メンバーの報告を見ていただくとして、最後に行われ
たフィードバックのためのミーティングで出た感想をここにしるし、今回の旅の成果を見
ていただきたいと思います。

・プログラム構成が非常によくできており、訪ねた大学で教育を受けた教師が、大学卒業後
に実際に他の大学やジムナジウム、個人のスタジオなどで教えている現場を見学すること

ができた。

- ・さまざまな場所でダンス教育が行われていることが理解できた。
- ・アマチュア（ここではダンスを趣味として踊っている人を指す）を教える場合でも、プロフェッショナルな教師が必要であるというはっきりした意識を持っている。プロが教えることにより生徒の体に正しいものが残ることになるので、生徒がどんな道に進んでいくとしても、教師が勉強を続けることが大切である。教師がさらにプロになろうとしている姿を見た。我々もアマチュアを教えることが多いので、非常に強い印象を受けた。
- ・教師や生徒と直接の交流ができ、生の声が聞けたことは貴重な経験となった。
- ・アマチュアでも、自身の体でダンスを体験することにより、「ダンスとは同じ時間、空間、リズムを共有する素晴らしいものだ」ということを知っているように思う。生徒たちが集中力をもって真剣に取り組み、ダンスを楽しむ姿を見られてよかった。
- ・ダンス文化の中で、人々がどのようにダンスに関わっているのかが少しだけ見えた気がした。
- ・ダンスハウスという、日本のカルチャースクールのようなところで、底辺を広げる努力をしている。子供が小さい時からダンスに触れさせるために地域に働きかけ、子供のための公演を行っている。自分たちが日本でこれだけの努力をしているだろうか。
- ・子供たちがインプロヴィゼーションを楽しんでいる。クラシックバレエや民族舞踊も勉強するが、インプロヴィゼーションが一番楽しいという声も聞いた。日本の子供は即興で動くことは苦手だというのが定説だが、クラシックバレエのクラスでもこうした授業は効果があると思う。

一方で、日本から見ているとわからない、ドイツにおけるダンス教育の現状も見えた。国が文化政策に熱心であるというのは我々の思い込みで、教育にかかる予算は全体の1%でしかない。現場にいる舞踊家と舞踊教師が努力し、戦ってきた結果少しずつ発展してきたのが今の状況である。

受け入れ側としてのエラマン氏からもコメントをいただいた。「今回は自分たちが知らない施設にも行ってみたが、どこでも歓迎され、その施設の人たちにも喜ばれた。自分が中に入って戦っているとわからなかったことだが、日本からの派遣団とともに外から見ることができ、進み具合を確認できたと思う。」

この言葉は実に重みがある。第1回の訪問ではベルリン国立バレエ学校のような特別な施設にばかり目が行き、それがドイツのダンス教育のうらやましいところ、というような認識でいたことが、むしろ今回見せていただいた施設のほうが一般的で、ダンス教育に情熱をささげる人たちが、その現場において淡々と努力を続けていることは、日本と全く変わりが無いということが分かった。

そういう目で見ると、底辺を広げるという目的を達成するためのアプローチには学ぶことがたくさんあったと思う。上に述べたダンスハウスの例もある。また、日本の普通中学校・

高等学校にあたるギムナジウムのなかで舞踊を科目として選択できるなどは興味のある事例といえる。

国の予算を得ながら新しい企画をする必要があるドイツの大学に比べ、日本ではむしろ自由な方法を選ぶことができるのかもしれない。しかしながら、民間のレベルでできることには限界がある。ダンスの授業のためには設備を整える必要があり、受け入れられる学生数は限られる。その結果学生の負担は多くなり、学業を続けることが難しい状況もある。その点、ドイツの大学で出会った学生たちは恵まれていると思った。また、国籍を問わず国の予算の恩恵を受けられるという懐の深さにも感銘を受けた。この点は、日本とドイツの事情の違いが最も大きいところである。

日本でもダンスを専攻できる大学がかなり増えてきた。こうした大学ができた当初は、実技の専門家が講師として大学で教えるような形が多かったが、現在では、大学で勉強して大学教授の資格を得て実技を指導するという人材も育ってきている。これはひとつの成果であると言える。

今回の出会いをもとに交流を続け、互いに参考にできることを応用しながらダンス教育の発展に尽くしていきたいと感じた。

(諸角佳津美)



フランクフルトに到着した晩に翌日からの打ち合わせを兼ねて用意された夕食の席での
日本の派遣団メンバーと、ウラ・エラマン氏、ディター・クノーデル氏

2. ドイツで訪問した施設等について

フランクフルト音楽舞台芸術アカデミー

Hochschule für Musik und Darstellende Kunst

訪問日：2017年1月16日 9:45～18:30

対応者：インゴ・ディール (Ingo Diehl) 舞台芸術学部長

1. 施設の概要

フランクフルト・アム・マインは人口69万を越えるヘッセン州最大の、ドイツ全体でも第5番目の都市である。ヘッセン州立のフランクフルト音楽舞台芸術アカデミーは、私達の宿泊する、フランクフルト駅近くのホテルから地下鉄を利用し、20分程のところにある。校舎は大通りに面しており、都会的な建物である。

音楽学部（職業教育）、音楽教育（教職課程）と作曲学部、舞台芸術学部との3つの学部を有する、ヘッセン州立大学である。

※上写真は学校の建物前

舞台芸術学部の中には、演劇学科、レッスンピアノ学科、マネージメント学科、声楽学科とダンス学科がある。舞台芸術学部の規模は小さく、学生は全体の17%程で、ダンス学科は修士課程を含め、現在は55名が在籍する。

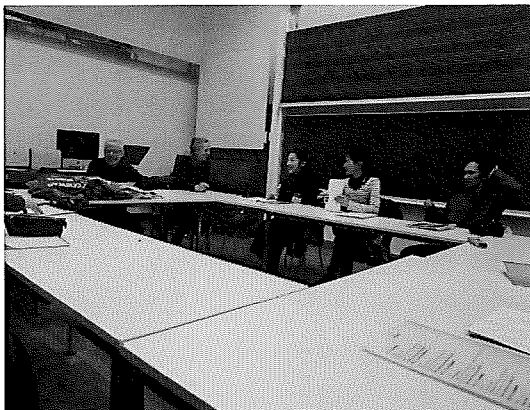
ダンス学科の使用するスタジオは、私達が見学した大きいスタジオが1つと、小さいスタジオが2つ、3つのスタジオがある。以前のダンス学科の名称は「バレエ学科」であったが、2000年にディーター・ハイカン (Dieter Heitkamp) 氏が学科長に就任した際、コンテンポラリーダンスに

力を入れる事から「ダンス学科」と改められた。

ハイカン氏は、1986年、ウィリアム・フォーサイスのフランクフルト・バレエ団へゲスト振付家として参加した人である。

2. ダンス教育の実情

この学校は、ほとんどの場合、義務教育（中等教育）の終わった18歳以上の学生が在籍する。能力によっては特待生として、17歳で入学を認められる場合もある。



一番左が学科長のハイカン氏

毎年 100 人程の入学希望者があり、彼らは 1 日で行われる実技試験によって選考され、その内入学が許されるのは、わずか 12 名だという。

授業内容はクラシックバレエ、コンテンポラリーダンス、身体心理融合運動、フォークダンス（歴史民族舞踊）等の実技の他に、解剖学、理論、ダンス史、音楽等の座学もある。1 年生では、これらの授業を 1 週間に 33 時間こなしている。発表の場は 1 学期に 1 回、2 学期に 2 回の年に 3 回設けられている。

2 年生以上になるとこの限りではないようで、この日も 3 年生は明日からベルリンで行われる公演の為、今日はお休みということであった。その演目は『火の鳥』で、1989 年には東京のスパイラルホールでも上演している。

1、2 年生は皆同じ授業を受けるが、3 年生に進級する際、クラシックバレエかコンテンポラリーダンスかを選択し、選択した方に重点を置いての活動となる。4 年生になると、何処かの劇場に参加し、実際の舞台での研修となる。

（3 年次終了でバチュラを取得できる。）

授業料は半年で 350 ユーロかかるとのことだが、これによって交通機関が全て無料になる。



学生食堂

ここの学生達の多くは親元を離れて、大学近くで生活をしている。ケルンは、ドイツの中でも大都市であるため、この辺りは物価も高く、学生が住めるような、安価な物件が少ないのだそう。寮もあるが、部屋数が圧倒的に足りないとのこと、学校側はありとあらゆる援助方法を模索しているとのことだった。

近年では、芸術家が単に自分の活動を発表するだけでなく、普及させることも大切な活動のひとつであると考えられる様になったという。ダンスで言うと「動きはどう理論になるか、または理論をどう動きに出来るか」を芸術家（ダンサー）自身が考えるようになった。教え方も芸術活動の一つであるという考え方が普及し始めている。

そのような流れを汲んで、この大学でもマスターコースが設けられるようになった。今でも研究プロジェクトであるこのマスターコースは、10 年前に試験的に始まった。マスターコースの授業は、すべてドイツ語ではなく英語で行われるため、海外からの留学生を積極的に受け入れているとのことである。いずれかの大学でバチュラを取得した者がダンサーとして数年活躍した後、マスターコースに入るというのが一般的なようだ。この大学のマスターコースでは、25 歳から 49 歳までが在籍している。

このマスターコースでは、「世界的にどういった教え方があるのかを研究し、これから世界の中心で指導者として活躍する学生たちに伝えていくことこそが、自分たちの役割」とディール氏は熱く語った。

3. クラス見学

1年生のクラスを3つ見学した。

①フロアバークラス（バレエ基礎）

指導者：ノラ・キンベル（Nora Kimball）

フロアバー時には、男女23名（男子11名、女子12名）、バーレッスン時には男女19名（男子9名、女子8名）が参加した。フロアバー60分、バーレッスン60分のクラスを、初めから終わりまで2時間全てを見学。

キンベル氏はニューヨークでバレエを習得した後、ドイツのシュツットガルト、オランダ、アメリカンダンスシアターでプロのダンサーとして活躍の後、1989年よりこの教授となる。

このクラスは、床に直接寝転がり先生の声の指示のみで、学生達が動く。キンベル氏は丁寧に説明をし、時には一人に直接触れて、直しながらクラスは進められた。

仰向けに寝た状態で、軽く足を動かすよう指示がある。足を動かしながら、おなかの状態や、アームスの状態など、細かな支持がでていた。ほとんどの学生は慣れた様子で、声の指示に従って動くが、中には理解しきれず、頭を持ち上げて、回りを見る学生もいた。

仰向けで行われたレッスンは、徐々に横向きや、座った状態へと進んでいった。ここまでは一切音楽は使用していない。



フロアバーが終わり、女性のピアニストが入って来てバーレッスンが始まった。

バーレッスンは近いうちに試験があるとのことで、キンベル氏はメモ書きを見ながら、決められた順番を伝えるので、途中で、彼女が書かれたメモを読み取れず、まごつく場面もあった。バーが終わり、クラスは終了した。

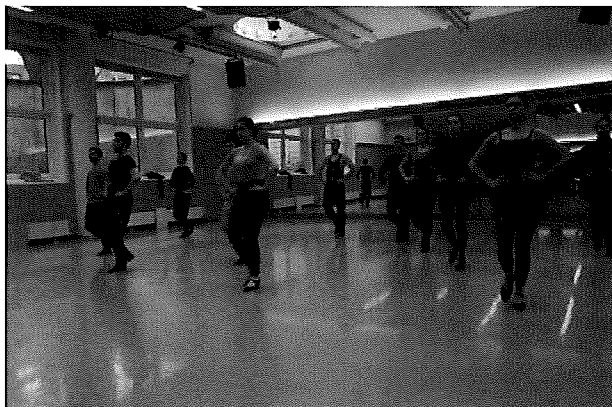
基本的にフロアバーのクラスは、学士コースの1年生時で、週に2時間を2クラス、2年生で1クラス行われている。3年生以上は希望者が受講できるようになっている。フロアバーを終わった時点で人数が減ったのは、今日これからベルリンへ向かう3年生のうち、希望者が受講していたためである。

キンベル氏は、フロアバークラスで一番大切なことは筋力ではなく、バランスと語った。体の関連性を大切に、レッスン中に音楽は使用しないが、より音楽的に体を動かすことが大切とのことだった。

②フォークダンス

指導者: スーザン・ノース (Susanne Noodt)

男女 14 名 (男子 8 名、女子 5 名、女子 1 名見学)。クラス途中から 30 分程見学した。



ノース氏の教えるこのクラスは、他の学年の学生が混ざることなく、学士コース 1 年生のみで行われた。学生は男子も女子も、ヒールを履いている。

手を叩き、踵を床に打ちながら前進し、次には後進する。または、クラシックバレエとは少し違う、非常に柔らかいプリエを使って、前進、後進、ターン等を組み合わせたステップを練習した。歴史民族

舞踊というレッスンで私もやったことのあるステップだった。

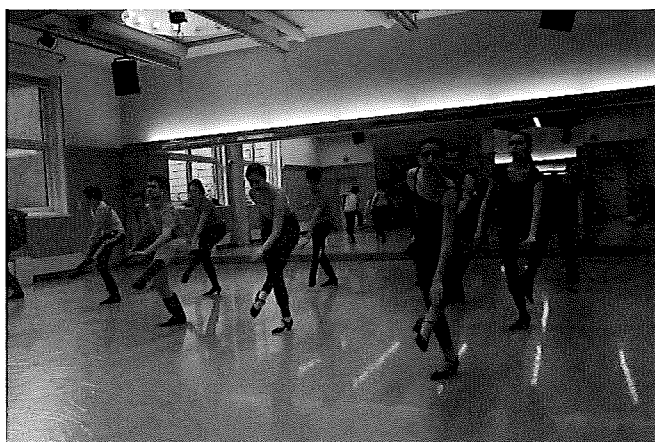
ノース氏がやってみせるお手本は、まったく足音がせず、とても軽い感じなのだが、学生たちには、同じようには行かない。ドンドンと足音を鳴らし、リズムを取るのも一苦勞であった。ゆっくりと、簡単なステップから始まり、徐々に難しくなっていく。

しかし、学生たちはどこかしら、むしろ笑顔になって、難しいステップを楽しんでいた。

簡単そうでもクラシックバレエとは、勝手の違うものに苦戦する様子が見られた。

生徒の多くは海外からの留学生で、これまでフォークダンスをしたことが無い子も多数いるという。踊る機会がなかったという事だった。

幼少期から慣れ親しんでないと、細かいリズム取することは非常に難しいと、私達に同行してくれていたクノーデル氏が言っていた。



③コンテンポラリーダンス

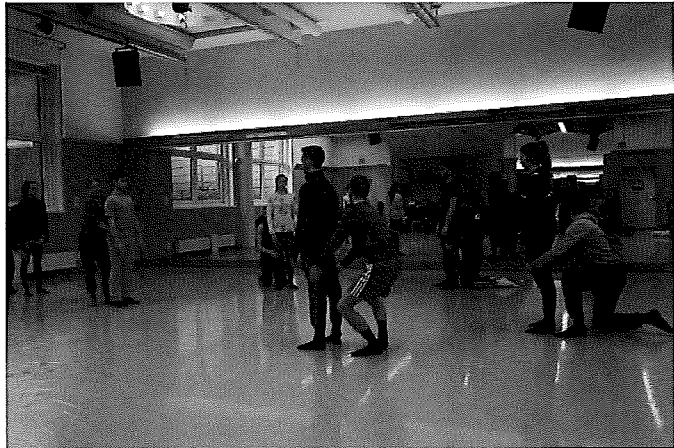
指導者: ハンナ・シャクティー・ビューラー (Hannah Shakti Bühler)

男女 14 名 (男子 8 名、女子 5 名、女子見学 1 名)。クラス 1 時間半を全て見学した。

普段はハイカン氏のクラスなのだが、明日のベルリンでの舞台の為に、今日は彼が留守なので代教として、若い女性のシャクティー・ビューラー氏が受け持った。

この大学の修士課程を卒業している彼女は、普段はこの大学でジャイロキネシス、ヨガ、太極拳をダンス科の生徒に教えている。また、他の大学の演劇学科の生徒にはコンテンポラリーダンスも教えているという。

クラスの内容は、まず、スタジオの中を歩き回る。お互いの距離を計ってぶつからない様に、結構な速さで歩く。自分の空間認識を高める目的。誰かの目をしっかり見るよう、指示がありながら数分間続いた。止まって自分の体をゆるゆると緩める。2人ずつ組になり、ビューラー氏の声の指示だけで、一方の人が他方の人の頭から足まで、色々な角度や方向に軽く撫でる。



役割を交代して、同じく行う。ここまでのこの単純と思われる過程を30分間に渡って行われた。

次に自分の頭を指先でポンポン叩く事から始まって首の後ろをさすることで、体の力を抜いていく。そして次に音楽に合わせての、ショートコンビネーションに進んでいった。

今度はまた2人ずつになり、一方の学生が、他方の学生の頭の重さを感じて支え、肩の上へと持っていく、バランスを取らせる。またバランスを崩す、頭を支える、の繰り返しを行う。若干、このクラスの学生たちには難しかったようであった。

最後には、レパートリーのようなものを、少しずつ振付を足していきながら、踊らせていた。

クラシックバレエやコンテンポラリーダンスの経験は無く、ストリートダンスからここへ来た学生もいるという1年生ということもあって、まだまだ勝手が分からない学生も多くいた。特に今日はいつのも先生ではないからであろう。「普段は決してこのようなクラスでは無い」と、彼女も言っていた。

彼女は自分が膝を怪我したため、プロのダンサーになるのをあきらめたと言っていた。そして、治療のためにソマティックプラクティスに出会ったという。ソマティックプラクティスとは、「身体と脳を結びつけ、体の動かし方を、新しく体得するもの」といったらよいだろうか。私自身はフェルデンクライスメソッドを勉強しているため、彼女の言わんとすることは良く分かった。「こ



れはダンスに応用できるのではないか」と思った彼女はこの大学の修士課程で、その研究をしたのだという。

まだ若く、恐らく指導経験も浅い彼女が、代教の立場でありながらも、自らの判断でクラスを進めることが出来ていることは、この大学の「多様性を重視する」姿勢と結びついていた。

4. 感想

前回の訪独時にも思ったが、やはり海外からの留学生の多さが目立った。そして国籍には関係なく、授業料は安価で、質の高い教育を受けることが出来るというのは魅力的であると思う。

この後、行ったいくつかの学校でも同じように繰り返されたのが、「多様性に重きを置く」

という事だった。人種、国籍、年齢を問わず、学びたい人にその門を開くという姿勢だ。

ここの学校では、ダンサーを育てるという事であったが、印象としては、教育者を育てているように思えた。今回はマスターコースを見学することは出来なかったが、学士コースの指導でも、「動き」というよりも「思考」の方に重きをおいているように見えた。

ここでは、ジャイロキネシスやアレキサンダーテクニク等を用いて、ダンサー自身の感覚と、実際のずれを調整する作業を、丁寧に行っていたのが印象に残った。まさに新しい指導法をどんどん取り入れていくことへの積極性を感じた。

指導者の質の高さとは、生徒に知識をひけらかすことではなく、ゆっくりと辛抱強く、生徒の理解と動きを統合させ、導くことなのだ、と感じさせられた。



後日談ではあるが、帰国時には3つ目のコンテンポラリーダンスクラスの指導者名が分からなかった。彼女は臨時であったこともあって、名刺を持ち合わせておらず、訪独メンバーの誰も、連盟のエレマン氏、通訳のパチケ氏も知らなかった。帰国後すぐに学科長のハイカン氏にメールで尋ねた。すると数分も経たないうちに返事が来て、彼女の名前が判明する。あまりの返事の早さに感動し、またすぐにお礼のメールを打った。すると翌日には彼女本人からメールが届いた。

たった名前を尋ねるだけなのだが、こうして連絡を取り合うことがなんと嬉しいことかと、感動した。こんな小さな交流が、新たな一歩となれば嬉しいと思った。

今、国際政治は難しい局面を迎えているようだ。この国、この学校が唱えている「多様性を重んじる」という精神が持っている意味を、もう一度改めて、考えたいと思う。

(若佐久美子)



ハインリッヒ・シュッツ記念コンセルヴァトワール

Heinrich Schutz Conservatory in Dresden

訪問日：2017年1月17日 16:00-20:00

対応者：ペトラ・シュタイナート (Petra Steinert) ダンスコース責任者

1. 施設の概要

ドイツの作曲家であり、ドレスデン宮廷楽長であったハインリッヒ・シュッツ (1585-1672) の名前を冠する当校は、1996年に創設された。創設当時の生徒数は4000人で、以後大きく成長を遂げて、現在は6300の生徒が在籍する。ドレスデン市最大の高等音楽院である。

音楽院は10の学科に分かれていて、教師は71人、非常勤で教えるフリーの指導者は193人である。生徒は様々な楽器を習ったり、合唱団で歌ったりする機会を与えられ、障がい者にも同様に門戸を開いている。また、他の楽器のレッスンと並行して、ダンスを教えるクラスが存在している。「音楽院にダンスクラスがあるのはドイツではあたり前のことでないが、この学校では楽器や歌を習うのと同じように、ダンスのレッスンを受けるのは特別なことではない」と、シュタイナート氏は自信を持って説明してくれた。



2. 教育内容

2017年現在、3歳から19歳までの子供の生徒で、ダンスクラスに所属しているのは700～800人程度とのこと。一般の学校の授業が終わった放課後に、ダンスレッスンを受けに来るので、近所の生徒がほとんどであるが、中には電車に乗って40分かかるといふ生徒もいる。

学校のスタートは8月で、3歳の生徒は親子でレッスンを受講するが、4歳からは保護者はスタジオの外で待機して、子供だけが指導を受ける。また、5歳からそれぞれの特性を生かすために、男女別に指導を行っている。

レッスン内容は、基本は週1回のコンテンポラリーダンスであるが、意欲のある生徒は9歳くらいから週2回のレッスンを選ぶことができる。追加の1回のレッスン内容は、クラシックバレエ、ジャズダンスなどで、週によって異なる。

クラスの時間は、6～8歳が60分、9歳以上は75分である。発表会は年に1度あり、ダンサーのみの場合もあるし、オーケストラ（音楽部門）と一緒にの時もある。また、希望者にはコンクー

ルや他のイベントなどで踊る機会も作られている。

クラスは8月が新学期で、1年間のレッスンが終わった後にテストを受けて進級する。最終学年のテストに合格すると、大学入学できるレベルがあるという証明書を受領することもできる。

卒業生の2パーセントの生徒がダンス関係に進むが、ほとんどの生徒は高校卒業後にダンサー以外の別の進路を選び、大人のクラスを受講して、ダンスを続けていく。

見学後の教師とのディスカッションでは、ダンスする利点としては、「何か言いたいことがある場合にダンスを学んでいると主張しやすい」という答えであった。ダンスをして自己で表現や主張することを学び、自信がついて意見を言う勇気が生まれた。また、インプロヴィゼーション（即興）をすることで、他の人に反応し、考えていることを察することもできるようになり、コミュニケーションを取りやすくなるなど、他人との関わり方も変わってくるということがわかるのである。



3. 見学内容

①5～6歳クラス 生徒数9人 教師：アメリエ・シューネ（Annelie Schone）

（このクラスの写真は撮影不可のため、校舎内に掲示されていた舞台写真を掲載）

生徒はすべて女子で、5歳児が5人、6歳児が4人。通常は45分間のクラスだが、この日は30分間程度を見学した。

・クラスの歌を皆で歌った後に、「寒さを追い出しましょう」で、手をこすり、足踏みして、お尻を振ったりする。鏡に向かって歩く、横に歩く、大股に歩く。冬の歌を歌う。

・「雪の結晶を見たことがありますか」の問いかけに、結晶を身体で表す。みんなで組み合わさって、「雪」を作る。嵐がやってくると、結晶はバラバラになってしまう。

・昔話の世界。「太った王様」と「小さなムック」の2人を違った動きで表す。ムックとは、ヴィルヘルム・ハウフ（Wilhelm Hauff 1802-1827）が書いた児童物語『小さなムック』の主人公である。ムックは、小さいがゆえに仲間からからかわれ、父が亡くなると家からも追い出されてしまうが、世界を放浪し、魔法使いに雇われて様々な経験をしながら大人になっていく。伴奏のピアノの音と共に、子供たちは、太った王様の時はどしどし力強く歩き、小さなムックの時は軽く小股に軽快に歩いて、それぞれを演じ分けていた。

・魔法の台所にイメージして、円になって座る。魔法の言いつけに従って、鍋のスープにいろいろな物を入れる。背伸びをして、高い戸棚から材料を取り出す。魔法が怒りだして、皆を動物に変えてしまう。変えられた動物（ライオンや蛇）の動きをする。

・今度は馬に変身する。サーカスの馬になって動く。手をつないで歩く、足を高く上げる、ギャロップをする。

・最後は、前へ、横へ、後ろへと拍手しながら動く。さよならの歌で終了。

教師は、動きのきっかけを次々と与えて、動く手助けする。子供たちは各自でストーリーを展開しながら、想像力豊かに表現していく。教師のシェーネ氏は、後日に訪問するパルッカ大学の舞踊科の卒業生で、表現力豊かな指導者であった。



②14～18 歳クラス（日本の中高校生） 生徒数 27 人。17:30～18:30pm

＊作品を見せてくれたため、通常より短いレッスン時間であった。

・スタジオ全面に広がり、プリエ（膝を曲げる）、腕を振る、足をあげるなどの基礎運動を行う。

・歩く、止まる、崩れるなどの動きをしながら、流れの中で腕を振ったり、首を回したりする。

・列になって、スタジオの端から端まで動く。ジャンプや走りを入れることで、動きが大きくなる。



生徒 27 人のうち 10 人は、小さい頃からずっと一緒に踊ってきた仲間
で、同級生として何年も一緒にダンスを学んできている。男子も数名いて、小さいころはダンスをしていることをからかわれたが、中高生になり舞台を観てくれた友人が今では「かっこいい」と言ってくれていると話してくれた。

③コンクール作品 『石を転がす』

昨年の州のコンクールで1位を受賞した作品で、今年の全国大会にも上演する予定。

生徒たちは1つに集まったり、列で踊ったりした後に、自分が考える「自由とは何か」への答えを大きく書いた段ボールを首から下げて踊る。最後にそれらを集めて重ね、1人の女子が一段高く、その上に立ち上がり終わる。ダンスの中でも、若い世代が自由への意識を持っていることを表現した、エネルギー溢れる作品であった。



4. 感想

音楽院の中で教えられているダンスクラスと聞いて、音楽教室に附属している小さなダンスクラスを想像していたが、生徒数も非常に多く、ダンスの大会でも多くの賞を獲得していると聞いてびっくりした。受講している生徒は、ほとんどが趣味のため、楽しみのためにダンスを習い、今後もダンスを続けていきたいという、ごく普通の生徒たちであったが、これまでに視察したダンスを専門的に学んでいる生徒たちと引けをとらない熱心さを感じた。

週に1回あるいは2回程度のレッスンで、ここまで生徒たちが一生懸命なのは、ひとえに指導力の賜物であろう。特に幼少の生徒を教える教師はクラスを展開する物語を誘導していく必要があるため、動きを教えるダンサーというよりは、演技者としての要素を多く兼ね備えていなければならないと感じた。アマチュアの生徒を教える時でも、教師には、専門的にダンスを学んできたプロフェッショナルを配置して指導していることで、このような実績をあげているのであろう。

また、中高生が放課後にこれほどダンスを楽しく踊っている姿は、素晴らしいと感じた。日本では、この年代になると、本格的に踊りを極める方向に行くか、勉強が忙しくてダンスをやめるかの選択を迫られるところであるが、ドイツの子供たちは、今まで続けてきたダンスを今後の人生の友として、ずっと踊り続けたいと思っている。そんな気持ちが伝わるほど、皆楽しそうに踊っているレッスンであった。

(松村とも子)

パルッカ舞踊大学

Palucca Hochschule für Tanz in Dresden

訪問日：2017年1月18日 9:00～17:00

対応者：ジェーソン・ビーチャー (Jason Beechey) 教授 学長

アイリーン・マーゲル (Eileen Mägel) 広報担当

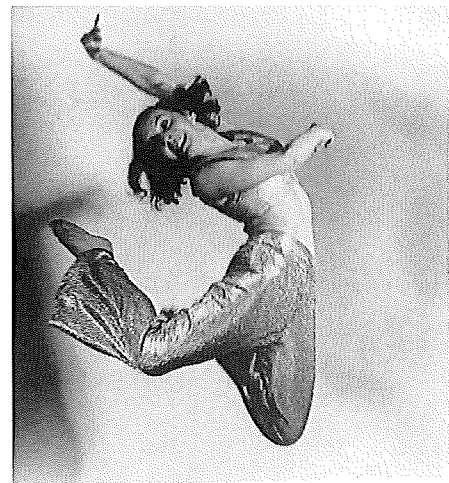
1. 施設の概要

パルッカ舞踊大学は、ザクセン州の州都ドレスデン市内にある州立、ドイツ連邦唯一の舞踊課程専門の大学である。1925年に舞踊家のパルッカ・シューレ(Palucca Schule 1902-1993)が自ら設立し、自身のアパートメントを提供しダンスを教え始めた。表現舞踊家として、その自由なダンススタイルはナチス政権時代には「フリーダンスは教えるべきではない」と禁じられ、1939年から1945年まで閉鎖された。戦後間もなく学校は再開されたが、1949年には国有化され、戦後東ドイツ時代は西側の影響を嫌う政府の意向からワガノワスタイルのクラシックバレエのみを教える時代を経てきた。

東西ドイツの統一後の現在は、クラシックバレエ、コンテンポラリーダンス、インプロヴィゼーションの三つを教育の柱として据えており、パルッカの舞踊に対する情熱と理念を受け継ぎ今に至っている。ドレスデンの街は、第二次世界大戦では徹底した爆撃にあい、市内中心部はほぼ灰燼に帰した。ソ連占領地域にあったため、戦後はドイツ民主共和国(東ドイツ)領となり、ライプツィヒなどと並ぶ工業都市として発展したほか、近年では観光地として、東部ドイツ有数の大都市として賑わいを見せており、1990年の東西ドイツ統合後、歴史的建築物の再建計画が一層推進されつつある。

大学の在る地域は、市内中心部からやや離れているため、戦前から存在する屋敷などが建ち並ぶ、閑静な環境にある。現在の大学のメイン棟は1954年建造、2つのスタジオのほか、オフィス、カフェテリア、フィットネスルームおよび衣裳部屋を備える。新棟は2007年に増築されている。

新棟には、9つのスタジオがあり、そのうち2つの大きなスタジオはつなげることが出来、パフォーマンスの会場にすることが出来る。そのほかオーディオビジュアルルーム、理学療法室(専



門のトレーナーが常駐)、25 部屋の寮も設置されている。

この2つの棟を結ぶ通路には、パルッカの跳躍を模したオブジェが飾られている。更に、図書、DVD、資料、楽譜とインターネット設備が備わるライブラリー棟、オフィスと主にマスター課程の学生が利用するセミナールームがある別館の計4施設が存在する。

2. 教育内容

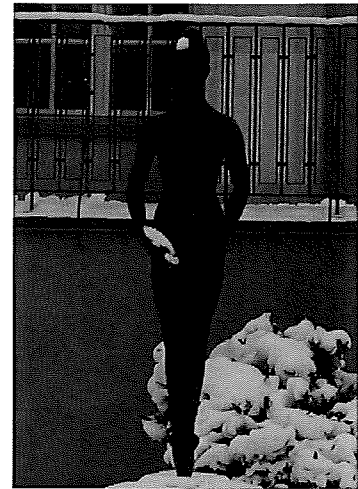
パルッカ舞踊大学は、舞踊、振付、舞踊教育の3課程があり、生徒数は約200名。16歳から20歳まで学士課程(Bachelor of Arts 以後B.A.)に入学可能で、授業は英語。B.A.は、舞踊(3年間)、舞踊教育(4年間)で、修士(Master of Arts 以後M.A.)は、振付、舞踊教育(舞踊教育M.A.は今年の夏より始まる)を2年間で学び修めることが出来る。M.A.課程には、B.A.を修了した者のほか、3年以上のプロフェッショナルダンスカンパニーでのダンス経験、又はプロフェッショナルダンスカンパニーの教師、バレエマスターの経歴を持つ者、更にアマチュアフィールドであっても5年以上の教師経験がある者に入学資格を与えている。更に、通常2年間のフルタイムカリキュラムのほかに、働きながら学べる3年間のカリキュラムもあり、広く学ぶ為の門戸を開いている。

また、この学校では日本での5年生から、10年生までの教育を並行して行っている。5、6年生までは、オリエンテーション的な意味合いを持つ自身の適性を考査できる期間を設けており、45分授業で、クラシックバレエ、TTIと呼ばれる即興の基礎的なレッスン、フォークダンス、上演実習などを行う。7年生以降から本格的な舞踊教育が始まり、フォークダンスは7年生まで。TTIは8年生まで。クラシックバレエ、コンテンポラリーダンス、インプロヴィゼーション、上演実習は一貫して行われる。17歳までは新棟内にある寮に入ることが出来、2~3人部屋で、月約200ユーロで入居できるが、18歳になった時点で寮を出なければならない。各学年の数は15~20名。入学時は殆どがドイツ国内の生徒が入学し、舞踊教育のほか、一般の授業も行われ、その授業は全てドイツ語で行われる。10年生終了後、卒業試験を行うが、この時点で辞めてしまう生徒も多く、大学まで進む割合は3割程度で、残りは諸外国からオーディションにより認められた生徒が入学し、大学以降の授業は英語で行われる。なお、今年のオーディションは、学内のほか、デュッセルドルフ、イタリア、韓国で行われる予定である。

また、パルッカ舞踊大学は、外部との交流も積極的に行っており、ドイツ国内の大学(特にハンプブルグバレエ学校、ミュンヘン大学)との交流も盛んに行っている。更に約十年前よりドレスデン市内にあるゼンパーオーバー劇場バレエ団(Dresden Semperoper Ballet)とも深い協力関係を持っており、現在58名いる団員のうち、18名がこの大学の卒業生である。なお、ここ近年の卒業生の就職率は約90%以上で、ほとんどがダンスカンパニーなどダンサーとしての仕事を得られているとのことである。しかしながら、大学としての規模が決して大きくないこの大学で、B.A.・M.A.両方の運営を維持することが困難との理由で、2018年からM.A.課程のみになるとのことである。そしてM.A.以外の全てのカリキュラムは、基本的には全て無料で州の予算により運営されている。

3. 見学内容

バレエ『くるみ割り人形』の舞台に出てくるようなお屋敷が建ち並ぶ街の一角を歩きパルッカ舞踊大学の門をくぐると、雪化粧とピンと張り詰めた冷たい空気の中を、ポアントで立ち続けるダンサーの銅像が私達を迎えてくれた。校舎内に入るとすぐに広報担当の職員マーゲル氏が出迎えてくれミーティングルームに案内され、間もなく学長のジェーソン・ビーチー氏が入室。名刺交換やエレマン氏から私ども訪問団の紹介をして頂いたのち、学長自らから創立者パルッカ・シュレーについて、そして学校の教育理念やシステムまで一通りの説明を受ける。その後、マーゲル氏から学校内を一通り案内して頂きながら各授業をそれぞれ 15 分程度見学させていただいた。



たまたま最初に校舎内ですれ違い挨拶いただいた方はフィジカルトレーナー。この学校には、フィジカルトレーナーをはじめ、ボディコンシヤスなど生徒の健康面をサポートするチームが 3 名いるとのこと。

最初に授業を見学したのは、B.A. 2 年生のコンテンポラリークラス。教師はカタリーナ・クリストル氏。男子 6 名、女子 9 名。伴奏はピアノ、打楽器を一人の演奏家による生演奏で、大変小気味よくリズムカルにレッスンは進行していった。

続いてドレッシングルームに案内される。この学校で行われるパフォーマンスの衣装をたった一人で製作、管理されるのはマルティナ・ドリシュナー氏だ。特にコンテンポラリー作品の振付家と話し合いながら、1 着約 100 ユーロの予算の中で、考え製作する。若しくは、既にある物の中から使えるものを探し出す。衣裳部屋には所狭しと掛けられた衣装が並び、これらをたった一人で管理されていることに、大変感心させられた。



ドレッシングルームに続き案内されたのは、17 歳までの子供たちが入居する寮である。寮の管理、入居する生徒たちのケアを担当するチームは 7 名。ドイツ国内各地からこの学校に入学し、寮で共同生活する児童のケアは、並々ならぬ苦労があるろうかと思われたが、少なくとも案内していただいた生徒達の部屋は、よく片付き、いかにもバレエ大好き少女のマイルームといった様子で、3 人部屋のルームメイト達は仲良さそうに話合っていた。



続いてクラシックバレエクラスで、教師はオルガ・メニコヴァ氏。生徒は B.A. 1 年生で、男子 13 名、女子 5 名で、このクラスの男女比は異例で男子が非常に多い学年とのこと。ワガノワメソ

ッドを主軸に、シンプルに、しかし的確に注意し緊張感のあるクラス進行をされていた。

次に案内されたのは 10 年生の一般教養である英語の授業。教師はダグマー・ウィルニツァー氏。生徒たちは教師の問いかけに、積極的に英語で応え、自分の考えを述べていた。大学まで進めばすべての授業が英語で行われるため、英語の習得は必須なのである。皆高いレベルで英語を理解し、習得しているように思えた。

その後昼食を生徒たちと同じ食堂で摂り、その後図書館へ案内された。図書館は、歴史のあるお屋敷を改築したもので、大変趣のある建物だ。約 7500 冊の主に舞踊関係の書籍のほか、楽譜、資料、DVD と、インターネット設備が整っており、我々が見学している間にも、数名の学生たちが一生懸命調べ物をしていた。

午後、最初の見学は B.A. 2 年生女子のクラシック授業。やはりオルガ・メニコヴァ氏の授業で、ウィリアム・フォーサイスの作品の実習を行っていた。女子 12 名、うち 6 名がゼンパーオーパ・バレエカンパニーの生徒で、前述したとおり同バレエ団と協力関係にある為、若い入団したての団員をパフォーマンス実習で交流させ、互いのスキルアップにつなげる取り組みとのこと。なお、実習で踊る演目は、主にゼンパーオーパ・バレエカンパニーのレパートリーの中から行われる。

続いて同 2 年生が、別のスタジオで夏の試験に向けて選択科目の自習を行っているというグループの稽古を見た（男子 4 名、女子 2 名）。インターネット動画から自ら選んだ作品を再構築して踊るという作業を、自分たちがパソコンで取り込んだ動画を繰り返し再生しながら確認していた。現在の実情にとってもマッチした取り組みであると思う。

その後、7 年生（15 歳）のクラシックバレエの授業をごく短時間ずつ男女それぞれ覗かせて頂いた。男女ともに大変丁寧にゆっくりと育てられているとの印象を受けた。

最後に各科目の主任教授たち（クリスチャン・カンチアーニ氏、フェルナンド・コエルホ氏、カタリーナ・クリストル氏）とのディスカッションの時間を頂いた。彼らの主な教育方針として、学習能力など個人的な差というものに柔軟に対応し、生徒のポテンシャルを信じ時間をかけて育てていくとともに、2 週おきに学長を中心に教師陣で話し合いながら、教師自身も互いに個性を尊重し、自省しつつ教育方針を話し合いで決めていくとのこと。彼ら自身が語っていた言葉であるが、小さな規模の大学だからこそ、きめの細かい手の行き届いた教育が出来るとの自負と自信を感じた。

4. 感想

昨年夏たまたまこの大学の存在を初めて知り、そして偶然今回の交流、研修でパルッカという舞踊家の存在を知るに至った。戦争を始めとした時代の流れに翻弄されながらも、一人の芸術家の情熱が、プロのダンサー、教師、振付家を養成する大学の創立者の精神として、今も受け継がれていることに感動を禁じ得なかった。個人では決して出来ない、今回のような大学訪問、交流や見学といった研修は大変貴重なもので、私自身舞踊教師として是非ともこの研修を活かしていけるよう研鑽し努力していきたいと思った。

（柴田英悟）

テア・マアス・フォークダンスアンサンブル

Folkloretanzensemble “Thea Maass” der TU Dresden

訪問日：2017年1月18日 18:30～21:30

対応者：ゲルト・ヘルツェル (Gert Holzel) 創設者

マオト・ブッター氏 (Maud Butter) 指導者

1. 団体の概要

設立は1950年。ドレスデン工科大学 (Technische Universität Dresden) 内の日本でいえば大学のサークルのような形で設立された。これは、ヘルツェル氏のアイデアによるもので、工科大学の学生たちにダンスに触れる機会を作りたいという思いから始まった。現在では、ドイツ国内で最も実績あるダンスグループの一つとなっており、連邦や州のコンクールにも参加し、好成績をおさめている。



現在の指導者はヘルツェル氏の後継者であるマオト・ブッター氏 (写真)。テア・マアスの作品を多く上演するが、マアスの理想は「伝統的舞踊の美しさだけでなく、その多様性と敏捷性を見せること」である。ヨーロッパのほとんどの国およびアメリカで多くの公演を行っているが、これはマアスの理想を実現するための良い機会となっている。

2. 活動の実情

現在の在籍数は35名。メンバーは工科大学の学生及び卒業生で、所属年数はさまざまである。レパートリーにはドイツの民族舞踊が多いが、公演用に振付をアレンジしている。

週一回毎週水曜日の夕方19時から21時30分。大学構内の学生食堂の一角が大学から練習場として提供されている。コンクールの練習や、新しいメンバーのための稽古は週末に行われることが多く、ほぼ隔週の土曜日にも練習が入っている。

年に1回、国際フェスティバルに参加しているほか、依頼があれば年に何回も公演を行っている。メンバーの中にはこうした活動には参加しない人もある。

月謝として学生は1人12ユーロ、働いている人は22ユーロをおさめている。指導者の報酬は大学から支払われる。

3. テア・マアス Thea Maass (1908.7.14-1989.3.2) について

テア・マアスは、マリー・ウィグマンに師事し、ウィグマンの学校で学んだ。テクニックの習

得はもちろん、振付家、指導者としての芸術的な方向性がここで培われた。

ドイツ国内のさまざまなバレエ団で振付家、メートル・ド・バレエとして活動ののち、ドイツ連邦ダンスアンサンブルをエネ・ゴイシュミット（Aenne Goldshmidt）とともに設立。ドイツの伝統的な民族舞踊を伝えるとともに、舞台上踊る民族舞踊の振付をし、民族舞踊を広めることに尽力した。ダンスアンサンブルは彼女のライフワークとなった。

1990年、テア・マアスの業績に敬意を示して、現在の「テア・マアス・フォークダンスアンサンブル」に改名された。

4. 見学及び体験

ゲルト・ヘルツェル氏の案内により、練習会場に入ると指導のマオト・ブッター氏およびアンサンブルの人たちの歓迎を受けた。

ピアニストが着席し、ブッター氏の指導によりまず準備運動が始まった。この日の出席は男性9人、女性15人の計24名。派遣団メンバー、ドイツ側のウラ氏も体験参加。



まずウォームアップだが、かなりのスピードで走る、スキップ、ギャロップなどのステップをしながら円を作ったり2人組、4人組を作ったりする。そのあと全員がフロアに広がってブリエ、タンデュ、バットマンジュテなどのレッスンをし、十分にウォームアップが済んだところ

で、ダンスの基本的なステップの練習に入る。初めのポルカのレッスンまでは全員がタイツかソックスのままで参加しているが、次のラインレンダーのステップに入ると男性はブーツ、女性はスカートをつけてヒールのついた革靴を履く。続いて、マズルカやワルツのステップを使ってダイアゴナル、または円形になってさまざまなアンシェヌマンの練習が続く。ここまでの約1時間が経過した。



派遣団も加わってフォークダンスのステップを教えていただいた後、今日のために用意されたレパートリーが披露された。

『ウェット』は北ドイツの古いポルカに乗せた踊りで、収穫の休息時の若いカップルの踊り。木靴が使われている。履いて踊るだけでなく、床を打ってリズムを作り、会話をしているように見せる。



『ワゾビエン』

マズルカとワルツのミックスした踊り。4組のペアによって踊られる。男性は騎士、女性は抒情的な性格を表す。



『秋。ブドウが熟する季節に…』

テア・マアス作品。
ベルリンで1984年に初演。ドレスデンでは1985年。女性が頭の上にワインの入ったグラスを載せて踊る。
このアイデアは、ハンガリーの民族舞踊に見ることができる。



『ワイン作りの踊り』

エネ・ゴイシュミット作品。1975年初演。
ブドウの収穫からワイン造り。
ちょっとお味見して…その結果は？
真ん中に大きなワイン造りの樽に見立てた道具を置き、6組の男女がユーモラスに踊る。

この後、ダンサーたち、教師とディスカッションする時間を持つことができた。「クラシックバレエの基本にある民族舞踊という文化に直接触れることができて幸せです。」と話してくれた。ダンサーから「日本でも民族舞踊を踊りますか？」という質問に答えて、派遣団の若佐が安来節の一部を披露。踊りの意味を説明して盛んな拍手を受けた。

5. 感想

フォークダンスのイメージは、だれでもすぐに参加して、優しいステップの繰り返し、というものだが、この日の練習は軽いウォーミングアップのつもりで参加した最初の段階から、かなり大きな激しい動きがあった。ギャロップなども驚くほど高く跳ぶ。

19時から21時30分まで2時間半という練習時間の間休むことなく動いている。

参加者はダンスを心から楽しんでいる様子が見えた。新しいメンバーもいるが、基本的には同じことを要求する。回転しながらのステップなら、回転せずにやってみるなど、少し単純にしたりするが、ほぼ全体の動きを止めることなく練習をさせる。その場合にはステップをよく理解しているベテランがパートナーを組んでリードするなど、自然にみんなが助け合いながら進めていく。

コンクールにも数多く参加しているが、プロを目指すでもなく、心から楽しく、そして真剣にこの時間を過ごしている様子がとてもさわやかに見えた。

工科大学の学生がこうしてダンスという文化に触れ、照れることもなく真剣に練習をして踊る。日本でも早稲田大学のバレエ研究会など、普通の大学生が踊りに触れる機会がなくもないが、「いい大人がフォークダンス？」というようにとらえられないで、公演をして一般の人々にも受け入れられているのがとてもよい環境であると思った。

そして、ここでも指導者は大学で学んだプロフェッショナルであり、相手が楽しみのためだけに参加しているとしても、きちんとした指導法に基づいて正しく伝えられている。これはとても大切なことであると思う。

(諸角佳津美)



ヘレラウ ヨーロッパ芸術センター

Hellerau Europäische Zentrum der Künste Dresden

訪問日時：2017年1月19日 9:30~11:30

対応者：ディーター・イエニッケ (Dieter Jaenicke) 芸術監督

1. 田園都市ヘレラウの概要

ドレスデンの中心地から北へトラムで15分程走ると、ヘレラウという地区に到着する。ここは、20世紀初頭に欧州中で流行した田園都市 (Gartenstadt) の提唱者であるエベネザー・ハワード (Ebenezer Howard 1850-1928) の思想に基づき、1909年に造られたドイツ初の田園都市である。面積は約10.7 km²であり、現在も春には花が咲き乱れ、手入れの行き届いた庭付きの小さな家々が建ち並んでいる。

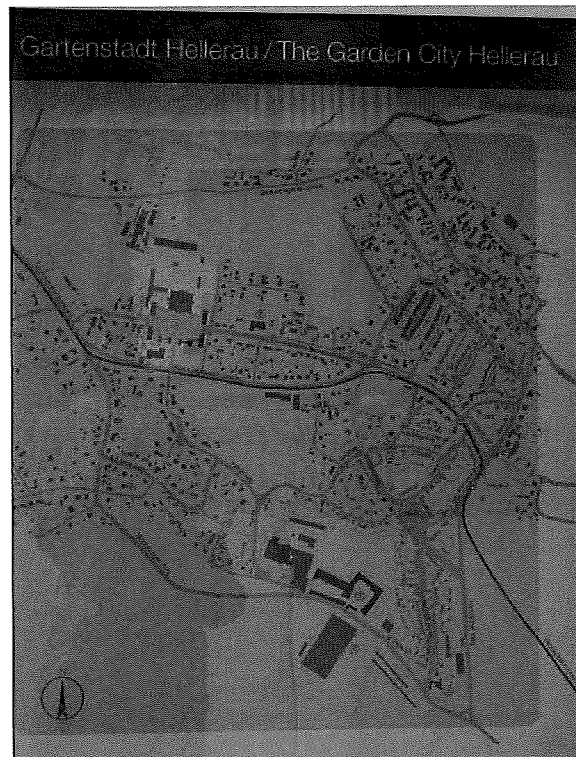
当時の一家族に与えられた家は、敷地面積が35~45 m²程度で、庭で野菜を作ることでもできた。

「住む」と「働く」を、「文化」を中心して、街づくりを試みた田園都市であった。

ヘレラウの中心に建てられた劇場は「祝祭劇場 (Festspielhaus Hellerau)」と呼ばれ、建築家ハインリッヒ・テッセナウ (Heinrich Tessenow 1876-1950) によって設計された。センターの外の地図の看板には、周辺の住居が当時のどの建築家によって設計されたのか色分けされた地図が掲げてある。リチャード・リーマーシュミット (Richard Riemerschmid)、ヘルマン・ムテジウス (Hermann Muthesius)、クルト・フリック (Kurt Frick) ら著名な建築家の名前が連なっている。

その後、祝祭劇場は旧東ドイツ時代には、警察の事務所として、あるいは、旧ソビエトの軍隊の施設として十分な修復もされないままに使用され続けた。教師の住居であった大きな家々も取り壊されてしまい、一般の人々が近づくことができないものとなり、人々の生活から隔離されて、ヘレラウは80年近く世間から忘れられた存在となってしまった。

旧ソビエト軍から祝祭劇場が返還されたのは、1992年になってからで、その後に修復が始まった。



2. ヘレラウでの教育

ヘレラウは都市計画より教育の分野で注目されることが多いが、それは、関係者たちがリトミックの創始者であるエミール・ジャック＝ダルクローズ(Émile Jacques-Dalcroze 1865-1950)を迎え、祝祭劇場という教育施設を設立したためである。

ダルクローズは、ウィーン生れのスイスの音楽教育者および作曲家で、1892年ジュネーブ音楽学校に和声理論の教授として迎えられた。その後に音楽教育の欠陥を補うため、音と身体のリズムの一体化をねらうリトミックを案出し、教育の中に導入した。1911年にヘレラウにリトミック学校を創立した。最初は音楽教育の方法として考案されたリトミックだが、ヘレラウでは舞踊や演劇と結びつき、身体と空間と光の競演ともいべきパフォーマンスを生み出したとされている。

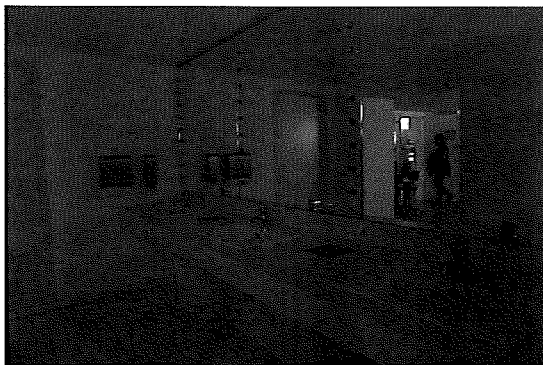
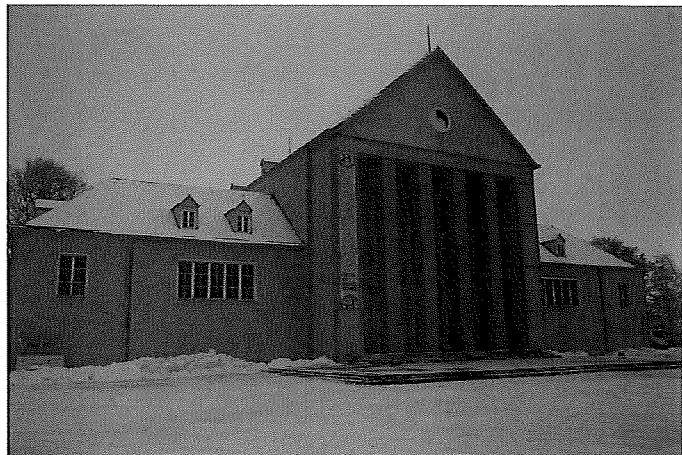
ヘレラウでのダルクローズの学校は、1914年に第1次世界大戦の勃発後に閉鎖となってしまいが、彼女は1915年にジュネーブの地で学校を再開した。リトミックは音楽のみならず舞踊にも多大な影響を与えて、ヘレラウで学んだマリー・ウィグマン(Mary Wigman 1886-1973)は「ノイエ・タンツ(Neue-Tanz)」の創始者になり、ダンサーのヴァスラフ・ニジンスキー(Vaslav Nijinsky 1889-1950)も創作の上で示唆を受けている。

3. 見学内容

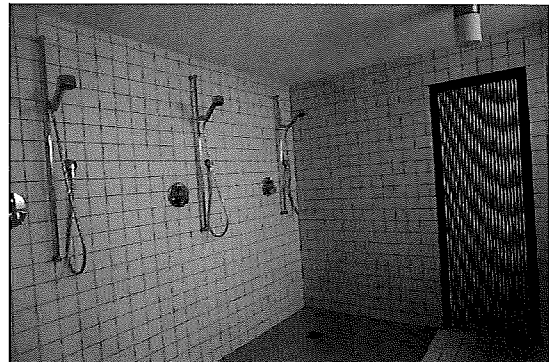
①祝祭劇場

1992年にロシアの軍隊が去った時には劇場は壊れたままであったが、2006年に建て直し、リノベーションもして2010年に現在の姿となった。天井や壁の一部は昔の劇場建物のもんを利用している。ステージの後ろには、シャワーを完備した楽屋や洗濯室などがあり、舞台美術を入れておく倉庫も設置されている。また、ステージの一部の床を下げてオーケストラピットを作ることできる。

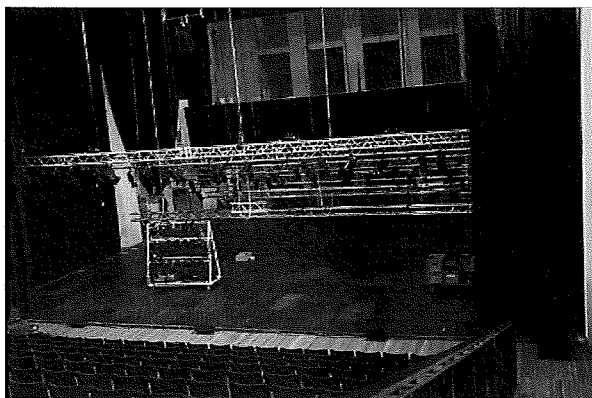
客席は500席あり可動式であるため、公演の内容によって客席を自由に設置することができる。



楽屋



シャワー室



公演準備中のステージ



昔の天井をそのまま使用している



ロビーの階段



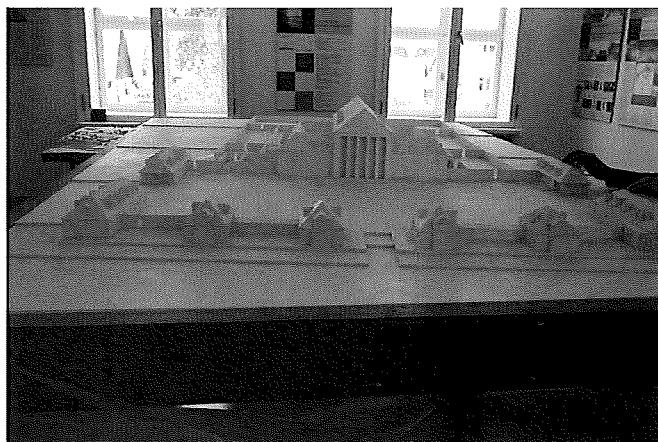
現在の芸術監督イエニック氏（写真左）は現職10年目で、彼が在職して以来ダンス関連の演目が多くなった。2016年度は年間に約200作品以上の公演を上演し、ので43000人の来場を記録している。イエニック氏には忙しい中でご挨拶いただき、また、翌日に祝祭劇場で上演されるシェルカウイ（ベルギーを拠点とする振付家）の公演に特別に招待していただけることになった。

（公演に関しては別途の報告を参照）

②観光センターとギャラリー

祝祭劇場の西側には、観光センターとギャラリーがある。劇場で開催される公演のインフォメーションの提供やチケットが販売されている。センター内のショップでは、絵葉書、カレンダー、ヘレラウに関するパンフレット、本も並んでいた。また、ギャラリーはモダンアートの展示スペ

ースとして利用されている。ガイドツアーは随時行われ、2 階に展示されたヘレラウの町並みの模型と共に、壁のパネルからこれまでの歴史を学ぶことができる。



ギャラリーにあるヘレラウの建物の模型。正面が祝祭劇場。

4. 感想

19 世紀の初頭のドイツ初の田園都市として注目を集め、発展したヘレラウが、百年の時を超えて、今もドレスデンの文化の中心として活躍していることに歴史の重みを感じた。この日の外気は氷点下 10 度以下で、外の雪の上では水蒸気が凍ってできるダイヤモンドダストがキラキラと輝いていた。100 年の歴史の中で、田園都市としての繁栄と戦争の悲劇の両極に直面して生き延びてきた祝祭劇場は、まさに空気も凍る静まり返った中に凜として建っている。そこには、当時の天井や壁を残して、ヘレラウに携わる芸術性をこれからも継承していきたいという人々の気持ちが溢れている。単なる劇場でなく、ダルクロウズの生徒が踊り、人々が歓喜したという祝祭劇場、そしてヘレラウに漂う空気に触れることのできた素敵な時間であった。

(松村とも子)



ドレスデン工科大学における青少年ダンススタジオ

Das Kinder und Jugend Tanzstudio de Technische Universität Dresden

訪問日：2017年1月19日 16:00～19:00

20日 15:00～18:30

対応者：ゲルト・ヘルツェル (Gelt Holzel) 創立者 指導者

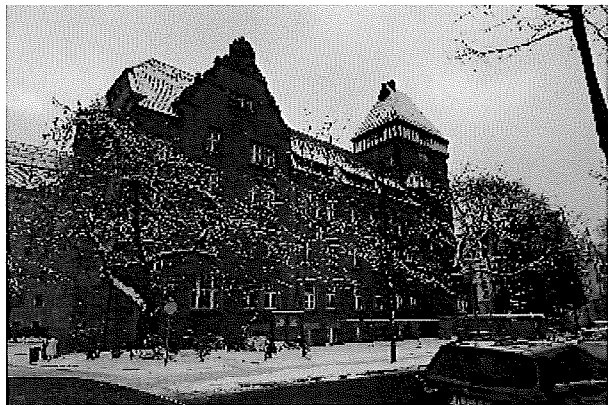
バーベル・ヘルツェル (Barbel Holzel) 創立者 指導者

1. 施設の概要

ドレスデン工科大学構内の建物3階にある食堂が、青少年ダンススタジオの練習スペースである。なぜダンスグループが工科大学のサポートを受けて活動することが可能なのか、それが日本から見れば最も関心の持たれる点ではないだろうか。まずこの大学の概要に触れ、次に青少年ダンススタジオとの関わりについて述べる。

①ドレスデン工科大学（ザクセン州立）

35,000人以上の生徒と、8,000人以上の雇用者を抱えるザクセン州最大の大学。生徒数ではドイツ最大の工科大学であり、5学部14学科に分かれている。ドレスデン工科大学の名称が使われるようになったのは1961年だが、大学自体の創立は1828年であり、200年以上の歴史を有している。



②青少年ダンススタジオ

1977年ゲルト&バーベル・ヘルツェル夫妻によって、ドレスデン工科大学所属として創立された。当時ドレスデンは東ドイツに属しており、ゲルト・ヘルツェル氏によると東ドイツは文化を生活の一部として重要視し、大学は文化に貢献することが必須とされていたため、それが可能であったとのことである。東西ドイツ統一後は大学の状況が変化し、スポーツや文化に対する国からの援助金の減少もあって青少年ダンススタジオは大学の所属を離れ、今は公益社団という立場で活動している。しかしヘルツェル夫妻の実績や、舞踊教育に対する絶え間ない尽力が高く評価され、ドレスデン工科大学内の建物を練習スペースとして継続的に利用することが認められてきた。経済的な援助は大学からはほとんど得られないが、ドレスデン工科大学後援会から少し援助金を取得している。前日に見学した「ティア・マース・フォークダンスアンサンブル」（成人対象）とともに、ダンスグループが大学内で活動を続けているのは、ザクセン州では現在ドレスデン工科大学のみである。

2. 教育内容

ここではできるだけ多くの青少年にダンスの機会を与えるため、誰にでも門戸を開いている。

- ・授業内容：ダンスの多様性を重視し、フォークダンス、モダンダンス、ヒップホップなど様々なジャンルを取り入れたクラスを行っている。テーマ性のあるダンス作品の振付も行う。但し、場所が適さないためクラシックバレエの授業は行わない。
- ・授業回数：週2回、1レッスン90分。これと別に、隔週で週末にもレッスンや作品リハーサルがある。
- ・授業料：半年で250ユーロ。但し兄弟で受講の場合は1人230ユーロ、3人目の兄弟は無料。

現在、3歳から20歳までの180名がここでダンスのレッスンを受けている。受講資格は問われないがレッスンのクオリティを保ち、生徒のモチベーションを向上させるためにも、各コンクールに出場して賞も多数受賞している。

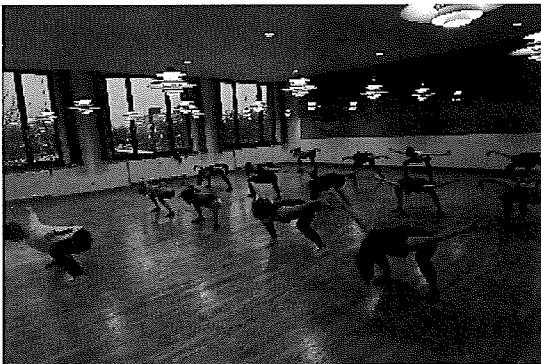
3. 見学内容

食堂が稽古場であるため、テーブルや椅子が片側に寄せられて広いスペースが作られていた。先生や生徒たちみんなですぐこの準備を行い、終了後は元に戻すとのことだった。2日間にわたって訪れたが、まず初日の見学内容は以下の通りである。(初日、2日目ともにクラス時間及び内容は、私たちの見学に合わせて、通常のクラスのいくつかを組み合わせるなど、アレンジされたものである。)

①モダンダンスクラス 16:15～17:30

指導者：エレナ・チェンチェッティ (Elena Cencetti)

生徒：女子13名 (11～17歳)



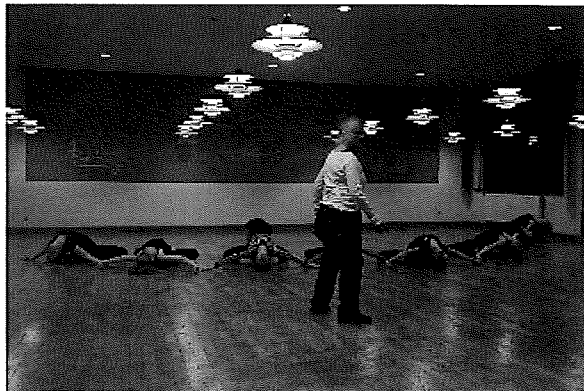
指導者のチェンチェッティ氏はパレルカ大学でダンス指導者養成の教育課程を修了し、フリーランスの教師として活動。2014年から当グループに主にジャズダンス、モダンダンスなどの技術指導を行っている。できるだけ楽しく技術を習得してもらうことを心がけていると伺った。ストレッチを交え、ウォーミングアップを兼ねた動きからレッスンがスタートした。生徒たち

の服装は自由ながら動きやすく、身体のラインの出るもので、足元は靴下着用、またははだだった。前半10分程はフロアに身体をつけた動き（寝る、座る、這うなど）が多く、腹筋などの筋力アップも図られている。その後フロアに立ち、踊りのための基礎的な手足の動きの練習に移る。そのあとはバランスや回転、ジャンプの練習。また動きをつないだコンビネーションも取り入れられ、次第に個々の動きも大きくなり、全体としても稽古場いっぱいに動きが広がっていった。最後は開脚など大きなストレッチを行って終了した。

②作品鑑賞 18:30～19:00

『真珠のマジック』（振付バーベル・ヘルツェル、作曲レニー・オーブリー）

指導者のバーベル・ヘルツェル氏振付作品を見学した。出演者は先ほどのクラスに出席していた女子9名。ヘルツェル氏は大学でアクロバットも学んだとのことで、アクセントとしてその要素も取り入れている。それぞれが真珠になり、波に揺られ、ころころ転がる振付は、非常に柔軟性の要求されるものだったが、子どもたちは難なく、なめらかにこの作品を踊っていた。



次に、翌日20日の見学内容について述べる。

③コンテンポラリーダンスクラス 15:00～15:30

指導者：ジョセフィーヌ・ワットゾルド（Josephine Watzold）

生徒：男子7名（8～15歳）



ジョセフィーヌ・ワットゾルド氏もまた、パルッカ大学でダンス指導者養成課程の学士を修得。ワットゾルド氏には17日の夜に、ノイシュタット地区の「芸術の中庭」と呼ばれている通り周辺を案内していただいた。指導クラス内にとどまらずゲルト夫妻の活動をアシストしている指導者である。この日は男子のクラスで、服装は自由（Tシャツとひざ上のスパッツ）、全員はだしだ

った。昨日と同様、ウォーミングアップからクラスがスタートしたが、腕立て伏せ、腹筋運動などが続く。「男子なので、フィットネスの要素もふんだんに取り入れている」とワットゾルド氏が話していた。次にコンテンポラリーダンスの基礎的な動きの練習に移る。おもに、動きを止めずにエネルギーを連続して体の部分から部分へ伝えていくことに主眼が置かれている。このあと、移動や方向転換を含んだ大きな動きの練習をして、指導者交代となった。

④フォークダンスの基礎練習 15:30～16:00

指導者：ゲルト・ヘルツェル氏

生徒：①に同じ

ゲルト・ヘルツェル氏はこのダンスグループの創立者であり、「ティア・マース・フォークダンスアンサンブル」をずっと指導してきた人物でもある。ダンサーとしてドイツ国内で活動後、

ライブツィヒ大学で舞踊教育を学んだ。青少年ダンススタジオでも、フォークダンスについてはゲルト・ヘルツェル氏が指導に当たっている。最初の15分は、フォークダンスのステップ練習にあてられた。その後、細い木の棒を持つての練習になる。木の棒は農作業を連想させ、踊りが収穫時の気晴らしや楽しみであったことを感じさせる。クラシックバレエ作品によく登場する「村男の踊り」の原型でもあるだろう。棒をもったままのスクワット、戦いのように打ち合わせる、ジャンプで入れ替わるなど、さまざまな振付の部分稽古が行われた。

⑤作品鑑賞 16:00~16:30

『男』(Manner) (振付:ゲルト・ヘルツェル)

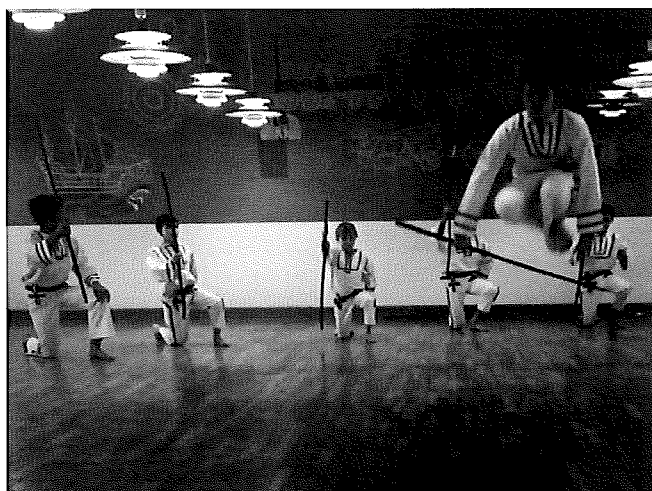
これは2015年「青年が踊る」というドイツ連邦コンクールで第1位を取った作品である。出演者は男子7名、女子2名。

「Manner」には立派な大人の男、という含意があるらしく、少年が帽子をかぶって大人を気取り、作品をコミカルな雰囲気で包んでいく。女の子たちがもってくる大きな箱から次々に取り出される帽子がこの作品の主役のひ



とつだが、もうひとつの欠かせない存在は、みんなが囲んでいるアコーディオン弾きである。アコーディオンを担当した男性はこの日のクラスのピアノ伴奏も行っていたが、非常に優れた演奏者であり、指導者の意図や作品の表情に合わせて自在に音楽を奏でることのできる人だった。

『スロバキアのフォークダンス』(Slowakischer Jungentanz) (振付: Zivana Vajsarova)



1990年の振付作品で、このダンスグループのレパートリーである。先ほどのゲルト・ヘルツェル氏の部分練習を、完成された形で見ることができた。

出演者は男子7名。スロバキアの衣装をつけ、全員が木の棒を持っている。伝統的な音楽が流れ、継承されてきたステップがダイナミックに展開された。

⑥コンテンポラリーダンスクラス 16:30~17:40

指導者：バーベル・ヘルツェル

生徒：女子13名(8~10歳)

バーベル・ヘルツェル氏は幼稚園教諭として3年間勤務したのち、ゲルト・ヘルツェル氏と同じくライプツィヒ大学で舞踊教育を学んだ。習得したクラシックバレエの要素も取り入れつつ、コンテンポラリーダンスの指導、振付を行っている。このクラスはまず、子どもたちが自由に歩き回ることからスタートした。歩くテンポは決まっているが自分でパートナーを探し、2、3人で手をつないでまた歩く。方向は指示されない。そのあとセンターにきちんと並び、基礎的な動きの練習に入った。きちんと力を入れて立っているかどうかチェックを受ける。この後また音楽に合わせ、自由に動き回る練習に移った。型の習得と、自由な発想の動きの引き出しが交互に行われているように感じられた。ここで『カエルとなまけもののカモ』(振付：バーベル・ヘルツェル)という作品のリハーサルに入った。スポーツ好きのカエル(女子1名)と、食べることの大好きなカモ(女子6名)。カエルやカモの動きの特徴をふんだんに取り入れたもので、特にカエル役の女の子の表情の豊かさが印象的だった。最後に開脚練習と、側転を何度も連続する練習を行って終了した。



⑦作品鑑賞 17:40~18:30

『帽子とスティック』(Mit Hut und Stockchen)

(振付:ゲルト・ヘルツェル)



2016年にザクセン州の「青年が踊る」というコンクールで第1位を取った作品であり、今年連邦のコンクールへの出品が予定されている。今日の出演者は女子11名で、ほとんどが昨日のレッスンの出席者だった。ここからの3作品は衣裳付きで、私たちのための小さな発表会として用意してくれたとのことである。ミュージカル風の軽妙な振

付の中で、小さい女の子2人がひとときわ表情豊かに踊っていた。

『太陽』 (振付：バーベル・ヘルツェル)

前述の2016年のコンクールで第2位を取った作品。太陽が眠ってしまい、すべての生命にとって大切な存在である太陽をみんなで起こす、というストーリー。これに限らず、作品には必ずテ

キストがあるとバーベル・ヘルツェル氏が話していた。太陽の役は『帽子とスティック』でも活躍した小さい女の子のひとり、パオリーナ（12歳）。

『お化けちゃん』（振付：バーベル・ヘルツェル）

この作品のテキストは、「夜になり、見習い中のお化けたちが現れる。おどかしても人は誰もこわがってくれないし、今日はお化けをやりたくない。そうだ、みんなで踊ろう！先生もまだ寝ていることだし。」というもの。お化けたちがまじめに怖がらせようとする様子、一転して爆発的に楽しく踊る様子が、シンプルな衣裳をうまく使った振付で存分に表現されていた。テキストに沿うことが、生徒たちの表現を正確にすると感じられた。

4. 感想

青少年ダンススタジオは、昨日見学したティア・マース・フォークダンスアンサンブルと立場が異なり、ドレスデン工科大学に所属しているわけではない。それでも大学内で活動を続けることができるのは、単に「ドイツだから」ではなく、まずヘルツェル夫妻の尽力によるところが大きい。それとともに、プロフェッショナル（ここでは、専門家として知識、



技術を有しているという意味で用いる）の教師が、ダンサーを目指すのではない子どもたちを指導して、すばらしい成果を上げていることが理由としてあげられるのではないだろうか。

「プロフェッショナルに教えるのも、一般人に教えるのも、プロフェッショナルの舞踊教師であるべきだ」という考えは、ドイツ舞踊連盟の大きな目的でもあると、今回の視察中に何度も伺った。ここでは指導者のエレナ・チェンチェッティ氏もジョセフィーヌ・ワットゾルド氏も、今回見学したパルッカ大学のダンス指導者養成課程を修了している。生徒たちの習熟度のいかんにかかわらず、健康面、芸術面、技術面すべてにおいて、指導者は生徒たちの心身に影響を与え続ける。教師がプロフェッショナルであることの意義はきわめて大きいとすることができるだろう。

子どもたちに将来の夢をたずねると、「先生」「医師」「オペラ歌手」などの答えが返ってきた。またダンスはあなたにとって何？と聞くと「人生」「楽しみ」「自分以外になれるもの」などの返答だった。ある意味でどのような活動も職業も、自分の心身を用いて行っていくもの、ということもできる。きちんと習得されたダンスが子どもたちの将来をさまざまに支えていくだろう、と強く思った。

（錦見真樹）

ドレスデン市内視察

Dresden

訪問日：2017 年 1 月 20 日 10:00～15:00

1. 市の概要



ドレスデンは、ドイツ連邦共和国、ザクセン州の州都でドイツの東の端に位置する。チェコ共和国との国境に近い。面積 328.31 km、人口は約 54 万人である。

この町は美しいエルベ川を挟んで右岸をノイシュタット（新市街）、左岸をアルトシュタット（旧市街）と呼ばれている。名前からするとノイシュタットの方が新しい町という意味なのだが、実はアルトシュタット

トより歴史が古い。しかし、ザクセン選帝侯時代の大火災により、右岸は、ほぼ全域を焼失した。そのため「全く新しく生まれ変わって繁栄して欲しい」との願いから、選帝侯がノイシュタットと名付けたといわれている。築 100 年を超える建物が多く、空襲を経験していながらも、古いバロック様式の美しい町並みを保っており、現在では人気の観光都市である。

陶磁器で有名な町、マイセンへは約 25 km と近い。ドレスデン城のアウグスト通り沿いにある高さ 8m、全長 100m の『君主の行軍』は 2 万 4 千枚以上の、マイセン磁器タイルが使用されている。

その左から歴代 35 人のザクセン君主が、それぞれの時代、時代の様相で描かれている。



2. 緑の丸天井 (Historisches Grünes Gewölbe)

午前中の自由観光で私たちが訪れたのは、レジデンツ城に面した博物館である。ここは 11 世紀から続いたザクセン王家の豪華な宝飾品を展示してある。天井はアーチ形を組み合わせた形状で、柱が緑に塗られていたことから「緑の秘密の保管庫」と言われていたが、日本語では「穹窿」と訳されるべきところが、難しい言葉であったため「丸天井」という訳が定着したようである。私たちは緑色の丸天井をイメージしていただけに、ちょっとがっかりした。しかし日本語音声ガイ



ドを借りることが出来たため、内部の説明は分かりやすく、すぐに自分の誤解だったと気づいた。

建物は東西ドイツ統合後、4年の歳月と約60億円の費用をかけて復元された。また、収蔵品は10年余りかけて、専門技術者や工芸家の手によって手入れが行われたとのことである。

それ以外の豪華な展示品は、1942年にソ連にかくまわれ、ソ連を旅することになる。64年ぶりに戻ってきたこれらの品は、私たちの手が届くほど間近に展示されていた。戦火の影響で黒ずんだものは、その歴史を忘れないように、



そのままにしてあるものの多数ある。

全部で9つの部屋があり、その部屋に所狭しと3000点の宝物が展示されているのは、圧巻であった。

＊緑の丸天井

3. ザクセン州立歌劇場（ゼンパー・オーパー）



東ドイツ時代は国立歌劇場と呼ばれていたが、現在は州立で、非常に人気の高い歌劇場である。

ここでは、歌劇場の案内係の解説付きで、中を回った。

この劇場は、1838年から1841年にかけてザクセン王国のオペラ劇場として、新古典主義の建築家ゴットフリート・ゼンパー（1803-1879年）の設計によって建設された。1848年

革命の際、革命側を支持したゼンパーは、ロンドンへの亡命を余儀なくされた。1869年劇場が火災で焼失した際、特赦を受けて、再びゼンパーが基本設計をし、再建を開始し、1878年にその息子マンフレート・ゼンパーによって完成される。1945年英米軍のドレスデン爆撃によって、大きな被害を受け、瓦礫と化した。また、1910年頃はアールヌーボーが流行っており、壁はダークグ

リーンに塗り替えられたりして本来の姿を失ってしまった。再建は不可能かと思われたが、1972年にある人の遺産から、昔の状態がわかるものが発見され、1977年復興が始まる。1985年に完成し、その5年後の東西統一によってザクセン州立歌劇場となる。

ここでの面白い話は、この建物の豪華さにある。木目の壁に数か所、白く塗装が剥がれたような箇所がある。しかし、これは塗装が剥がれたのではなく、石膏の壁に、木目調にペイントした際、あやまって白色が付いてしまったものだった。木目は一つずつ手書きしてあるのだという。



入って1階はシンプルなつくりであるが、王様や貴族たちが通る2階は、豪華絢爛で、壁も天井もきらびやかである。しかし、本物の大理石は中央の手すりだけで、後は1階の壁同様、コンクリートで作られたプレートを詰め込んであるという。今でいう無垢の床材ではない、合板の床のようなものだ。

廊下を書いてある絵画は、またどれも素敵なものばかりで、これらは王様や貴族が、演目の休憩時に、廊下を散歩しながら楽しんだという事だった。ちなみに、この当時のヨーロッパのほとんどの劇場のように、庶民は王様や貴族に出会うことなく、外の階段から4、5階へと直接行けるようになっていた。

この劇場では、リヒャルト・ワーグナーが1843年から1849年まで指揮者を務めており、自ら作曲した『リエンツィ』『さまよえるオランダ人』『タンホイザー』の初演の地としても知られている。全客席数は、現在のところ1300席を有する。昔、王様や貴族が、家族で寛ぎながら演奏を楽しめるよう、ゆったりとした部屋の間仕切りがあり、また、庶民のための4、5階の立見席にも椅子が置かれている。



私たちが案内役の説明を聞きながらホール内を見ている最中、舞台上では明日催される現代的なバレエ『ロミオとジュリエット』のための仕込み作業を、14名ほどの屈強な男性たちが行っていた。そのような様子を一般に公開しているのはとても面白いと思う。この案内役付きの短いツアーは、人気らしく、次々と観光客らがホール入り口で順番を待っていた。

4. 感想

当然ではあるが、この町も第2次世界大戦の爪痕を多く残していた。そして、それらを忘れ去るのではなく、教訓とし、「負の遺産」として大切にする精神を感じた。

前回の訪独の際もそうであったが、同じ敗戦国として、戦後の文化への取り組み方について考えさせられるところがある。



私は、日本史に特別に詳しいわけではないが、日本の復興は、どこかアメリカナイズされた、欧米コンプレックスの上に成り立っている気がするのである。古きものは、古臭いと嘆きつつ、それでいて、民族の壁を超えることは避けてきた。

しかしながら、ここドイツはそれとは反対に古い文化はそのまま残し、多様性を重んじ、人種や国籍を超えようとする姿勢が、文化遺産の随所にみえる。これが、ダンス文化やダンス芸術の教育の現場にも、少なからず影響を与えているのではないかと思うのである。

前回、訪独した際に披露した『安来節』をドイツダンス連盟のエラマン氏が覚えていてくれて、行く先々で私に、「日本の踊りを見せてくれ。」と言ってくれた。前回

は突然で何も準備がなかったが、今回は、ざる、豆絞りの手ぬぐい、半被、鼻を隠す一文銭を準備して行っていた。ただし、安来節保存会の方々には大変申し訳ないのだが、その踊りは適当なものである。しかしながら、毎度それらの扮装をし、同メンバーの柴田氏の、これまた適当なお囃子に合わせての演技となった。

エラマン氏の思惑通り、子供たちは大変面白がってくれたのだが、私にはこの踊りの精神が、今の日本のダンス文化、ダンス芸術にいかに関わるかが、解釈できないのである。

どちらが正しくて、どちらが間違いという事ではないと私は思うが、そのように戦後は西洋文化へのあこがれを強めていったのが、日本の姿であるように思う。これからは、自国の文化としてのダンスと、世界にも通じる芸術としてのダンスとしての明確な目的

意識を必要としていると思う。洋舞であっても、日本の歴史に沿った成長と発展を模索していくべきであると、この町に教えられた。



(若佐久美子)

コンテンポラリーダンス公演 『Babel(words)』

公演日時：2017 年 1 月 20 日 20：00～22：00

公演場所：ヘレラウ祝祭劇場

1. 公演概要

題名：『Babel (words)』(バベル (言葉))

振付：シディ・ラルビ・シェルカウイ (Sidi Larbi Cherkaoui)

ダミアン・ジャレ (Damien Jalet)

ヴィジュアルデザイン：アントニー・ゴームリー (Antony Gormley)

作曲：Gabriele Miracle Mahabub Khan Patrizia Bovi Sattar Khan Shogo Yosii

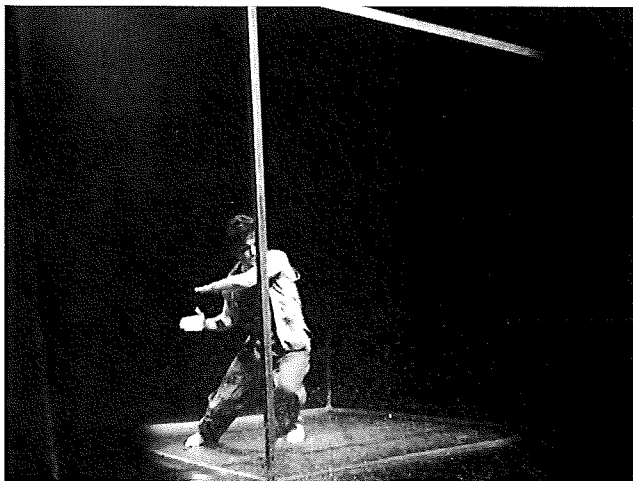
演奏：Gabriele Miracle Mahabub Khan Patrizia Bovi Sattar Khan Tsubasa Hori

衣裳：Alexandra Gilbert

照明デザイン：Adam Carree

2. 公演概説

シェルカウイとジャレは、ベルギーを拠点に活動する振付家。『Babel(words)』は彫刻家ゴームリーとの共同制作による3部作の完結編となる。



旧約聖書の『バベルの塔』の物語をモチーフにした同作は、民俗、テリトリー、様々な異なる言語、国家のアイデンティティーといった問題を、10か国以上の国から参加する多国籍なダンサーとミュージシャンのパフォーマンスによって描く。ターナー賞受賞作家のゴームリーが手掛ける5つの大きな直方体フレームの舞台装置は、パフォーマーの動きによって配置を変え、領土、陣地、自室、リングと

いったスペースを表現する壁や境界になるという。(以上、CINRA.NET ニュース、2014 年 5 月 26 日号より引用)

3. 公演内容および感想

前日 19 日にヘレラウ祝祭劇場を訪れた際、芸術監督のディーター・イエニッケ (Dieter Jaenicke) 氏から、明日が『Babel (words)』の公演初日であり、日本からの訪問団の皆さんをご招待したいと告げられた時は、驚きと幸運を感じながら感謝をお伝えした。シェルカウイはその革新的な表

現で世界の演劇、ダンスに衝撃を与え続けていると言われており、私自身も訪独前に「シェルカウイ、踊りで世界を救う、41 日間の闘い」というドキュメンタリー番組を見たばかりだったからだ。定刻前に訪れると、前日に見せていただいた時はまだ骨組みだけだった会場が「劇場」へと姿を変え、すでに多くの人々がつまかいていた。ホワイエでワインを飲みながら語り合うところからすでに公演の楽しみが始まっているが、ここでは客席に飲み物を持ち込むこともできる。開幕前にイエニッケ芸術監督の挨拶があり、その中で私たち、日本バレエ協会からの訪問団を歓迎するとコメントが述べられた。

作品は2時間、休憩はなく一気に進んだ。各国のダンサーやパフォーマーがてんでに勝手に、自分たちの国の言葉で語り、踊り、魅かれ合い、また反発する。言葉が通じない中で身体は雄弁で、好意も敵意も身体によってすぐさま相手に伝わるし、また観客にも伝わる。日本人のパフォーマーも重要な役割を務めていた。ゴームリーによる舞台装置のフレームは、驚くほどスムーズに位置を変え、タワーや檻など様々なものを連想させた。幕が下りた時、ほぼ満席の客席では観客が拍手と同時に足を踏みならし、作品への賛美を全身で伝えていた。

終演後はホワイエにテーブルが並べられ、その日の観客にワインやチーズ、果物などがふるまわれた。その様子はまさに「祝祭劇場」の名にふさわしく、公演開演前から終演後まで、語りあいも含めてここには「劇場文化」が息づいていた。

ヘレラウ祝祭劇場は、中の施設が簡単に解体、移動できるしくみになっていて、「多目的ホール」の先駆的存在と言える。簡潔なスタイルの劇場に合うこともあり、近年行われているダンス公演のほとんどがコンテンポラリーダンスのプログラムである。『Babel (words)』もまた劇場によく合い、舞台装置のフレ



ームが外の箱のような劇場と入れ子になっているようにも感じられた。そして偶然ではあるが、「多様性」(国籍、個性、文化、ジャンル、その他)を大切にしているシェルカウイのプログラムに招待されたことは、「ドイツの舞踊教育の多様性」を見せることが今回の私たちの訪問にあたっての大切なポイントのひとつ、と位置づけておられるドイツ舞踊連盟の意思にかなったハプニングのように思われた。

(錦見真樹)

ケルンでの懇親会

2017年1月21日 18:00～21:00

ドイツ・ケルン体育大学 ゲストハウスのレストランにて開催

1. ドイツ連邦ダンス連盟 前会長エレマン氏の挨拶

最初にエレマン氏から、今回の日本からの派遣メンバー7人の紹介が行われた。メンバーの一人一人について、名前を始め、日本での役職、所属や主宰断団体の紹介、指導している内容について細かく触れていた。

次に、我々が1月15日にフランクフルトに到着してから、ドレスデンに滞在していたこれまでの1週間の視察の様子が細かく説明された。

最後に、懇親会に参加されている方々の紹介が行われた。2016年5月に来日したドイツの訪問団メンバー、今回のプログラムの関係諸機関の方々、そして、我々がケルンで訪問する予定の学校や施設の関係者が主であった。



2. 新会長 クリスティーナ・オーベルマイヤー氏の挨拶

ドイツと日本の交流の大切さを強調して、今回の交流が実り多いものになるように心から願っていると述べられた。文化評議会の関係者、訪問に協力してくれた施設や学校関係者にお礼を述べると同時に、前会長のエレマン氏には、この事業をここまで成功させてくれた感謝の気持ちを表していた。19:30pmに全員で乾杯のあとに食事が始まり、レストランのあちらこちらで、訪問団を交えてのおしゃべりや、懐かし再開が始まった。

3. 主な来場者

懇親会には、施設関係者が多く来場し、1回目の訪日メンバーも遠くから会いに来てくれた。ベルリンバレエ学校長ラルフ・ステーブル(Ralf Stable)氏が病気のため、サブリナ・ソドヴァスカ(Sabrina Sadwaska)氏が多忙のために欠席で残念であった。

ドイツ連邦ダンス連盟 新会長： クリスティーナ・オーベルマイヤー Kristyna Obermainer
副会長： ディター・クノーデル Deiter Knod
前会長： ウラ・エレマン

第1回訪日メンバー： シモーネ・マイシェ Simone Mauche、その娘、他に生徒1名
カーチャ・ボルスドフ Katja Borsdarf

ドイツ文化評議会代表： バルバラ・フリュッゲ・ウォーレンベルグ Babara flugge-wollenberg

ドイツ連盟 事務局： カタリーナ・モエ Katharina Mol

ドイツ連盟 青少年文化教育連盟 国際交流担当者： ロルフ・リッテ Rolf Witte

カルト・ステージ・ダンススクール主催者： エレナ・オーバーワレナイ Elena Oberwalleney

同スクール教師： マリナ・ワーグナー Marina Wagner

ケルン・ドイツ体育大学 教授： デニス・テンメ Prof. Dr. Denise Temme

ノルトライン＝ヴェストファーレン州立応用科学カトリック大学 教授：

マイケル・オーベルマイヤー Michael Obermayer

フェルバート市立ランゲンベルグ・ギムナジウム校長：

マルクス・ユーバーホルツ Markus Ueberholz

同校 体育教師 ダンス専門：

ガブリエル・フォークト Gabriele Folgt とご主人

4. 感想

フランクフルトとドレスデンの1週間の滞在を終えて、ケルンへ移動した日の夜に懇親会が催された。パーティー会場のあちらこちらで、日本側とドイツ側の人々が、これまでの滞在のこと、ドレスデンで見た公演の話、それぞれの国のダンス事情など様々な話題で話の花を咲かせていた。また、昨年来日したメンバーとの嬉しい再開も果たすことができ、親交をさらに深めることができた。



来場者が退席する際には、「また、火曜日お会いしましょう」「水曜日にお待ちしています」「ドイツ滞在を楽しんで下さい」などの暖かい言葉を下さり、当日の訪問を心待ちにして下さる様子で、嬉しい限りであった。

新しい訪問先でどのような指導に触れることができるのか、毎回期待と緊張の連続であるが、この懇親会のおかげで、すでに知っている方を訪問するという安心感を抱くことができ、これまでの交流の成果を感じられ、非常にありがたかった。
(松村とも子)

ケルン市内視察

Cologne

訪問日：2017 年 1 月 22 日 11:00—21:00

1. ケルンの朝



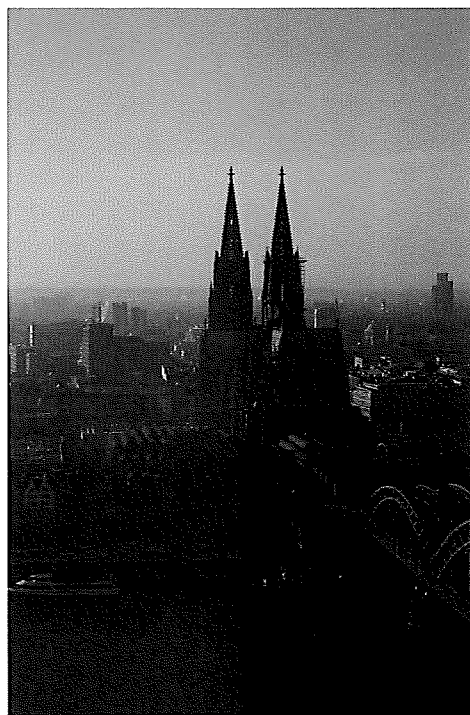
私たちの宿舎であるケルン体育大学ゲストハウスの裏は森になっていて、少し先に湖がある。ケルン市内見学の日曜日の朝、湖まで歩くと、冬の森には清廉な空気が張りつめていて、木立の姿は古典バレエ『ジゼル』の背景そのままだった。教会の鐘が鳴るのを聞きながら、やはり伝説はそれが生まれた土地に立ってこそ体感できると実感した。

2. ケルン概要

ケルンはライン川沿いにある商工業都市で、人口 106 万人。ドイツではベルリン、ハンブルグ、ミュンヘンに次いで 4 番目に大きな都市である。ベルギーやオランダの国境に近い。元はローマ帝国の植民地として成立し（ケルンの名はラテン語の「コロニア」（植民地）に由来）、2000 年の歴史を有している。またハンザ同盟の一員として、中世やルネサンス期にはアルプス以北で最大の都市であった。

第二次世界大戦中、空襲によりケルンの人口は主に住民の避難によって 95% 減少し、市街のほとんどが破壊された。できるだけ多くの歴史的建造物を復元することを意図した再建の結果、新旧の建物が混じり合った独特の景観を呈している。破壊を免れ、奇跡的に残ったケルン大聖堂は、ゴシック建築の最高峰と言われる。

ライン川沿岸地域の文化の中心として、ケルンには 30 以上の博物館と 100 以上の美術館があり、またオーデコロン発祥の地としても知られている。



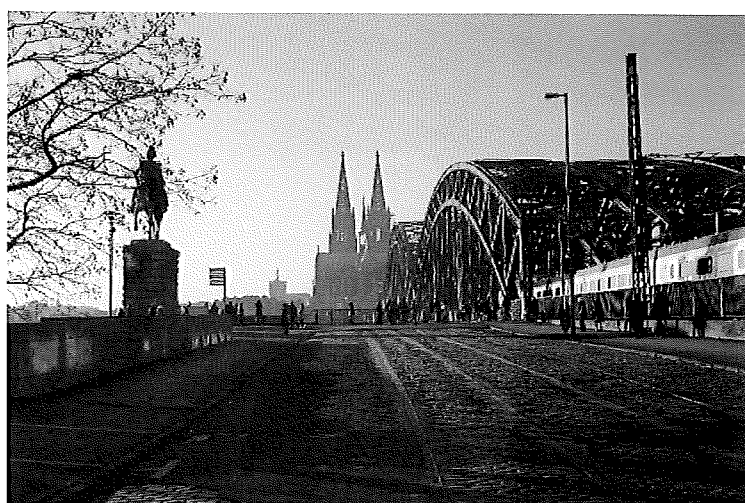
3. ケルン市街

路面電車を利用して、11時過ぎにケルン市中心部へ出た。ノイマルクト駅（新市場の意）周辺はショッピングゾーン、隣のホイマルクト駅（干し草市場の意）のあたりは飲食店が多く、にぎわっている。特に11月から2月まではカーニバルの時期だということで、活気も一層の様子だった。ケルンのビールはケルシュと呼ばれ、まるで炭酸水のように人々に親しまれている。自家醸造のケルシュを供する居酒屋も多く、ケルシュをサービスするのはケルビスと呼ばれる伝統的な職業の人々の役割である。私たちもアイスバイン（豚すね肉料理）など名物料理を楽しんでから、街を歩いた。

中世の時代に敷かれた石畳の道が、まだ数多く残っている。立ち並ぶ居酒屋はカーニバルの扮装の人々でいっぱい、音楽が漏れ聞こえてくる。カーニバルには地域色があり、ケルンの特徴はとにかく歌うこと、だそうだ。扮装については、グループや団体ごとにテーマがあるようだった。大聖堂に近いこの辺りには教会も多い。大洪水にも遭っていて、どのくらいまで水が来たかを示す標識が立っていた。



①ライン川とケルン・トライアングル（展望台）



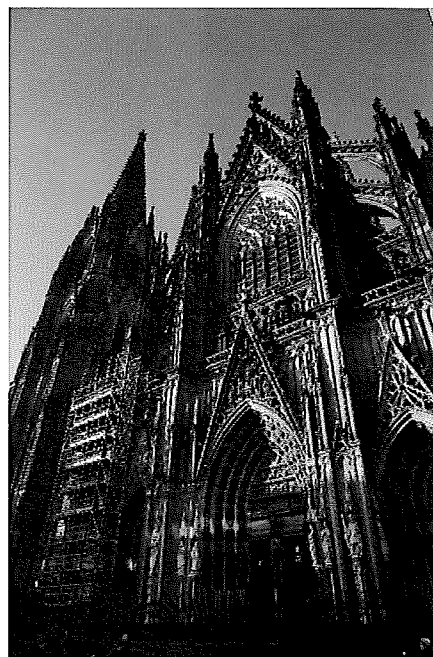
大聖堂前の広場からホーエンツォレルン橋を渡って、ライン川の向こう岸に向かった。この橋は長く、歩いて15分ほどかかる。渡りきって右手にあるケルン・トライアングル（Köln Triangle）という高層タワーに到着。屋上展望台からは大聖堂や川を含むケルン市のパノラマが見渡せる。

②ケルン大聖堂とその周辺

再び橋を渡り、16時ごろ大聖堂前に着いた。ケルン大聖堂（Kolner Dom）は大都市ケルンの中心に立つランドマークである。

〈歴史〉

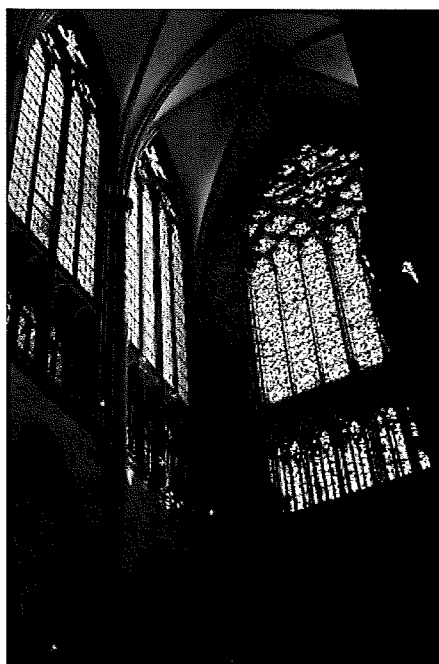
現存の大聖堂は3代目で、初代が完成したのは4世紀のことだった。12世紀後半には、東方三博士の聖遺物が置かれたことで多くの巡礼者を集め、1248年、2代目の焼失を機にゴシック様式の大聖堂の建設が始まった。16世紀初頭ごろから資金不足におちいり、また人々の関心が薄れたこともあって建設が凍結し、その後300年以上にわたって未完成の景観を見せることになる。19世紀に入ってようやく、中世から伝わる設計図に従って建設が再開、開始から600年以上の時を経て1880年に完成した。1996年、ユネスコ世界文化遺産に登録。



〈内部〉

主祭壇の後ろに、東方の三博士の遺骨を納めた聖遺物匣が安置されている。匣には中世の金細工技術が凝らされ、重さは300キロ。今も1月6日はケルンの要人が集まって参拝し、匣が開けられる日であると伺った。

また、第二次世界大戦時の空襲で破損した部分の修復の一環として、ステンドグラスの一部のデザインがケルン在住の画家、ゲルハルト・リヒターに任された。近代的なモザイク風の市松模様置きかわったこのステンドグラスからは、明るい光が差し込み、この歴史的な建築に新しく独特な魅力を加えている、という感じを受けた。リヒターは大聖堂を設計した中世の建築家の意図を汲み、19世紀のステンドグラスにすでに使われていた80色を選んでいく。



〈周辺の美術館〉

大聖堂の近辺には、ローマ・ゲルマン博物館とルードヴィヒ美術館がある。この日は時間の関係で、どちらも外から見るだけになったが、博物館の方はローマ時代の遺跡の上に建てられていて、当時のモザイクをそのままの状態で展示している。また、ルードヴィヒ美術館では近代美術作品を見ることができ、ピカソ、ウォーホルやリキテンシュタインの絵画も多数所持している。

4. 市街散策

大聖堂から離れ、再び市街を散策する。オーデコロン（ケルンの水）の生まれた場所であり、博物館も併設されているファリーナ社本店を訪れた。イタリア人調香師ヨハン・マリア・ファリーナは1709年、ケルンに世界で最も古い香水の工場を作り、香水に「オーデコロン（ケルンの水）」と名付けた。その香りは現在に至るまで変わらない処方で製造されている。店内では各星座をテーマにした香りなど、新しい商品も数多く展開されていた。



またファリーナより100年後に、グロッケンガッセという通りに別のオーデコロン製造所が建設された。この通りの区画につけられた番号「4711」がここの社名となり、日本でも愛好者の多いオーデコロン「4711」の名称にもなった。この後しばらくショッピングストリートを歩いたが、日曜日のためほとんどの店舗が休業していた。



5. 夕食

18時ごろ路面電車でケルン体育大学方面に戻り、しばらく歩いて、ジャガイモ料理の有名なレストランへ。ドイツと言えばジャガイモ料理を思い浮かべる人は多いのではないだろうか。このレストランはジャガイモのピザやジャガイモのグラタンなど、さまざまに工夫されたジャガイモ料理で人気があるそうだ。ドイツ舞踊連盟元会長のウラ・エレマン氏に名物メニューを余すところなく選んでいただき、メンバー全員でケルンについて語りながら楽しむ夕べとなった。



(錦見真樹)

フォルク ヴァング芸術大学

Folkwang Universtat der Kunste

訪問日：2017年1月23日 10:00から13:30

対応者：マルー・エロード (Malou Airaud) IZT ディレクター、モダンダンス教授

シュテファン・ブリンクマン (Stephan Brinkmann)

IZT 役員 コンテンポラリーダンス教授 博士

クラウディア・リュートリンハウス (Claudia Luttringhaus)

IZT およびダンススタジオのオーガナイザー

1. 団体の概要



フォルク ヴァング芸術大学は、1927 年に設立され、芸術、教育、科学における学際的研究、講義、実習を行っている。ノルトライン・ヴェストファレン州の中のエッセン・ヴェルデン、エッセン・ツォルファーライン、デュイスブルク、ドルトムント、ボシュームの5か所を拠点とし、州の中心的教育機関となっている。今回はエッセン・ヴェルデンにある校舎を訪ねた。

この大学の設立の基盤となったのは、カール・エルンスト・オストハウス (Karl Ernst Osthaus 1894-1921 ハーゲンの美術愛好家) が掲げた次のようなビジョンである。「学問の境界を越えて芸術に貢献する活動をし、民主主義社会の中心に芸術の存在を確立する。」創立時には、クルト・ヨース (Kurt Jooss 振付家)、ルドルフ・シュルツ・ドーンブ (Rudolf Schulz-Dornburg オペラのディレクター)、ハイン・ヘックロス (Hein Heckrogh ステージデザイナー)、その他の当時の重要な芸術関係者が関わっている。

学問の境界を越えた学際的活動を推進することをめざすフォルク ヴァング・アイデアをコンセプトとし、世界各国の大学とのパートナーシップ、交換留学、国際的なプロジェクト、異なる芸術分野のコラボレーションなどを手掛ける。



ブリンクマン氏 (立っている男性)

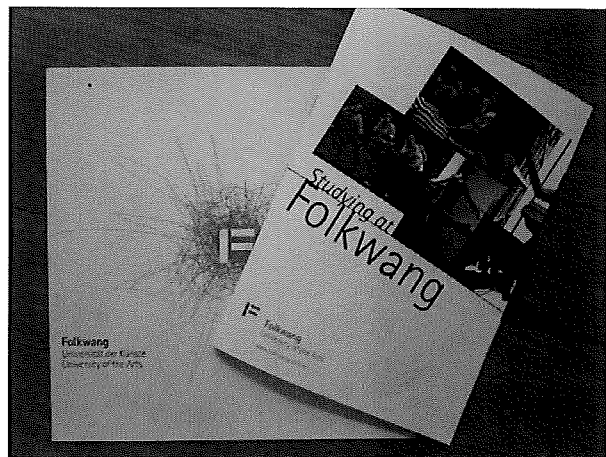
約 40 種類のコースがあり、学士、修士、芸術ディプロマ、博士課程、大学教授資格取得課程を取得できる。

舞踊部門は、ピナ・バウシュのカンパニーとつながりを持っている。今回対応していただいたエロード氏はカンパニーの立ち上げメンバーの一人。フランスのバレエ団でプリマ・バレリーナを務めた後、ピナ・バウシュのもとで踊った。ブリンクマン氏も長い間バウシュのもとで踊った経歴を持つ。

2. ダンス教育の実情

前述のように、フォルクバンク大学では 40 余りのコースを提供しており、390 人の教師が指導にあたっている。1400 人の学生たちは 50 カ国から集まっているが授業は原則としてドイツ語で進められる。

舞踊科があるのはこのエッセン・ヴェルデンの校舎のみで、ここではほかに楽器演奏、声楽、劇場音楽、演技、演劇ディレクター、指揮、作曲、音楽教育、音楽の学校教育、音楽学、ミュージカル、コンピューター音楽、ジャズ、グレゴリアン聖歌、中世音楽といった多彩な学科が教えられている。ほかの校舎には、写真やデザインといった学科もある。現在の学長はクルト・メナート氏 (Kurt Mehnert)。



コンテンポラリーダンス研究所 (The Institute of Contemporary Dance IZT) は、2011 年度の冬学期に発足したが、大学のダンス教育は現在ではこの研究所に密接に結びついており、フォルクバンクダンススタジオ、フォルクバンクダンスアーカイブと共に、3 本の柱となっている。

大学設立当初からダンス教育の中心はコンテンポラリーダンスにあり、ダンサーを訓練する場ではなく、踊り、ムーブメントの原則を理解し、個々の方法で発展させられる人間を育てる場であるという思想のもとに行われている。クラシックバレエのクラスはあるが、あくまでもコンテンポラリーダンスの基礎として提供されている。

2017 年現在、舞踊科の学生は 100 人、マスターコースに 15 人が在籍している。外国人の割合は 60%ほどで、20 カ国以上の国から集まっている。年齢も 17 歳から 30 歳近くまでさまざま。ほとんどの人がすでにダンサーや教師としての経験を持っているが、学士、修士の資格を得るために入学している。国籍にかかわらず、奨学金などを受ける可能性がある。

学士コースの 4 年生になると、音楽等ほかの学科とのコラボレーションや、提携している他大学との交流、ピナ・バウシュのカンパニーで踊る機会もある。

3. クラス見学

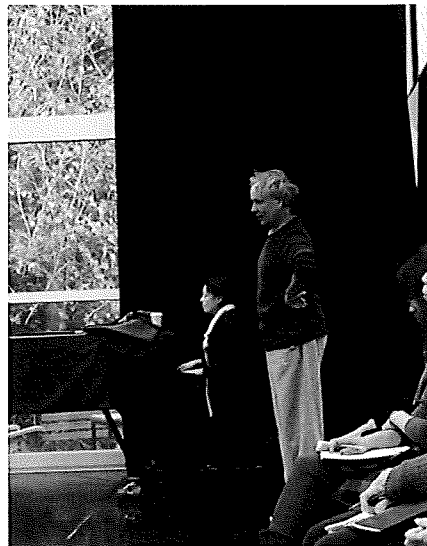
2つのクラスを30分程度ずつ見学した。学生の写真撮影は許可が出なかった。

① ドイツのモダンダンスクラス 4年生7名

担当はロドルフ・レオニ氏 (Rodolph Leoni) 副学長。ブラジル生まれ。大学院コースでは振付の指導を担当している。

基礎であるクラシックバレエのバーレッスンを見た。リズムとポール・ド・ブラを大切に、音楽を口ずさみながらアンシェヌマンを出す。それに沿って音楽を出していくピアニストが非常に優れている。

この日の出席者はクラスの半分で、あとの半分の学生はピナ・バウシュのカンパニー公演に出演のため、ヴッパタールに行っていて欠席だった。



レオニ氏

②モダンダンスクラス 3年生17名 (男子3名、女子14名のうち日本人留学生在4名)

担当はステファン・ブリンクマン氏。本校の出身でクルト・ヨースのテクニックを学んだ。

バーの段階から背中を使うことを意識した動きで、バーで踊っているという印象を受けた。センターレッスンではバーで確認した動きをもとに、移動、回転を加えて体を大きく使っていく。

「オーバーテンションにならず、足りなくもなく」

「アクセントがどこにあるかを意識しなさい。」

「肩の力を抜いて。おなかに力が必要」

「滑らかに動く中にもストップモーションがなければいけない。次にどこに行くかを見る人に予想させないように」

など、次々に注意を与えながら、テンポのよい授業である。

4. ディスカッション

クラス見学後、ディスカッションの場を用意していただいた。大学側からはエロード氏、ブリンクマン氏、レオニ氏に加え、日本人の秋宮悦子氏が出席。秋宮氏は埼玉県出身でラバンセンターで学び、フォルクヴァング大学ではモダンダンサーのためのクラシックバレエを担当している。

先に見学したクラスから、4人の日本人留学生と、生徒会長のような立場にあるドイツ人のミリアムという学生が同席してくれた。エロード氏からは、今回の派遣団の目的は、大学が役割と考えている国際交流、多様な人材を育てるという目的に一致しており、派遣団を歓迎するという挨拶があった。この大学では、学生たちはダンサーである前に人間であり、ダンサーになるためのテクニックをつけることはもちろん必要であるが、自分の中に何があるか、を見つけてもらうことが重要である。ピナ・バウシュの偉大な才能の一つは、すべての人の中に才能、芸術性を

認め、舞台上その人を美しく見せることである。一人一人の人間性を引き出すことに非常に優れていた、と語った。

多様な可能性を持つ学生を求めるので、オーディションにおいては年齢制限を設けず、経歴も問わない。

学生たちに進路について尋ねると、オーディションの時の雰囲気がアットホームで、すでに名前と呼んでもらったことは大変印象深かったようだ。クラシックバレエを長い間学んできたが、ドイツに来てからはもっと受有に表現ができるモダンダンスに興味を持ち、ダンサーとしてカンパニーで働いてみたい、という回答があった。

エロード氏からは学生たちに向けて、「学士課程の4年間はほんの入り口。卒業してからそれぞれが何をできるか、何をしたいか考えて次の進路を決めなさい。」というメッセージが送られた・



5. 感想

ダンサーでなく人間を育てたいという強い思いを感じた。一方で、学生たちにとっては、単純にダンサーを目指して訓練を受けるのとは異なり、自分で道を探していかなければならない戸惑いのようなものもあるように感じた。かなり年齢の高い学生もいることを考えると、大学を出てからダンサーの道に行くのでは少し遅いのではないかと、特に日本からの留学生は、ベルリンバレエ学校に行くのと同じ気持ちでこの大学にいるのではないかと心配な気もした。ダンサーのキャリアにこだわらないなら、ここで4年間を過ごすのは非常に良い経験であり、人間としての成長は大きいと思う。



現在のドイツでは、ダンス関連の仕事に就くにも学士の称号が必要となっており、クラシックバレエのように若いうちから舞台経験を積むことが大事という世界では、今後どんなことが起きていくのか、見ていきたいと思う。

(諸角加津美)

エッセン州立ヴェルデン・ギムナジウム

Gymnasium Essen-Werden

訪問日：2017 年 1 月 23 日 15:00～17:00

対応者：フェリキタス・シューナウ (Felicitas Schönau) 校長

ハインツ・ロゲ (Heinz Loigge) 舞踊科主任教師

1. 施設の概要

エッセン州立ヴェルデン・ギムナジウムはノルドライン＝ヴェストファーレン州立の中等学校、所謂中高一貫校で、全生徒数は約 1200 名、そのうち舞踊科の生徒は約 120 名である。

エッセン・ヴェルデンの街は、古い小さな教会、ルドリゲス・バジリカ教会 (Basilika Sankt Ludgerus) を中心に栄え、市内中心部をルール川 (Ruhr) が流れる、風光明媚な街である。かつては炭鉱で栄える産業都市であったということだが、現在はヨーロッパの緑の首都として、観光などにも力を入れている。

この学校の歴史は古く、紀元 799 年、修道院として設立されたが、時代の変遷とともにその在り方を変え、現在のような学校になったのは 1945 年の終戦後のことで、一般中等教育と、専門職業訓練教育を行える学校として、芸術面や外国語教育等、新しい時代の要請に応え、対応する人材を育てるための教育システムを導入している。現在の舞踊科の元になる音楽教育科が出来たのは 1965 年のこと。



現在のメイン校舎 (左側) は 1926 年のもので、舞踊のレッスンに使われるのは別棟 (右側)。スタジオはメイン棟に 2 つ、別棟に 3 つある。



2. 教育内容

エッセン・ヴェルデン・ギムナジウム（舞踊科）は5年生（10～11歳）から入学し、12年生までの中等教育学校である。卒業試験に合格し卒業すると、高校卒業資格アビトゥア（Abitur）を取得できる。舞踊の専門教育課程でアビトゥアが取得できる学校は、ドイツ国内唯一の学校である。舞踊科に入学しても卒業まで辿り着く生徒は非常に少ないということであるが、卒業できた者の9割以上は舞踊関連の進路に進む。なお途中で進路を変更しても、同校内の普通（そこでも更に専門選択があるがここでは記述は避ける）に残れる。5年生で入学する際には簡単な適性検査が行われる。合格率は4割程。誰でも入学可能であるが、すべての授業（普通の授業もある）は全てドイツ語で行われるため殆どがドイツ国内の児童である。また、学年途中からの入学も可能だが、編入学年時点での力量を備えてなければならない。学内試験は2月と7月の年2回行われる。

一般の学校教育のあと、14:15pm から低学年のダンス関連の授業が行われる。授業時間、授業内容は学年により異なり以下のように行われるが、クラシックバレエとコンテンポラリーダンスの授業は全ての学年で一貫して行われる。

5年生	: 8時間	クラシック・コンテンポラリー・フォークダンス・インプロビゼーション
6年生	: 9時間	// //
7年生	: 10時間	// //
8年生	: 11時間	// //
9年生	: 12時間	// // 上記+フラメンコ(インプロはレベルアップ)
10年生	: 16時間	// //
11.12年生	: 18時間	// // *選択重点科目でバレエを選ぶ事ができる

以上の基本カリキュラムに、更に選択や補完としてヒップホップ、キャラクターダンス、ピラティス、ジャイロキネシス、更に上演実習等を行う。

アビトゥアを取得するために最後の2年間で選ぶ重点科目で舞踊を選べる。

なお一切の授業料は無料。州の予算から計上され、教師、職員も州や市の職員として雇用されている。常勤5名、非常勤5名、その他フリーランスが数名とのこと。

3. 見学内容

午前中に視察したフォルクヴァング芸術大学を出て、街を抜けルール川を渡ると、すぐに学校に到着した。校舎に入り校長フェリキタス・シューナウ氏、学科主任ハインツ・ロゲ氏ほか、職員の皆様と簡単な挨拶の後、すぐに授業見学に。



①クラシックバレエ 5年生 (13歳)

教師：レナーテ・ポム-カリル

女子12名 男子1名

本当は女子14名、男子4名だそうだが、ドイツでもこの時期風邪が流行しているとのこと。フロアでのエクササイズの後、両手バーで立ち方からしっかり指導していく。次の動きに行く前に生徒たちにどういった事に注意が必要か発言させ、自身の身体の動きへのアプローチの再確認を促す。15分程度の見学時間であったが、クラシックバレエのレッスンを舞踊教育の主軸の一つにしていることが伺える、熱意のこもったレッスン進行であった。

②クラシックバレエ 9年生 (17歳) ボーイズクラス

教師：インゴ・マイクスナー

男子1名

本来の生徒数は3名だが、2人が風邪で休んでいたためマンツーマンのクラス。先生は、フォーワン大学でもクラシックバレエを教えておられる方。レッスンの最中に私達一行がスタジオに入っていくと、生徒さんは緊張の様子で、先生は微笑みながらも厳しくダメ出しをしていく。一通りのレッスンが終わったときには彼は大汗を掻いていた。最後に先生と私達に最後のレベランスをしてくれたが、彼はきっと心のなかで叫んでいただろう。

「今日は、なんて不運な日だ!!」



③ヒップホップダンス 8年生 (16歳)

教師：不明

女子15名 男子3名

こうした基本カリキュラムに無いクラスが選択授業なのか、定期的に行われているのかは定かではないが、今回のレッスンを見る限り、女子はとても楽しそうに、そして男子はやや不得意と言った様子が見受けられた。日本でもヒップホップダンスは大変に人気があるが、クラシックバレエダンサーの多くは、こういったダンスを得意としない傾向にある。時代の流れを捉え、進化していく文化を理解し、消化していくことは大切な事であると思った。



4. 感想

今回この学校での授業見学はごく短時間、そして舞踊科に限定したものであった。しかしながら、この見学の後、学校の教育システムを詳しく伺い、もっと長時間、そして普通科の授業も見てみたかったとの思いを深く抱いた。それは、第一に、ギムナジウムという教育システム全般に言えることであるが、最も多感で人生の方向性を大きく左右してしまう8年間という長いスパンを見守り、導いていくということは大変重要であり、日本でも近年公立学校の中高一貫教育が進んでいるが、更なる拡がりを期待するものである。

第二に、生徒それぞれの希望と適正に合った、そしてその個性を伸ばしていく、との方針・システムを一つの学校で対応しようという画期的な試みである。未だ自分の適性など解らない、そして成長とともに変化していく価値観の中で、自身の人生軌道を修正したいという欲求にも対応できるというのは、人間の個性、多様性を大切に出来る素晴らしいシステムであると思う。この学校は前述したとおり、舞踊科のあるギムナジウムで唯一アビトゥアを取得できる学校であるとのことであるが、この学校の特徴の一つとして普通の教育も平行して受けるため、社会性も培われ、ごく普通の人間としての成長、それにプラスして舞踊教育も受けられるとのことで、卒業してから、大学は舞踊経験を活かして舞踊医学の道へ進む者などもあるとの事。舞踊家への専門教育に偏らない、というところが興味深い。

もう一つ重要なことは、ドイツでは、更にその先に専門性を深め、プロフェッショナルと呼ぶにふさわしい舞踊家、振付家、または舞踊教育者、への道につながる教育システムが存在しているところである。この日、舞踊科主任のハインツ・ロゲ氏も言っておられたが、この学校はあくまでも舞踊家を目指したい者が訓練できる学校であり、今やプロのダンスカンパニーでは、専門の舞踊教育(舞踊大学や、専門的な舞踊学校)を受けていないと入団することは出来ないとのことである。高度な舞踊教育を受けているということが、社会人としても成熟した有用な人材として認められている、ということであろうか。振り返って日本において、舞踊家といってもアマチュアとプロフェッショナルの差は無いに等しい。それは職業として成立しないからである。また、子供の頃からバレエを習う子供はたくさんいるが、それを将来職業とするための訓練という風に認識する子がはたしてどのくらい存在するであろうか？そのためには、生活の保証されたプロの舞踊集団の存在も不可欠であろう。

更には、舞踊家や振付家、舞踊教師といったものが、高度な教育によって道筋が作られることにより、職業としての社会認識がより深まっていくのではないであろうか。

(柴田英悟)



ノルトライン=ヴェストファーレン州立応用科学カトリック大学

Katholische Hochschule Nordrhein-Westfalen

訪問日：2017年1月24日 9:00～12:30

対応者：マイケル・オーベルマイヤー応用科学教授 (Obermaier, Michael)

1. 施設の概要



宿泊していたケルン体育大学のゲストハウスから、チャーターされたバスで約30分の場所に、この学校のケルン校舎がある。ケルンには州立大学が8つもあり、全学生総数は6万人にものぼる。

1971年にスタートしたこの学校は、ケルンの町の中の近代的な建物のこの校舎の他に、アーヘン、ミュンスター、パーダーボルンの4か所に校舎を持っている。そのすべての学生数は4,636人で、その80%が女性だ。

カトリック教会が運営する大学で職員数は565人だが、彼らは州の職員である。

学部は、社会福祉学部、幼児教育学部が主であり、パーダーボルンには唯一、神学部がある。

2. 教育内容

ここは、私たちが今回研修で訪れた他の学校とは異なり、バレエやダンスを教えるための学校ではない。幼児教育において如何にダンスなどの運動が有益か、という研究の結果、今後モデルケースとして幼児教育の教職に就く者に、ダンスを学ばせるための準備をしているということである。

2004年までドイツでは幼児の保育や教育は各家庭で行うことが中心であった。幼児教育を専門家の手にゆだねるという動きは、ここドイツでは2006年からの事だそう。そのため、それまで単なる保育者であった、あまり専門的な教育を受けていない保育士に代わって、大学できちんと理論を学んでもらい、教育者のレベルを向上させようという動きが出てきた。

さらに、2013年に幼児教育施設へ対して行われた調査によると、「運動を行った方が幼児の発達に良い。」と答えた教師が70%で、「健康のために良い。」や「事故防止につながる。」との回答が21.5%であった。中でも注目されたのが「知力に良い効果がある。」「空間能力が高くなる。」「理数系に強くなる。」という項目で、18.2%にのぼった。

また、2016年に行われた学生による研究の「児童教育施設での指導者の普段の身のこなしは、児童に影響を与えるか」というものだが、結果として、影響があるとの見解があり、幼児教育課

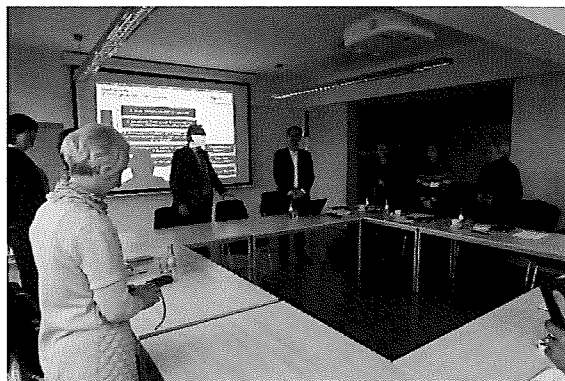
程の者に、舞踊教育を取り入れようという動きが強まってきている。この大学でも、2017年度から幼児教育課程の学生にダンス教育を始めることになったという。

現在すでに保育者として働いている人（専門学校卒業者）にも入学、学習の機会を与えるとのことである。

3. クラス見学

来年から始まる予定であるため、残念ながら今回、見学は叶わなかった。

また、この大学には指導者もいなければ、施設もない。もちろんノウハウも無いのである。私たちが宿泊するゲストハウスのあるケルン大学にはそれが揃っていることから、この大学の学生は、次年度（2017年）から、ケルン大学へ通ってダンス教育を受けることになる予定だそうだ。



これまでの大学における幼児教育は、理論が中心で実習が4年間に8週しかないのだそうだ。それに引き換え、専門学校では実習時間が多く設けられ、最後の1年間はインターンとして現場で経験を積むことが課せられているそうである。

そこでこの大学では、それら両者の良いところを受け、2年次に16週間、3、4年次には8週間の実習を課す予定とのことである。

4. 感想

まず、こちらの大学を訪れて、一番にみんなが驚いたのは、近年までドイツにおける幼児教育は家庭中心で、大学では専門家を養成してこなかったという点である。日本でもドイツにおける幼児教育は一目おかれる存在のはずだ。有名な「シュタイナー教育」「モンテッソーリ教育」などである。我が子はカトリック系のモンテッソーリ教育を取り入れている幼稚園に通っていた。そこで母子ともに様々なことを学ばせてもらった。ドイツの幼児教育は進んでいると思っていた私たちは、オーベルマイヤー氏の説明がなかなか頭に入ってこなかった。つまりは個人差、格差があったということなのだろうと思われる。

しかしながら、今では幼児教育に携わる者の、幼児に与える影響は大きいという研究結果から、「幼児教育者にダンス教育を」というに至ったことは素晴らしい。

日本での幼児教育課程の学生たちが、どれくらいの時間、ダンス教育を受講しているか私は知らないが、もっとダンスについての功績を明確にし、幼児教育におけるダンスの役割が世界的に広がっていくことを期待したい。そして、私自身もバレエを通して幼児の発達に密接に関わっていることを、これまで以上に自覚したいと思う。

（若佐久美子）

ケルン・ドイツ連邦体育大学舞踊・行動（運動）文化研究所

Institut für Tanz und Bewegungskultur Deutsche Sporthochschule Köln

訪問日：2017年1月24日 13:00～16:30

対応者：デニス・テムメ（Jun. Prof. Dr. Denise Temme） 主任教授

マーコ・グラリアンダー（Marco Grialander） 担当教師

1. 施設の概要

1947年創立。戦前のベルリン体育大学料を前身とし、再建する形でケルンに創設された。初代学長のカール・ディーム氏は、1936年の大会組織委員会の事務総長を務めた人物である。創立当初はスポーツの教員育成のための大学であったが、後に様々な学部ができて、現在は21学部となり、生徒数は73ヶ国で6000名（27名の日本人含む）である。教職員が437名、職員が874名。

8つの大きな州立大学の一つである。また、ドイツには70ヶ所以上スポーツの授業を提供している大学があるが、スポーツ専門では唯一の大学であり、日本体育大学、早稲田大学、天理大学との学術提携校でもある。

それぞれの専門施設に合わせた専用体育館が20個以上ある。室内陸上競技場、自転車用のバンク、ビーチバレー場、少し離れた所には流行りのクレッター用の壁もある。またドイツブンデスリーガーに所属するIFCケルンの5万人収容のスタジアムが目の前にある。とにかく広大な施設を持っている。また、特筆すべきは学費だが、ドイツではこの大学を含むほとんどの大学で学費は無料（外国人も含む）である。

2. 教育内容

学士課程5、修士課程9あり、教育学部、社会学部、スポーツ医学部など21の学部がある。健康の分野から医療、スポーツ経済、トップアスリートのためのトレーニング、子供や高齢者のためのトレーニング、自然の中でのスポーツ、今回私たちも参加した運動や演劇の授業など、あらゆる分野の授業が開講されている。

舞踊・行動文化研究所には、主任のデニス氏のもと、今回の授業を受け持つケルン体育大学卒業生のマーク氏など、アフリカンダンス、アーバンダンス、表現舞踊、コンテンポラリーダンス（今回の訪問先フォルクヴァング舞踊大学出身）とそれぞれ多彩な経歴を持つ女性5名が講師として控えている。それぞれの学生の個性を伸ばすことや、適した動きを発見することを授業の第一のコンセプトにしている。インプロヴィゼーションに繋がる踊りが基本で、街中にある原石を発掘して、そんな人たちに門戸を開放することも考えているようだ。クラシックバレエも取り入れて欲しいと質問したところ、残念ながら時間のかかるため、コンテンポラリーダンスの中で、クラシックバレエの基本的な動きをする程度なら、とのことであった。

3. ボディー・パーカッションの授業

ケルン・ドイツ連邦体育大学と、午前中の訪問先ノルトライン＝ヴェストファーレン州立応用科学カソリック大学との提携を予定していると聞き、お互いに横の繋がりも広げて互いにある事成長していく姿勢を感じることができた。



ランチに数種類の焼き立ての美味しいピザをご馳走になり、急ぎ足で、今回の宿泊先でもあるケルン大学内の体育館に案内されて授業に参加した。講師はまだ 30 代半ばぐらいであろう当大学の卒業生マーコ・グラリアンダー氏 (Marco Graliander) である。

今回参加したのは運動・演劇の授業で、生徒たちは 20～27 歳ぐらいで国籍も様々。女子生徒 6 名、男子生徒 8 名に派遣メンバー 7 名、エレマン氏、パチケ氏も加わり計 23 名が参加した。

まず先生の自己紹介から始まり、明るい性格を感じさせる。後で彼と話して分かった事だが、最初はスポーツジャーナリストを目指したのだが、音楽の授業から自分の生きる道をこの研究所で見だし、卒業しないで勉強し 2003 年から 2009 年までフリーランスの芸術家として活躍し、その後大学の教鞭をとることとなったそうだ。

さて、授業内容としては、

- ①身体を楽器にというテーマで、全員輪になり、自分自身で身体を叩いてみてどのような音が鳴るか探してみる。叩く動作にも注目して、自分が教える立場になった時に、人それぞれいろいろな動きがあり、その個性が素晴らしいと伝えてほしいと、合間に助言をされた事が心に残った。
- ②片方の足首から徐々に上に両手で叩きながら登ってゆき、お腹を通過して、反対の足首へ下がり、またお腹、胸、肩、顔、頭などを叩き、大小、高低、響き方の違いを発見する。
- ③手を低音がでるように叩き、先生が指揮者となり、徐々に高音に、そして、また低音にと上げ下げをする。
- ④今度も同様に、小さい音から大きい音に叩く。

基本的にここまでがウォーミングアップであった。

- ⑤次からは、拍子を決めて、そこに身体を叩く動作を入れて、音楽を創っていく。

例を挙げると、4 カウントの中に手を叩いてから、右手で胸、左手で胸、一つ休み等。いろんなパターンを 6 つ作り、組み合わせしていく。

- ⑥4 つのグループに分かれ、相談して 16 カウントの中に今まで習った動きを繋げ、グループごとに発表する。終わったら拍手を忘れないようにとの事であった。

- ⑦そのステップを使って、リレーして音楽を繋げたり、足踏み入れたり、2 グループごとに同時に、最後には 4 グループで同時に挑戦した。

その後は16脚の椅子を使った。横1列に並んだ椅子に、10人程がランダムにつく。見ている人は、10人が座っていたら足踏み、立っていたら手を叩き、人がいない椅子は休符というルールの中、16カウントのリズムの中に、目を見た内容を素早く身体で反応させる。リズム感に加えて反射神経を養う運動であった。



応用として、椅子側にいる人は8カウント終わった後、立つと座るを変えてもいい、あるいは場所移動も可能になり、より高度な反応が必要とされた。

その後、身体を楽器にする事に戻り、より高度な動きと複雑なリズムを習った。

再び輪になって、8カウントのリズムを16分割にして、マーク氏の動きをまねしていく。例えば指を鳴らす事や、手を交差させて肘を叩き、手の甲を合わせて肘に戻る動き、片足をバックステップ等である。手足を鳴らすリズムが変則だったので、動きのイメージを声（ティキティキ、シュッ等）に出して挟んだりして、少しずつゆっくりと根気よく身体に覚えさせてゆく。慣れない動きではあるが、皆かなりの集中力で上達している人も少なくない。ひと通り習った後、再びグループごとに練習し、マーク氏が各々の質問に丁寧に答えてゆっくりと的確に教えてゆく。私たちのグループでもかなりの時間を割いて手本となってくれた。

結局、早い動きには到達はしなかったが、再び輪になって皆でくり返し練習した後、中心に集まり小さい円の列を作り、各々が前の人の肩に手を置き、トントンと優しくよく頑張ったねという感じで叩いて終った。



4. 感想

運動・演劇の授業ということで、何の基礎知識のないまま「動きやすい恰好で」とだけ聞いて参加した。身体を楽器に例えるのは、自分にとって初めての体験で、単純な事の中にいろんな発見があり、難しかったけれど楽しめた。日本の派遣メンバーも皆さんさすがに覚えが早く、驚いた。授業後の短い合間にイタリア人の27歳の学生から聞いた事であるが、身体の代わりにこの大学にあるいろんな道具を使って楽器にしたり、声を使用して音楽を作ったり、スローモーションやサイレントを利用したりなどがあるらしい。また年に一度発表会が小劇場であるそうだ。

今回授業を受けて感じた事は、まずマーク氏が明るくそして人柄がよく、決して話し上手ではないが、人それぞれを認めて生徒たちと接している姿に感心した。また授業を受けて音楽をとっても大切にしている事がよく分かり、踊りと音楽の関係も重要であるとも話してくれた。生徒が、多少的外れな問いかけをしても最後まで聞き、その意見も尊重しながら上手に進めてゆく。今回彼の教え方に接してみて、どうしてもバレエという世界は人をどこかで偏見を抱いて見てしまう事が多々あるので、自分自身がこれから生徒達やいろいろな人たちと関わっていく時に、どのような接し方が出来るかをもう少し鑑みて、人間を教育するという大きな観点から考えてみたいと強く感じた。

10 か所以上のダンスに関わる様々な施設を廻って、ドイツのダンス文化が育った歴史を考えると、多くの子供たちが、インプロヴィゼーションが好きだと言った理由が少し理解できるようになったように思う。一概には言えないが、クラシックバレエは型が決まっていて、可能性の幅が狭いが、その中で踊りを追求する事で生まれる美学を持っている。一方で、コンテンポラリーダンスは可能性の幅が広いので、一般的にも受け入れやすいのではないかと思った。

(貞松正一郎)



エイリーⅡ 公演

Ailly Ⅱ The Next Generation of Dance

公演日時：2017 年 1 月 24 日 20：00～22：10

公演場所：ノイス市立劇場 (Stadthalle Neuss)

1. 公演概要

①『Circular』 (円状)

振 付 : Joe Man Joo
作 曲 : Denisov、Händel u.a.
衣 装 : Christine Darch
照 明 : Rob Ross

休憩 20 分

②『Meika』

振 付 : Laila Da Rocha
作 曲 : Max Richter、Isaac Albéniz
衣 装 : Jose Gomez Torres
照 明 : Jake Fine

③『The Hunt』 (狩猟)

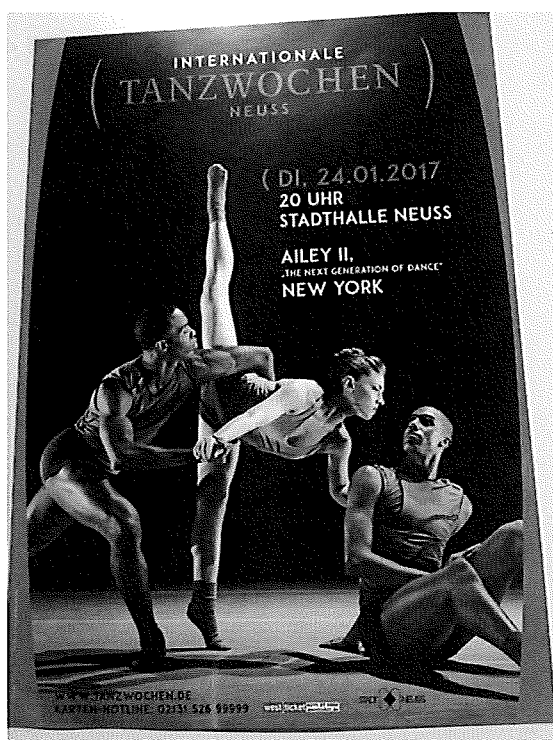
振 付 : Robert Battle
作 曲 : Les Tambours Bronx
衣 装 : Mia MacSwain
照 明 : Burke Wilmore

休憩 20 分

④『Something Tangible』 (何かの絡み合いの意)

振 付 : Ray Mercer
作 曲 : Max Richer、Ólfur Arnalds、Geoff Bennett & Bongie Duma
衣 装 : Elena Comendador
照 明 : Clifton Taylor

ダンサー: Jacody Pruitt Courtney Spears Jacob Lewis Tara Bellardini
Khalia Campbell Martell Ruffin Gabriel Hyman Terri Wright Lloyd Boyd
Yazzmeen Laidler Jessica Pinkett Christopher Wilson



2. 公演内容

会場であるノイス市立劇場は、デュセルドルフからライン川を挟んで西に位置するノイス市内にあり、約 1100 名を収容できるイベントセンターとして 1961 年にオープンした。「国際ダンスウィークエンド 2016/2017」と題して、世界の様々なダンスを月に 1 回のペースで紹介している。またノイス市は、1984 年に都市の 2000 周年記念祭を開催した、ドイツでは最古の都市の一つである。

劇場はドリント・コンGRESホテルに併設していて、その周辺は静かで、広大な駐車場がある。簡素な入口を抜けると、ロビーは既に多くの人々で賑わっていた。男性も数多くみられ、楽しんでいる様子が窺える。

ニューヨークに本拠を置くエイリーⅡは、アルビン・エイリー舞踊団のジュニアカンパニーとして 1974 年に創設され、“次の世代”を目指したその名の通り若いカンパニーである。開演時間になると、客席はいつの間にか満員となっていた。

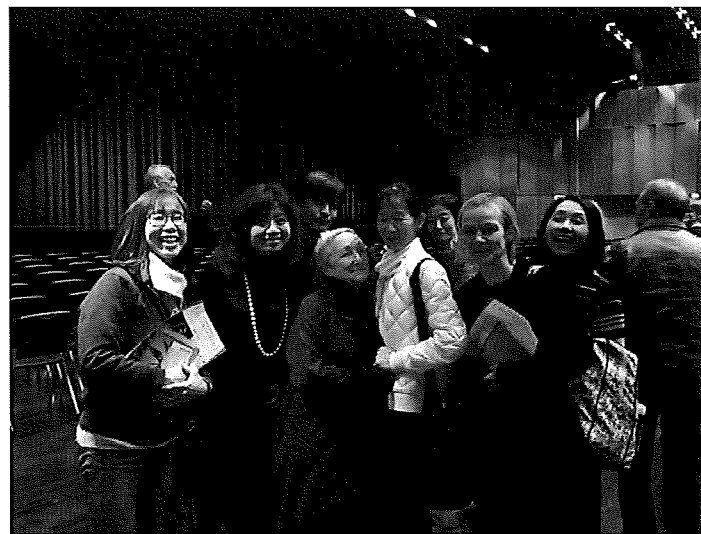
突然暗転となりスタート。最初の作品は『Circular』。円状の意味だが、抽象的に人間のつながりが巡っているのを表現しているのを感じる。衣装はシンプルにグレーに統一された短パンツに、女性はキャミソール、男性はノースリーブのシャツを着ている、男女 6 名ずつのフルメンバーによる 28 分の作品である。幕が上がると、センターに上半身のみ照明が点いた体が浮かび、ミサ曲の音楽とともに全員がうごめき、美しい陰影を伴って舞う。その後アンサンブル、男性二人のアダージオなどが続き、最後の全員の踊りへ続いていく。振付の Joo 氏は、ニューヨーク在住の中国系のフリーランスの振付家で、無理のないコンテンポラリーのテクニックに音楽性が感じられ、

また照明も効果的に使われ、黒人(白人が男女1名ずつ入っていたが)の独特のしなやかさや柔軟性、力強さが活かされた作品となっている。

休憩の後に踊られた女性2名による『Meika』は13分の作品で、黄色と橙色が横に分かれたボディーに、橙色ベースのひざ丈の軽いスカート、そして、大きい橙色の布を使って。モダンダンスのデュエットとして女性の強さと愛の力の本質を捉えている。音楽、布を用いてのストレートなダンス表現で、特に女性の内面の強さが感じられる反面、そのシンプルな動きゆえに少し単調さを感じてしまった。続いて男性6名による14分の作品『The Hunt』。上半身裸のダンサーが、黒の巻きスカートを着用と、内側に赤い部分が見える。文字通り狩猟を表現していて、群舞での動き、特に対となり2人で戦い合う姿、獲物を得る者など、期待を超えて若い肉体が躍動し、アフロ・アメリカンの本質も感じさせる。振付のバトル氏は、ジュディス・ジャミソン氏の後、現在アルビン・エイリー舞踊団の3代目の芸術監督を務めている。この作品の後、客席もかなり熱を帯びていくのが感じられた。

2度目の休憩の後の、ダンサー総出演による最後の作品『Something Tangible』(24分)は、シンセサイザーの曲にリヒター氏作曲の現代曲を加えた、新しさを感じられる作品である。衣装は男女とも、青色のタンクトップに紺のショートパンツ、青色の靴下。ここでは靴下で踊り、アメリカのコンテンポラリーダンスの動きがベースにあり、その中にもクラシックバレエのテクニックも多く見られ、アップテンポ、スローに踊る場面、男2人女1人によるパ・ド・トロワなどが、スピーディーに展開していく。ラストは全員で激しく踊り幕が下りる。

振付のマーサー氏は、人間が目を覚ました時に出る、毎日の違った感情の色に焦点を当て、いろんな絡み合いの愛情、情熱、恐怖、自己疑惑の場面を表現している。カーテンコールでは、再びラストの踊りが繰り返され、客席は最高潮と盛り上がる。ドイツの観客は拍手、歓声、口笛などに加え、足を踏み鳴らして喜びを表現しているのが印象的であった。

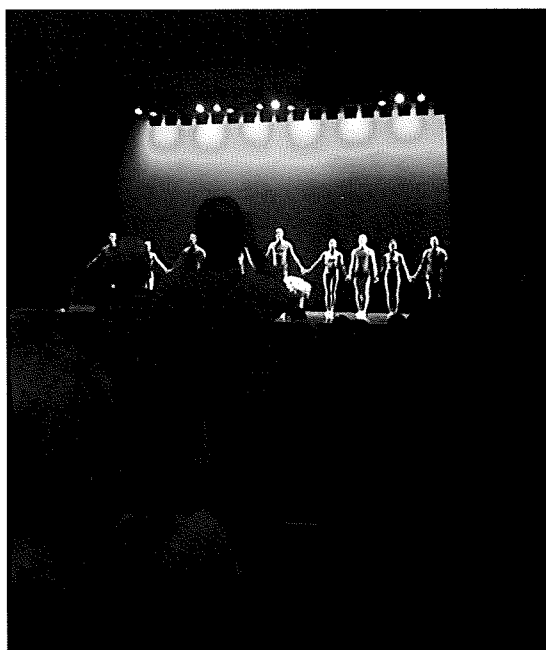




3. 感想

私たちの座った客席の10列までがフラットで、舞台が観えづらく、またどうせセカンドカンパニーだからと、正直あまり期待をせずに今回の公演を観るに至ったが、その期待は良い意味で裏切られる事になる。まずダンサーのレベルが高く、鍛え上げられた肉体が素晴らしい。若いゆえに表現の深さの部分では少し物足りなかったが、それを補う体力と力強さ、エネルギーに満ち溢れた舞台であった。またプログラムが、自分たち独自の民族的な踊りや少し古き良き伝統を感じさせる作品、そして、新しい洗練されたコンテンポラリーダンスの作品など、バラエティーに富んでいた。このカンパニーの未来への無限なる可能性を感じさせる、まさにダンスの次世代に相応しい公演であった。

(貞松正一郎)



フェルバート市立ランゲンベルグ・ギムナジウム

Gymnasium Langenberg Velbert

訪問日：2017年1月25日 9:00～12:30

対応者：マルクス・ユーバーホルツ (Markus Ueberholz) 学校長

ガブリエル・フォークト (Gabriele Volgt) 体育・舞踊教師 振付師

1. 施設の概要と教育内容

早朝にバスでケルンを出て、1時間半ほどでフェルバート市ランゲンベルグ地区に到着した。山々も近くに見え、自然豊かで静かなこの地区にランゲンベルグ・ギムナジウムがある。300年の歴史を持つギムナジウムだが生徒総数600名と小規模で、きめ細やかな教育が行われている。今回訪問する施設の中で、「全く普通のギムナジウム」はここが唯一である。舞踊専攻のコースを持っているわけではないにもかかわらず、普通の体育の授業の中で充実した舞踊教育が実施されている。この点に着目して視察を行いたい。

ギムナジウムには5年生から12年生までの生徒がいるが、体育に関しては11年生から選択制になり、学校の指定する組み合わせの2つの種目を選ぶ。(現在は舞踊とバスケットボール、バドミントンと陸上、サッカーとフィットネスの中から選択。2年間、同じ種目を履修する。) 舞踊を含む組み合わせは、11年生46人のうち24人が選択していて、人気が一番高い。



2. 見学内容

①ミーティング



まず音楽室に案内され、オットナー副校長の伴奏による生徒たちの合唱で歓迎された。この学校の、普段からの家庭的で暖かい雰囲気が伝わってきた。

次に体育・舞踊の教師であるガブリエル・フォークト氏から、舞踊のクラスについての説明があった。フォークト氏は、ケルン体育大学でウラ・エレマン氏と

ともに、マヤ・レックスのもとで舞踊を学んだ。マヤ・レックスは1925年頃、エレメンタリーダンスを創始したダンサー、振付師であり、フォークト氏はこのエレメンタリーダンスに基づいて指導を行っている。

エレメンタリーダンスとは、歩く、走る、跳ぶ、回るなど人間の基礎的な動きに、形の変化、リズムや強弱の変化をつけ、組み合わせることにより、ダンスに発展していくもの。インプロヴィゼーションと呼ばれる、即興の動きが中心になる。フォークト氏によると「エレメンタリーダンス」は、もともとはマヤ・レックスが「自然、源流にあるもの、人工的でない」という意味合いで使った名称だが「基礎的な運動」という印象を与えるので、現在行われているダンス教育にはあまりふさわしくない、とのことだった。

次にユーパーホルツ校長からの挨拶があった。ドイツの普通の学校の様子を見なければ、実際の教育事情というものは理解しにくいと考えている、ここでの見学が日本からの訪問団にインスピレーションを与えるように願っている、と語られた。

②体育館でのクラス見学

体育館に移動し、その広さに驚いた。電動式のパーティションでスペースをまず区切ってから、体育の授業が始まった。今日のクラスは11年生で、24名のうち、男子4名、女子20名。服装は、男子は黒のTシャツ、女子は黒のTシャツまたはタンクトップにスパッツ。足元は靴下、またはスニーカーを着用していた。

今日のテーマは「刺激（インパルス）」

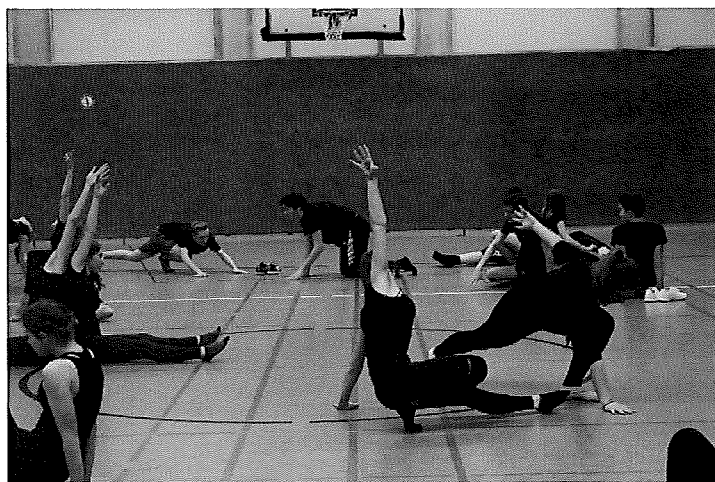
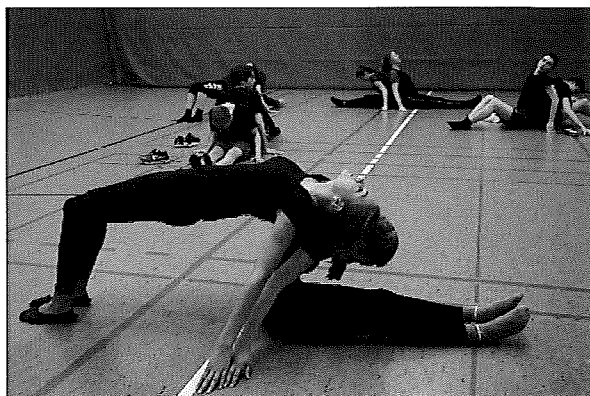
であると、フォークト氏からお話があった。特にパートナーから受ける刺激に対しての動きに重点をおいてやりたい、とのことだった。生徒たちの体型はさまざまだが、過体重または痩せすぎなどの問題を抱えている様子の子は見当たらず、全体として健康的な体格を保っている印象を受けた。



午前10時、まず音楽に合わせて、2列で走ることからスタート。走りながら手の動きが加わり、また走る方向も変えていく。次に二人一組になって、背中合わせに床に座り、ストレッチを開始する。背中をぴったりと合わせ、呼吸を合わせて、片方がもう一人にもたれかかっている。相手とコンタクトを取りながら、自分のリズムを見つけるようにという指示があった。ウォーミ

ングアップからすでに、「刺激と反応」というテーマに沿った動きになっている。この後、二人一組を守りながら自分の動きを創っていくことになった。床に接しない部分を作る、などの課題を与えられ、手や足のポジションを変える。そして音楽に合わせて、動きに流れを持たせてつなげていくところまで発展させ、基礎的な練習が終了した。

次に、パートナーの刺激（インパルス）を受けて動く練習に入った。まず刺激を与える方法を、生徒たちに考案してもらった。刺激に対し、小さな反応でよいから自然に応じるようにと指示される。刺激も反応も次第に大きなものに移っていったが、リラックスしている方が刺激に対して自然に反応できることが、生徒たちに体感されたようだった。しかし実際にはなかなか力みや緊張感が抜けず、動きのぎこちない生徒も多い。フォークト氏は、難しい課題なのですぐにできなくてもがっかりしないように、と励ましておられた。この後は一人ずつになって、刺激を与えられたつもりで動く練習をし、最後にまた二人一組で自由に、相手の刺激を受け取り合って動く練習になった。生徒たちの動きはだんだん自然でなめらかなものになってきていた。「信頼関係を立てることがとても大切で、同時に難しいことなのです。」というフォークト氏からの言葉があった。



クラスは午前11時10分に終了し、ここから生徒たちとのディスカッションに移った。クラス24名のうちダンスを習った経験のある人は14名(全員女子)で、ジャンルは社交ダンス9名、ジャズダンス5名、クラシックバレエ3名、モダンダンス1名、ヒップホップダンス1名(複数回答あり)だった。しかしこの

ギムナジウムに進学した動機を質問すると「舞踊クラスがあるから」という回答はなく、「小さい学校で、ほとんどの生徒がお互いに知り合い、助け合ったりできると思ったから」という答えに賛成する生徒が多かった。希望する進路については、獣医、精神科医、ファッションデザイナー、弁護士など様々な職種が挙がり、舞踊専攻希望はここでの回答の中にはなかったが、舞踊クラスでは「クリエイティブになれる」「人と信頼関係が作れる」など、積極的に参加している様子を語ってくれた。

このギムナジウムは舞踊作品の発表についても実績があり、ブッパタールの交響管弦楽団とともに『火の鳥』『くるみ割り人形』などを上演している。またフェルバート市立の音楽学校とも提

携して、5月に大きな共同プロジェクトを予定、双方で80名が出演するとのことだった。300年の学校の歴史の中で、日本からの訪問を受けるのは初めてということで、生徒たちからの質問も多く、短い時間の中で充実した交流を行うことができた。

12時ごろから、ビデオ映像を2本見せていただいた。1本目は1月に上演したばかりの発表会の映像で、このギムナジウムとフェルバート市立音楽学校の女子生徒たち8名が出演。先ほどのクラスで練習していた「刺激と反応」の動きを生かした振付を踊っていた。

(音楽はMax Bruch作曲のセレナーデ、振付はフォークト氏とコーネリア・ンジャイ氏 (Cornelia N'jai 音楽学校教師) の共同振付)



2本目は1980年の映像で、マヤ・レックスと後継者グラッィエラ・パディリアの作品。エレメンタリーダンスのシンプルさという特徴がよくわかり、またコンテンポラリーダンスに発展していく原型のようにも感じられた。

3. 感想

この学校の舞踊教育の充実、フォークト氏の着任以来40年間にわたる個人的な尽力によるところが大きい。このことは、制度の整備などを待たずに個人で実現できることもある、という力強いメッセージのようにも感じられ、帰国後プロジェクトの成果をどのように出していくかを考える上での、ひとつのモデルとも思われた。

またここで行われている舞踊教育(エレメンタリーダンスを主軸としたもの)は、インプロヴィゼーションを重視しているが、生徒の創造性を引き出し、受け止め、同時に舞踊としての形に発展させる(フォークト氏の言葉によると、構造のあるインプロヴィゼーションにする)ためには、教師の経験と力量が必須であるということも感じた。

ここの生徒たちは舞踊を専門とする職業を目指しているのではない。しかし体育の授業として専門家が舞踊を教えるスタイルが定着したのは、職業ダンサーを育てることとは別の流れとして「舞踊を文化としてとらえ、教育の中に取り入れる。」ことの価値が次第に認められてきたからではないだろうか。舞踊教育を受けることは、何か特殊な才能や身体条件を必要とするものではなく、身体の個性を大切にすること、親しみのわくもの、健康に寄与するもの、というとらえ方をギムナジウムで見たことに強く励まされた。日本でも、さまざまな職業に就く人々が舞踊に親しむことで身体の健やかさを保ったり、また観客として気軽に劇場へ足を運んだりする状況が到来するように尽力することが、私たち訪問団の目指すべきひとつのポイントではないか、と考える。

(錦見真樹)

フェルバート市立ランゲンベルグ・ギムナジウム

Gymnasium Langenberg Velbert

訪問日：2017年1月25日 9:00～12:30

対応者：マルクス・ユーパーホルツ (Markus Ueberholz) 学校長

ガブリエル・フォークト (Gabriele Volgt) 体育・舞踊教師 振付師

1. 施設の概要と教育内容

早朝にバスでケルンを出て、1時間半ほどでフェルバート市ランゲンベルグ地区に到着した。山々も近くに見え、自然豊かで静かなこの地区にランゲンベルグ・ギムナジウムがある。300年の歴史を持つギムナジウムだが生徒総数600名と小規模で、きめ細やかな教育が行われている。今回訪問する施設の中で、「全く普通のギムナジウム」はここが唯一である。舞踊専攻のコースを持っているわけではないにもかかわらず、普通の体育の授業の中で充実した舞踊教育が実施されている。この点に着目して視察を行いたい。

ギムナジウムには5年生から12年生までの生徒がいるが、体育に関しては11年生から選択制になり、学校の指定する組み合わせの2つの種目を選ぶ。(現在は舞踊とバスケットボール、バドミントンと陸上、サッカーとフィットネスの中から選択。2年間、同じ種目を履修する。) 舞踊を含む組み合わせは、11年生46人のうち24人が選択していて、人気が一番高い。



2. 見学内容

①ミーティング



まず音楽室に案内され、オットナー副校長の伴奏による生徒たちの合唱で歓迎された。この学校の、普段からの家庭的で暖かい雰囲気が伝わってきた。

次に体育・舞踊の教師であるガブリエル・フォークト氏から、舞踊のクラスについての説明があった。フォークト氏は、ケルン体育大学でウラ・エレマン氏と

ともに、マヤ・レックスのもとで舞踊を学んだ。マヤ・レックスは1925年頃、エレメンタリーダンスを創始したダンサー、振付師であり、フォークト氏はこのエレメンタリーダンスに基づいて指導を行っている。

エレメンタリーダンスとは、歩く、走る、跳ぶ、回るなど人間の基礎的な動きに、形の変化、リズムや強弱の変化をつけ、組み合わせることにより、ダンスに発展していくもの。インプロヴィゼーションと呼ばれる、即興の動きが中心になる。フォークト氏によると「エレメンタリーダンス」は、もともとマヤ・レックスが「自然、源流にあるもの、人工的でない」という意味合いで使った名称だが「基礎的な運動」という印象を与えるので、現在行われているダンス教育にはあまりふさわしくない、とのことだった。

次にユーバーホルツ校長からの挨拶があった。ドイツの普通の学校の様子を見なければ、実際の教育事情というものは理解しにくいと考えている、ここでの見学が日本からの訪問団にインスピレーションを与えるように願っている、と語られた。

②体育館でのクラス見学

体育館に移動し、その広さに驚いた。電動式のパーティションでスペースをまず区切ってから、体育の授業が始まった。今日のクラスは11年生で、24名のうち、男子4名、女子20名。服装は、男子は黒のTシャツ、女子は黒のTシャツまたはタンクトップにスパッツ。足元は靴下、またはスニーカーを着用していた。

今日のテーマは「刺激（インパルス）」

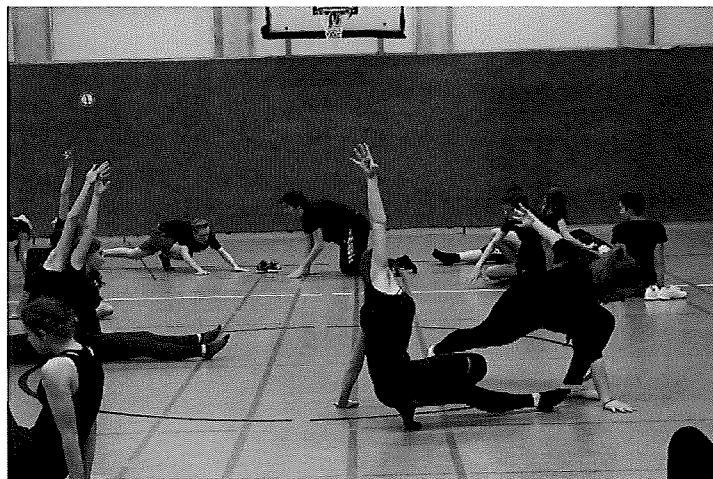
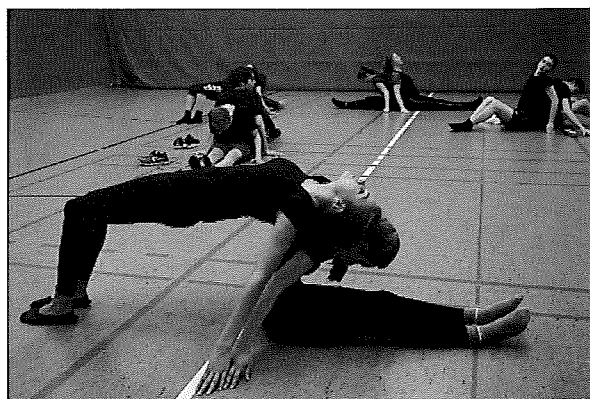
であると、フォークト氏からお話があった。特にパートナーから受ける刺激に対しての動きに重点をおいてやりたい、とのことだった。生徒たちの体型はさまざまだが、過体重または痩せすぎなどの問題を抱えている様子の子は見当たらず、全体として健康的な体格を保っている印象を受けた。



午前10時、まず音楽に合わせて、2列で走ることからスタート。走りながら手の動きが加わり、また走る方向も変えていく。次に二人一組になって、背中合わせに床に座り、ストレッチを開始する。背中をぴったりと合わせ、呼吸を合わせて、片方がもう一人にもたれかかっていく。相手とコンタクトを取りながら、自分のリズムを見つけるようにという指示があった。ウォーミ

ングアップからすでに、「刺激と反応」というテーマに沿った動きになっている。この後、二人一組を守りながら自分の動きを創っていくことになった。床に接しない部分を作る、などの課題を与えられ、手や足のポジションを変える。そして音楽に合わせて、動きに流れを持たせてつなげていくところまで発展させ、基礎的な練習が終了した。

次に、パートナーの刺激（インパルス）を受けて動く練習に入った。まず刺激を与える方法を、生徒たちに考案してもらった。刺激に対し、小さな反応でよいから自然に応じるようにと指示される。刺激も反応も次第に大きなものに移っていったが、リラックスしている方が刺激に対して自然に反応できることが、生徒たちに体感されたようだった。しかし実際にはなかなか力みや緊張感が抜けず、動きのぎこちない生徒も多い。フォークト氏は、難しい課題なのですぐにできなくてもがっかりしないように、と励ましておられた。この後は一人ずつになって、刺激を与えられたつもりで動く練習をし、最後にまた二人一組で自由に、相手の刺激を受け取り合って動く練習になった。生徒たちの動きはだんだん自然でなめらかなものになってきていた。「信頼関係を立てることがとても大切で、同時に難しいことなのです。」というフォークト氏からの言葉があった。



クラスは午前11時10分に終了し、ここから生徒たちとのディスカッションに移った。クラス24名のうちダンスを習った経験のある人は14名(全員女子)で、ジャンルは社交ダンス9名、ジャズダンス5名、クラシックバレエ3名、モダンダンス1名、ヒップホップダンス1名(複数回答あり)だった。しかしこの

ギムナジウムに進学した動機を質問すると「舞踊クラスがあるから」という回答はなく、「小さい学校で、ほとんどの生徒がお互いに知り合い、助け合ったりできると思ったから」という答えに賛成する生徒が多かった。希望する進路については、獣医、精神科医、ファッションデザイナー、弁護士など様々な職種が挙がり、舞踊専攻希望はここでの回答の中にはなかったが、舞踊クラスでは「クリエイティブになれる」「人と信頼関係が作れる」など、積極的に参加している様子を語ってくれた。

このギムナジウムは舞踊作品の発表についても実績があり、ブッパタールの交響管弦楽団とともに『火の鳥』『くるみ割り人形』などを上演している。またフェルバート市立の音楽学校とも提

携して、5月に大きな共同プロジェクトを予定、双方で80名が出演するとのことだった。300年の学校の歴史の中で、日本からの訪問を受けるのは初めてということで、生徒たちからの質問も多く、短い時間の中で充実した交流を行うことができた。

12時ごろから、ビデオ映像を2本見せていただいた。1本目は1月に上演したばかりの発表会の映像で、このギムナジウムとフェルバート市立音楽学校の女子生徒たち8名が出演。先ほどのクラスで練習していた「刺激と反応」の動きを生かした振付を踊っていた。

(音楽はMax Bruch作曲のセレナーデ、振付はフォークト氏とコー

ネリア・ンジャイ氏 (Cornelia N'jai 音楽学校教師) の共同振付)



2本目は1980年の映像で、マヤ・レックスと後継者グラッィエラ・パディリアの作品。エレメンタリーダンスのシンプルさという特徴がよくわかり、またコンテンポラリーダンスに発展していく原型のようにも感じられた。

3. 感想

この学校の舞踊教育の充実は、フォークト氏の着任以来40年間にわたる個人的な尽力によるところが大きい。このことは、制度の整備などを待たずに個人で実現できることもある、という力強いメッセージのようにも感じられ、帰国後プロジェクトの成果をどのように出していくかを考える上での、ひとつのモデルとも思われた。

またここで行われている舞踊教育(エレメンタリーダンスを主軸としたもの)は、インプロヴィゼーションを重視しているが、生徒の創造性を引き出し、受け止め、同時に舞踊としての形に発展させる(フォークト氏の言葉によると、構造のあるインプロヴィゼーションにする)ためには、教師の経験と力量が必須であるということも感じた。

ここの生徒たちは舞踊を専門とする職業を目指しているのではない。しかし体育の授業として専門家が舞踊を教えるスタイルが定着したのは、職業ダンサーを育てることとは別の流れとして「舞踊を文化としてとらえ、教育の中に取り入れる。」ことの価値が次第に認められてきたからではないだろうか。舞踊教育を受けることは、何か特殊な才能や身体条件を必要とするものではなく、身体の個性を大切にすること、親しみのわくもの、健康に寄与するもの、というとらえ方をギムナジウムで見たことに強く励まされた。日本でも、さまざまな職業に就く人々が舞踊に親しむことで身体の健やかさを保ったり、また観客として気軽に劇場へ足を運んだりする状況が到来するように尽力することが、私たち訪問団の目指すべきひとつのポイントではないか、と考える。

(錦見真樹)

カルト・ステージダンス・スクール

KULT Schule für Bühnentanz

訪問日時：2017年1月25日 16:00～18:00

対応者：エレナ・オーバーワレナイ（Elena Oberwalleney）主宰者

主宰者のオーバーワレナイ氏とは、21日に開かれたレセプションで話す機会があったことから、今回の訪問の中で初めて個人主宰のスクールを見学できることに大きな期待を持っていた。

オーバーワレナイ氏の経歴はダンサー一筋ではなく、一時期法学を学んだのちに、先に訪問したパルッカ大学で舞踊を学び直したということも聞き、スクールの教育理念に対して大いに興味を持っていた訪問となった。

1. 施設の概要

訪問してまず驚いたのは夢のような白亜のスタジオである。スクールは16年前に創立されたが、1年前にエアフォシュタッド・レヒェニツヒの地に教会を再建して新しく建て直された。

教会の構造を活かした高い天井に、中2階からスタジオを見下ろすことができる見学スペースなどダンスを学ぶ者にとってわくわくするような空間が目の前に広がっていた。

1年に2回参観日があるということであったが、広いスタジオはミニパフォーマンスができるスペースが充分にあり、私達もレッスン見学の後に作品を見せてもらうことができた。

教師は主宰者のオーバーワレナイ氏以下7名。生徒数は160名。

レッスン代：45分 37ユーロ

60分 42ユーロ

90分 53ユーロ

120分 70ユーロ、

週2回の場合は15%off、週3回以上は20%offになる。



2. 教育内容

このスクールは、ダンサー希望者のために週5回のクラスもあるが、基本的には趣味のスクールである。4歳～7歳、8歳～18歳、成人が週1、週2～3、週5回レッスンを受講している。

1年に2回参観日を設けている。

2～3年おきにオーエスケージョン劇場という劇場で、上演時間1時間半～2時間程度の発表会を催し、生徒の能力に合わせた作品を披露しているとのことである。

ドイツのダンス教育の現場の多くが、補助金を得て無償あるいは低価格でレッスンを提供している中、このスクールは補助金、寄付金の類を得ていない。今回訪問した中では我が国の個人主宰の教室に最も近い運営の仕方であるという印象を持った。主宰者の理念に賛同すれば対価を払ってレッスンを受け、発表会やコンクールといった舞台上で踊る機会を得る。その中で将来ダンサーになりたいと希望する者には対応するが、オーバーワレナイ氏の理念は、「他人と競争するという気持ちを持たないように。それぞれの個性が大切である。」というもので、その思いは各クラスを通して強く伝わって来た。

3. 見学内容

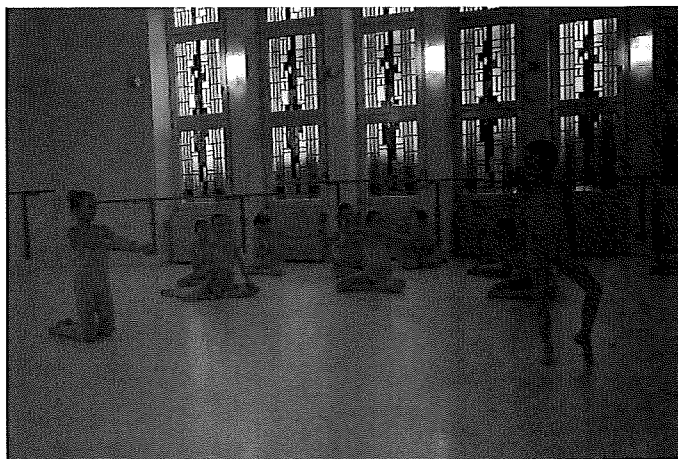
①マリーナ・ワグナー氏 (Marina Wagner) によるインプロヴィゼーションのクラス

9～11歳の女子11名が受講。 16:05～

クラスが始まる前に、スクールの名前入りのバッグとともに、金色の可愛い蝶の作り物のプレゼントがあった。『蝶の発見』という作品にちなんだものという。見学する私達にも、これから始まるクラスの世界観を共有してもらいたいという細かい心遣いに感激した。

クラスはまず『春』という詩を朗読するところから始まった。「春は絵を描くことができます。私もきれいな絵を描きたい。そして春にプレゼントしたいです。」詩の一編ずつを一人ひとりが暗唱していて聞かせてくれた。

その後の教師の指示は、肘だけを使って春を思い描いてというもので、子供達は谷や森を身体で表現し始めた。「自分の周りのガラスの筒に絵を描いて。」「大きく描いてね。」「好きな絵があれば繰り返して描いていいのよ。」などの教師の指示で子供たちは楽しそうに自由な表現を楽しんでいた。



今回の研修では、レッスンの見学の後、度々教師のみならず生徒たちの感想も聞く機会を得ることができた。

Q: 肘で描くことは難しくなかったですか？

A: 難しくはないけど簡単でもない。でもいろいろできた。

Q: 何が難しい？

A: 頭とか耳で描いたことがあるけど肘で描くのはそれよりは難しくなかった。

次にパートナーとのレッスンになった。二人一組になり、画家と球根に分かれた上でどんな花が欲しいか考えて動くという課題になった。この後にも下記のような意見が出された。

「いろいろ考えなければならないから難しい。思った通りにならなかったけど楽しかった。」

「画家も球根も両方楽しかった。お花にはいろいろな可能性がある。」

最後に、「二つのグループに分かれて二つの山を作りましょう。大きな山を作りましょう。」という課題が出され、二人組の動きからさらに広い空間での動きに挑戦してクラスは終わった。

教師からは、「ピカソが言うようにすべての子供は芸術家である。自分の身体がどういうふうに動くことができるか。物を理解できれば物を使うことができるのと同じである。そのために詩や絵を使うこともある。」というコメントがあった。

教師と子供達双方の声を聞くことにより、このクラスが主宰者の明確な理念と深い愛情の元に子供達を芸術への道に誘っているということがよく理解できた貴重な時間であった。

②オーバーワレナイ氏によるクラス 12～15 歳 17:00～

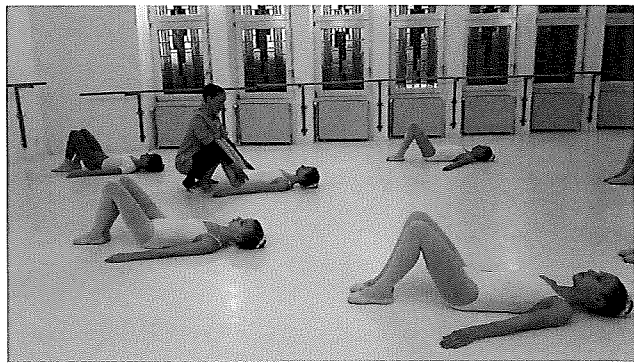
このクラスの生徒は週 5 回ダンスを受講していて、1 回がモダンダンス、4 回がクラシックバレエとインプロヴィゼーションとのこと。この日はクラシックバレエの基礎レッスンを女子 8 名、男子 1 名が受講した。

まず、床に仰向けになり膝を曲げ、かなりの時間をかけてまっすぐな背骨とセンターの安定を意識した練習が行われた。

「肩を耳まで上げて。」「背中を広げ、肩を暖かい砂に下ろすような気持ちで。」「肩は動かさないようにそのまま

でアナバン、アンオー、アラセゴンにしてみましょう。」「三角形のお水の入った皿を下腹に置いたイメージで。」などの具体的な指示があった。

身体がどういう動きをするかそれを知ることが大切であると、教師が生徒の腹に手を置いて呼吸をさせながら一人一人丁寧に指導をしていた。続いてバーレッスンが行われたが、バーレッスンも基礎を重視した内容であった。オーバーワレナイ氏の言う「草は引っ張れば早く育つわけではない。ゆっくり健康的に長く活躍できる幸せな舞踊家を育てる」という信念が感じられるクラスであった。



③リーザ・キルシュ (Lisa Kirsch) 氏によるクラス 15～18 歳 17:30～

モダンダンスのクラスを 11 人が受講。この年代になると自分で自分の身体機能を知ることにより目的が置かれ、「ダンスは自分の身体を研究する旅である」という教師の言葉が心に残った。

生徒達は柔らかい動きの方が簡単といいながら今日は速い動きに挑戦し、二人組で行うこと



によって、さらに表現の幅を広げていくことができた。

④作品鑑賞

レッスン後、昨秋11月「青年が踊る」コンクールで「革新的で非常にクリエイティブである。」と評価され受賞した『機械』という作品が選抜メンバーにより披露された。

年代に合わせてそれぞれの動きが工夫された群舞作品で明るい色調の衣裳を身に付け、いきいきした表情で踊られた楽しい作品であった。主宰者の「個性を大切に育てる」というダンスに対する姿勢が明確に感じられる作品であった。



4. 感想

個人主宰のスタジオは日本でもそうであるが、主宰者の理念がスタジオの運営に強く反映されるものだと思う。ダンス一筋の道を歩んだのではなく、一旦は法学を学びながら舞踊を愛する気持ちから勉強し直してスタジオ開設に至ったオーバーワレナイ氏のスタジオの各クラスからは、氏の言葉にもあるように「生徒達には、人と競争するのではなく自分を大切にしたい。」「急がずゆっくり健康的に長く舞踊を続けられるダンサーを育てたい。」という氏の意志が強く感じられた。

生徒達はみなびのびとダンスを楽しみ自分を肯定していることが見ているこちらにも伝わってくる。

レッスン内容は日本のクラシック一辺倒のスタジオとは異なり、幼少からクラシックの他にインプロヴィゼーションのレッスンが行われ表現の幅を広げている。幼児期のこの体験が成長してどのジャンルのダンスと関わったときも技術だけを学んだ者にはない人間味あふれる表現に繋がれることは明確である。帰国後、自身のスタジオにおいても幼児クラスからインプロヴィゼーションを取り入れていきたいと思った。

最後に、作品を見せてもらったお返しに、日本側は「上方舞」山村流の『高砂』と、島根県の『安来節（どじょうすくい）』を披露した。西洋のダンスとは異なる日本独特の所作に、教師、生徒、父兄も大変喜んで、ささやかな日独交流ができたひとときであった。

(市川みどり)



ランゲン・インスティテュート

Praha Langen Institute

訪問日：2017年1月25日 9:30～11:45

対応者：マールチーナ・ピッフ (Martina Piff) ダンスセラピー主任

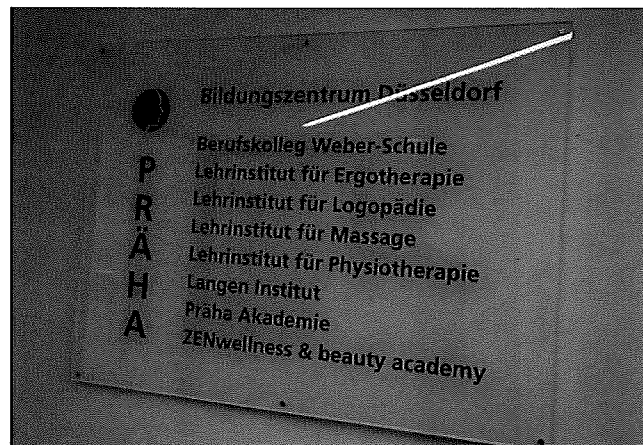
ヨーロッパで最大規模であるダンスセラピスト連盟の会長

ペートラ・ウィット (Petra Witt)

プラハ・ビルディングスグループ (Praha Bildungsgruppe) の専務理事

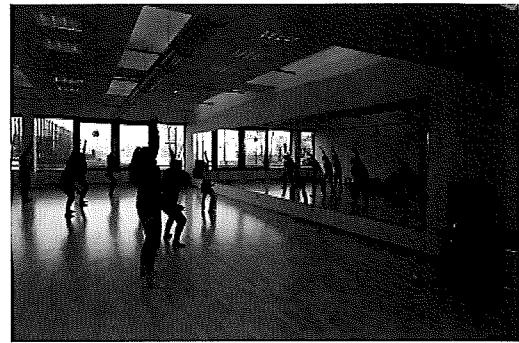
1. 施設の概要

ランゲン・インスティテュートは、1983年にモーンハイム (Monheim) 市に設立され、2001年からプラハグループに入った。プラハグループは、1993年に設立された、いくつかの学校や私立の教育施設が入っている公益の教育センターである。管理部、教師 (非常勤含む) 合わせて340人のスタッフからなる大規模な施設で、ダンス、運動療法、理学療法、言語療法、マッサージ、メーキャップ (医療メークか? と質問したが純粋にメーキャップとのこと) ハーブを用いた治療など多岐にわたる科目を学ぶことができる。



施設は個人面接室、リラックスルーム (窓がなく照明を落とすことができ仏像が飾られている。指圧、ヨガなどに使用される)、マジックミラーで仕切られた部屋 (授業では学生も実際の治療にあたるので、治療の様子を患者の気が散らないように教師がチェックすることができるようになっており言語療法などに使用される)、マッサージルーム、ダンス室、自由に机の形を変えることができる教室、など多様なプログラムに対応できる作りとなっており、部屋に案内される度に感嘆の声が漏れた。カフェテリアも建設中であった。今回は、ランゲン・インスティテュートの施設であるレッスン室で実際レッスンを受け、講義室で質疑応答が行われた。





2. 教育内容

この研究所は、舞踊家として活躍した後でもできる仕事のスキルを付けることを目的としており入学は24歳以上。舞踊、医療、教育、いずれかの資格を有するかバachelorの資格をもっていることが条件である。つまりマスターコースに匹敵することになる。

ダンスセラピーの教師は11人でそれぞれの専門の教科を教えている。授業は実践中心で施設概要でも触れたが、この研究所で学ぶ大きな特徴は学生も一般の患者の治療にあたるということである。実際に病院へ実習に行きうつ病やがん患者の治療にもあたっている。国外からも入学しており4年間仕事をしながら学ぶ。今年の秋には10人が卒業する予定である。

セラピストとしての資格はまだ公的なものはないとのことであるが、ランゲン・インスティテュートはドイツセラピスト協会の基準を満たしているのでレベルは高いとのこと。また、医療の分野で認められており、ドイツでは資格というより社会的にどの分野で認められているかが大切なのだ、という説明があった。

3. ダンスセラピーレッスン体験 10:20~11:10

施設の案内の後、実際にレッスンを体験する機会を得た。

私達7人に、エレマン氏、ピッフ氏、学生のアルベントを加えた10人で体験した。その様子をウィット氏がカメラに収めてくれた。

①まず、二人一組になり一人が自由に動きそれを受けて動きを返すエクササイズを行った。

「あなたがこうすれば私はこうする。という気持ちで動いて下さい。」という指示に従って相手の動きを受け入れ、その動きに対して自分の動きを返す。「お互いに平等であり、同じ動きをする必要はない。違ってよい。」との指示に、相手の動きに同調しつつ自分の動きを返す。私はアルベントと組んだが、まるで会話をしているような感覚にとらわれた。何回か繰り返したあと、お互いに話し合う時間を持った。ただ動くだけでなく反省する時間を持

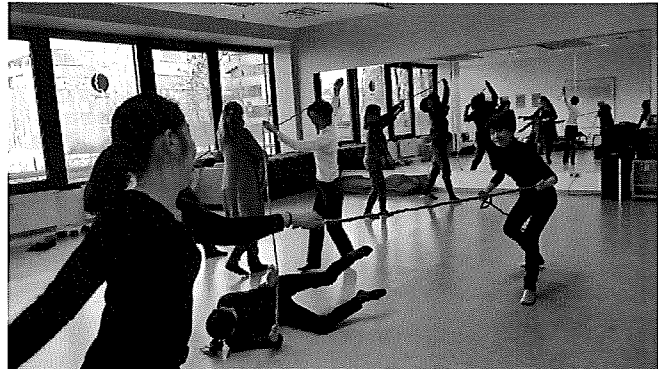


ち、お互いを尊敬し合う。相手の話を聞いて感情をシェアすることによって、家族を思い出すなど、より広い感情に広げていく。また相手の真似をすることによって自分が思い浮かばなかった動きをすることができる。

②次は5メートル程の弾力のあるフェルトの一本のロープを二人で持って、お互いの距離を測りながら動くというエクササイズ。

自分を把握するとともに相手との距離をとることが目的である。お互いの力関係がロープを通して伝わる感覚はスリリングなものであった。

「自分は何をしたいか？」という内心の探求につなげていくことができるという。穏やかに相手の動きに合わせて動いているペア、片方が主導権を握



りスタジオを移動するペア、床を使って多彩な動きを次々と繰り広げるペアなど、即興のペアであるが、それぞれに個性が出てダンス作品を観ているようであった。

③最後に②で用いたものより太めの弾力のあるロープが円状になったものに10人が入った。お互いを信頼して体重を預け、自分の正面にいる人とアイコンタクトをとり場所を移動する。

このロープは絶対に切れないということであったが途中で切れてしまい、一人が転倒し腰を打つハプニングがあった。このアクシデントのため、後半はロープを信頼して体重を預けることには躊躇してしまい残念であった。



④今回の研修では各施設訪問のあと担当者や場所によっては生徒ともディスカッションする機会が設けられていたが、この訪問ではさらに質疑応答の後に学生であるアルベントの体験談を聞く機会が用意されていた。

彼女は、幼い頃からダンスを習っていたが、相手を受け入れることができない性格のため対人関係でトラブルも多く、先生に勧められて母親がダンスセラピーを受けさせた。その結果、自己を変えることができるようになったとのことであった。とても男っぽい性格であったのが女らしくなったと周囲から言われるようになり、それは自分にとっても気持ちのよいものであったとい

う。そして本格的にダンスをやろうと思いピナ・バウシュの元で18歳のときプロダンサーになったという。その時は感情のレベルとしてはダンスが問題解決の能力を引き出してくれるものだと感じていたが、それがどうしても分からなかった。それでさらにダンスセラピーを理論的に理解したいと思い勉強したくなってここへ来たということであった。

4. 感想

今回、実際にレッスンを体験する機会とダンスセラピーを受けダンスセラピーを学ぶに至った学生の体験談を聞くプログラムが組まれていたことは、施設やカリキュラムをうわべだけ見るのではなく、実際に体験し生の声を聞いてダンスセラピーの効用を実感してほしいという強い願いがあったのではないかと感じた。私は、二人組のエクササイズで体験談を話してくれたアルベントと組んで動いたが、穏やかで相手を受け入れる動きでとてもやりやすかった。また動いたあとのディスカッションでお互いの動きについて話し合ったが、私がクラシックバレエをしていると聞くと「だからあなたの動きは優雅なのね。」というコメントがあり、ダンスセラピーによって自分と違う相手のことも受容し、認めることができるようになったという彼女の体験談が納得できた。

またロープを使ったエクササイズでも、片方の強い力に振り回されて緊張感に満ち不均衡な動きになっている（それが悪いことだとは思わないが・・・）ペアも見受けられたが、アルベントは始終私を気遣って動きを選びつつ楽しんでいる余裕をみせていた。

このように、ダンスが協調性や自己認識能力を高めてくれるという事実は、自身もダンスを踊り教えている立場である我々は、日々経験していることであると思う。

ダンスセラピーは1970～80年代にドイツで最初に提唱されたものである。日本でも行われているが、一般にはまだ馴染みが薄く、自分自身や子供の性格の改善のためにダンスセラピーを受けるという土壌はまだない現状なので今回のランゲン・インスティテュートへの訪問はとても貴重な体験になった。

ピッフ氏は、訪問後も時間を割いて私達と昼食を共にし、質問に丁寧に答えダンスセラピーについて熱く語ってくれた。ピッフ氏の話聞きながら今回の研修を機に我が国でのダンスセラピーの今後の発展に注目していきたいと強く思った。

（市川みどり）



ダンスハウス nrw

Tanzhaus nrw

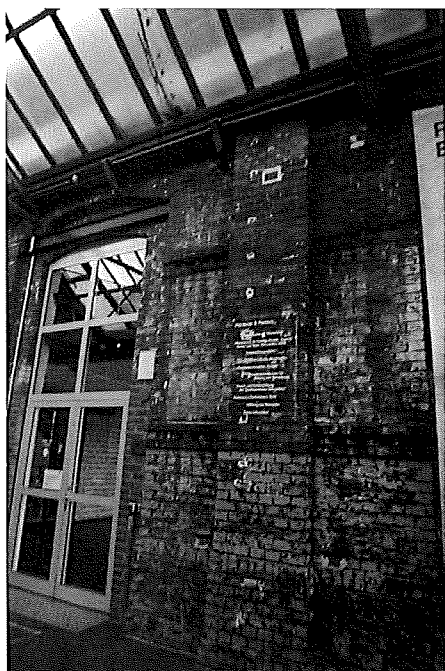
訪問日：2017年1月26日 16:00～18:00

対応者：ドロテア・シャコブ (Dorothee Schackow) 所長

1. 施設の概要

今から40年前の1977年にデュッセルドルフ市のバレエ学校が閉鎖した場所を、当時フリーランスの芸術家、振付家達が稽古場を探していたので提供し、そこから貸しスタジオとしたのが始まりと聞く。

1998年に路面電車の車庫を改装して現在の場所に新たにオープンする。全ヨーロッパには20ヶ所の同様のダンスハウスがあるが、このスタジオから始まり手本として広がっていく。



倉庫時代の壁が残る

未だに玄関前まで線路の跡が何本も残り、入り口にはカフェがあり、大きなサルサのパーティーなどが開かれるダンスフロアも隣接し、クロークも完備している。ビルの中に案内されると、廊下を挟んで、8つのスタジオ、2つのプロダクションスタジオ、そして一番奥には約300人収容の舞台(10m×18m)があり、老若男女を問わず様々な人がいたる所に溢れていて活気を感じる。

また各スタジオには小さな窓があり、廊下から中の様子が見てとれるようになっている。ここで自分が選んだダンスを学べるわけである。

(レッスン中の写真撮影は禁止のため、写真は建物のみ)

2. クラス内容

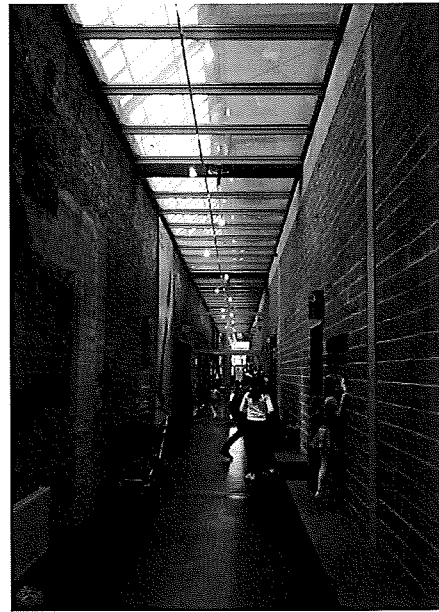
在籍する2歳から70歳までの生徒数は約3000名、ダンスのインストラクターは約80名いる。年間休みなし。イースターの時期は、レッスンは休みだがタンゴの発表会がある。1週間に130クラス開講。1年を1～7月中旬までと、9～12月の2つの学期に分けている。

レッスン料金は基本的には、各学期でまとめて支払うシステム。ジュニアのクラシックバレエのレッスンの場合は、週1回で6ヶ月150ユーロ（2017年現在で日本円約18000円）である。毎朝クラシックバレエとコンテンポラリーダンスのオープンクラスがあり、1クラス7ユーロ（約840円）で受けられる。

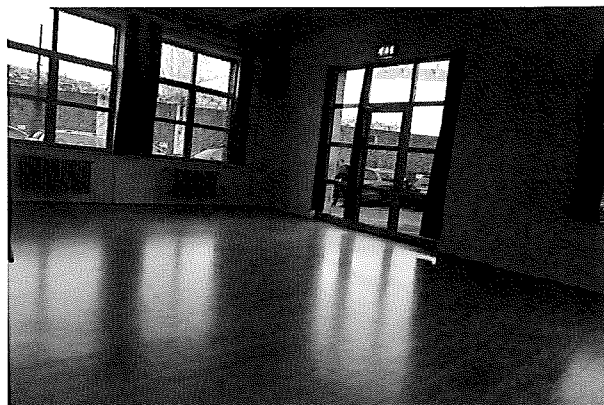
ここで開催されているレッスンは次の通りである。

- ・ブレイクダンス
- ・ヒップホップ
- ・モダンリミックス
- ・タップダンス
- ・ファンキーキッズ
- ・モダンダンススタイル
- ・インプロヴィゼーション
- ・クラシックバレエ
- ・ハウスダンス
- ・ファンキージャズ
- ・ジャズダンス
- ・創作ダンス

最近ではイスラエルからガガのクラスがあり、徐々に生徒が集まっているとのこと。これだけの低料金でできるのも、デュッセルドルフ市やノルトライン＝ヴェストファーレン州から少額ではあるが補助金が出ているためである。また、演劇のクラスでは「リアル・ボディ」と題してパーキンソン氏病の患者ためのクラスを研究して取り組んでいる。



廊下からスタジオ内が見える



3. 見学内容

ちょうどプロダクションスタジオにて、日本人のババタダオ（Tadao Baba）氏が中心となった男性のダンサー3名とミュージシャン1名のリハーサルを見学することができた。

4歳からの子供のためのプログラムとして、10年前からこのスタジオが取り組んでいるプロジェクトで、様々なジャンルのダンスグループに依頼して作品をここで制作し発表している。かなりスローなペースであるが、アクロバットな動きを研究中で、音楽に合わせてながら創作していく。振付過程を20分見学した後、短い時間の中で他のクラスも見せて頂く。モデルのためのウォーキングのクラスは興味深く、他のクラスの生徒も真剣に楽しそうに踊っている姿が印象に残る。



プロダクションスタジオでのリハーサル

4. 感想

8つのスタジオがフル稼働で、いろんなクラスが行われている中、廊下では次のクラスを待つ生徒や保護者、またダンスの見学者も見受けられ賑わっている。ここに来れば、いろんなダンスに触れることができることは、素晴らしいことである。



教師の顔写真

また、このスタジオが、子供たちに様々なダンスを幼少の頃に、生の舞台として触れる機会を与えようと努力している事は特筆に値する。この10年間、ダンスのDVDを持って各学校や施設にピーアールのために訪問して、ダンサーと共に説明し、実際に観て頂くように努力されたと聞く。所長のシャコブ氏が「ここまで来るのにはいろんな事があり、大変でした」と話され、ダンス文化を底辺から育てようとしている姿に尊敬の念に堪えない。

今回の研修では、ダンスの公演を2回鑑賞したが、純粋にダンスを楽しんでいる満席の観客を思い出して、その理由がこんなところからも見つけられた気がする。日本では、一部の人々しかダンスの公演を観に来ていないのが現状である。質の高い舞台を提供し続ける事は、ファンを増やす近道であるが、もっと何か小さな事がたくさんあると感じる。ダンスハウスの地道なピーアール活動のように、底辺からダンス文化を育てる努力が、ダンス芸術の発展にもつながることと信じ、これから一步一步進んでいきたいと思う。

(貞松正一郎)



入口横のダンススペース

ヒュルト市長表敬訪問

Hürth

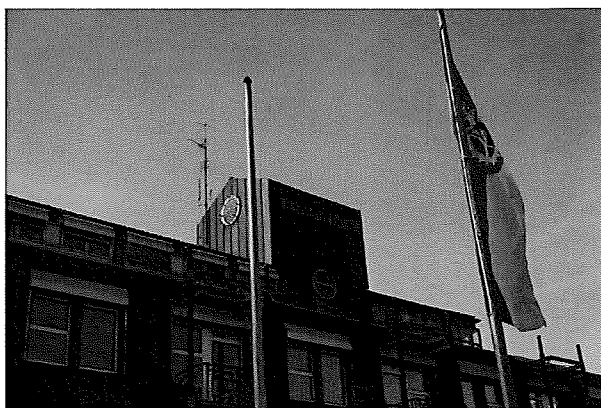
訪問日：2017年1月27日 14:30～15:00

対応者：ディック・ブリューワー（Dick Breuer） 市長

1. ヒュルト市概要

ヒュルト市は、ケルン中心地から南西へ6キロほど離れたところに位置している。もともと12の村であったが、それがまとまってヒュルト市となり、ケルンとは境界線を隔てる大きな市となった。

人口は約6万人（2017年現在）で、テレビ局や放送スタジオが20か所もある。ケルンから近いいため交通機関も便利で、経済的にも発展している。



市の文化事業に対して、市の予算を大きく投入している。

音楽大学やコンセルヴァトワール	50万ユーロ
文化施設	80万ユーロ
市の発表会やお祭りなど	10万ユーロ

2. 市長の挨拶

ヒュルト市の概略の説明がある。市長の話で、多くの予算を文化事業に使って、市全体で文化を盛り上げていこうとしている様子が伺われた。ケルンという大都市以外の周辺地域でも、このように予算を使って、経済と共に文化を発展させていこうとしている様子に感銘を受けた。

また、同席したザビーネ・オーデルタール氏（午後に訪問）を紹介して、彼女の活動に注目してほしいと語った。個人の小さな活動が、市としての大きな文化発展につながると力説し、「このような個人的な交流によって、他の国の文化や社会を知ることになり国際平和へと広がるのでしよう。この機会を作ってくれたドイツ連邦ダンス連盟に感謝するとともに、これを可能にしてくれた政府機関にも感謝します」と述べられた。



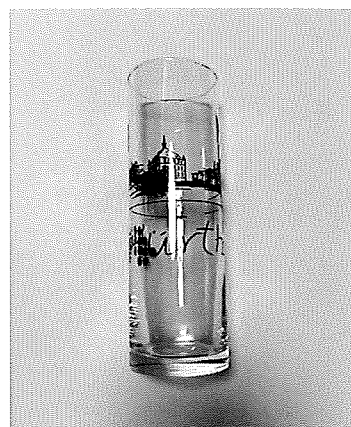
その後、エレマン氏より日本の訪問団の紹介がなされた。今回のプログラム内容、ドイツと日本のダンス教育事情、2015年の1回目のドイツの研修の様子、今回の2回目の研修のこれまでの訪問地について説明があった。市長と同様に、この交流を出発点として日本とドイツの交流が大きく発展していくことを望んでいると述べられた。

その後、バレエ協会からのお土産と市長に渡すと、市長からも、ガイドブック、チョコレート、ケルシュ(Kölsch)用のグラスのシュタンゲ(Stange)のプレゼントを一人一人に頂いた。市長との会談には市役所専属のカメラマンも同席し、市役所のホームページに写真を掲載することであった。

3. 感想

市長への表敬訪問となり、一同緊張した面持ちで応接室にて市長を待っていたのだが、現れたのは、笑顔が素敵な背の高い若い男性であった。市政を説明する様子からも地元をより良くしていきたいという気持ちが感じとれた。また、ダンス連盟、バレエ協会、政府機関への感謝を述べて、今後の発展につながってほしいと述べられたことで、我々訪問団も改めてこの一投が大きな流れの最初になっていることを感じて、その責任に身を引き締める思いであった。

市長がくれたグラスについてであるが、「ケルシュ」というのは、ケルン地方で伝統的に醸造されているビールの一種で、フルーティな酸味があるビールである。これを、シュタンゲと呼ばれる200mlの円柱型の細長いタンブラーグラスに注いで飲む。ケルン在住の人々のケルシュ愛は非常に強く、レストランなどで注文するときには、「ビール」ではなく、「ケルシュ」と言わなければ、いわゆるビールは出てこない。繁華街のレストランにランチで入れば、人々は昼間からケルシュを飲んで食事を楽しんでいる。ケルン地方で、ケルシュ以外のビールを注文するには、かなりの勇気がいるほどである。



市長からのプレゼントの中に、ビールのグラスを見つけた時には思わず我々から笑いが出たが、ケルンの人々がいかに地元愛を溢れているかを感じるエピソードであった。その日も外気は1℃程度と寒い日であったが、地元を愛する市長との交流の後には、暖かい気持ちで次の訪問地へ向かうことができた。

(松村とも子)



ザビーネ・オーデンタール・ダンス・スタジオ

Sabine Odenthal Dance Studio

訪問日：2017年1月27日 16:20～18:30

対応者：ザビーネ・オーデンタール氏（スタジオ経営者、代表、指導者）

1. 施設の概要



住宅街の中にあるオーデンタール氏のスタジオは、ここも旧教会で、放置されていたものをオーデンタール氏が3年前に購入し、改装した上で、自宅兼スタジオとして使用している。「お金をかけた」と語っていた床は、少し根太を上げて、足に負担のかからないような構造にしてある。

元教会であるだけあって三角の天井は、一番高いところで6mはあるのか。

8m×14m位の広々としたスタジオである。そのダンスフロアからさらに奥に広がっている小さな空間には、グランドピアノ、ドラムセット、キーボードと揃っている。照明器具も揃えられていて、ここでいつでもダンスパーティーが出来そうである。

ここは、クラシックバレエのスタジオではないが、固定のバーも設えてあった。窓の大きな気持ちのいい、スタジオである。

2. 教育内容



ダンサーであり、振付家であったマヤ・レックス (Maja Lex 1906-1986) の教え子であった代表者であるオーデンタール氏は、マヤ・レックスが生み出した、ダンスの創造的な動きのコンセプトである「エレメンタリーダンス」を軸に指導を行っている。ケルン大学の学生であったオーデンタール氏は、そこで指導に当たっていたマヤ・レックスに出会った。彼女の持つオーラは素

晴らしく、彼女の踊りを見た瞬間、それまでの全ての価値観が変わったほどであったという。

ここで通常の生徒は、月謝38ユーロ（週1回）から100ユーロ（週5回）を支払っている。年

齡は3歳から70代の方まで、約200人在籍するという。運営はまったくの、個人経営であり、助成金の類は受け取っていない。指導者は彼女を含め4人で運営しているという。また、オーデンタール氏が選抜した、カンパニークラスになるとそのリハーサルについては無料とのことであった。

このカンパニークラスメンバーの年齢は10歳～25歳までと幅広い。それは、年齢や体格によっての反応の違いを知ることや、利用することで、作品の幅が広がるからとのことであった。このカンパニークラスの生徒たちは、年にコンクールを含め10ステージくらいをこなしているという。

3. 見学内容

この日はカンパニークラスのメンバー18名が、私たちに特別の練習を見せてくれた。

通常の基礎練習は、1時間から2時間行われるが、今日は短縮授業で45分にしてくれていた。その内容は、適当に床に座った生徒たちに、オーデンタール氏が声だけで指示を出す。

「手を使って床を感じてみて。」

「手が床の中に入ろうとしたり、手の甲の側を使ったりしてみて。」

「姿勢も変えてみましょう。」



などの声かけによって、どんどん生徒たちの体は解けるように動き出していく。

「肩も気にかけてみて。」

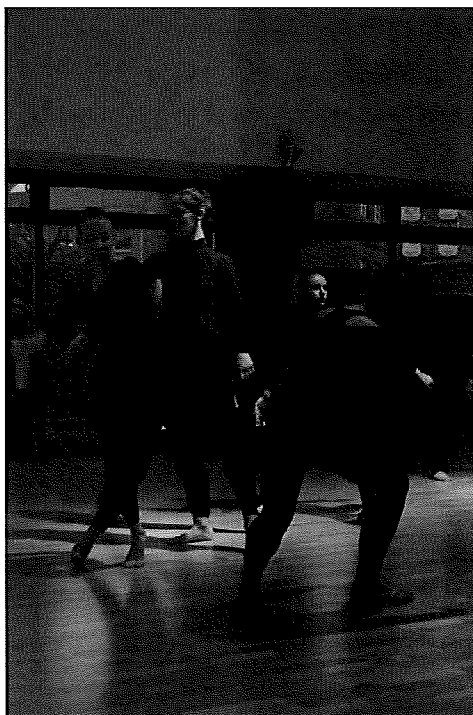
「体も使ってみて。」

「足のポジションも変えてかまわないよ。」

と、音楽はBGM的に流れているのだが、生徒たちは音の感覚を実に巧みに動きと融合させていく。

しばらくそれを続けると、簡単な休憩を取らせ、そしてまた、同じように始まる。次に曲を変えて続ける。

曲は1曲が5～6分なのだが、その間、生徒たちは誰も立ち止まったり、私語をしたりする者はいない。黙々と動き続けている。そして、始めからこれまでの「手」を意識するというテーマは変っていないのに、曲が変わるたびに、その楽曲の雰囲気に合わせて、変化させながら踊る。



ポップスあり、タンゴあり、さまざまな曲調の音楽を使用していた。後で、生徒に聞くと、知った曲では無いという。初めて聞く曲に合わせて踊ることが楽しいと語っていた。

基礎練習の後、次の作品を披露してくれた。

①『Ballast(重荷)』(14人)

大きい子が小さい子を抱え、自分の重荷と折り合いをつけながら生きていく様のように見えた。

②『タンゴ 3/4』(8人)

少し大きい子たちの大人っぽい作品。

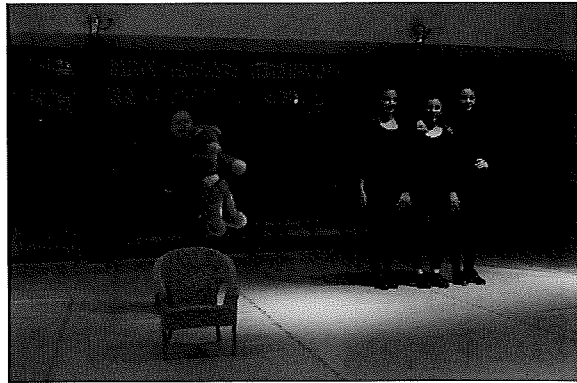
③『夢』(16人)

キング牧師の「私には夢がある」という

有名な演説が歌詞になった曲を使い、対立する2つのグループが最後にはひとつになるというもの。

④タップダンス(4人)

リノリウムを広げて、タップシューズを履いて踊る。



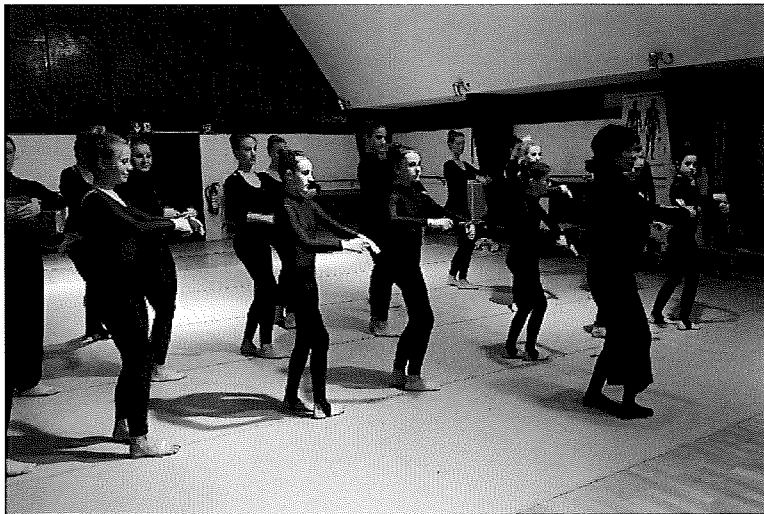
4. 感想

ここへ来て、カリスマ性のあったマヤ・レックスが提唱したダンスが、彼女の踊りに魅せられた多くの人、仲間によって受け継がれていることを知った。ここへ来る前に、行ったフェルバート市立ランゲンベルグ中学校でも、マヤ・レックスの名前が出た。その影響力は今も強く根付いていて、ダンス教育の基礎として慕われていると感じた。

これまでの私にとって、ダンスとはクラシックバレエが中心であったため、コンテンポラリーダンスというものは「なかなか理解の出来にくいもの」であった。なぜならば、バレエの基礎に照らし合わせて、コンテンポラリーダンスを見ていたために、何が基礎なのかが、全く見えなかったからだろう。今回それがようやく見えてきた。

それは、クラシックバレエの上でも、下でもないもので、人間の体の本質的な動きを、さらに豊かに、時代の音楽に合わせて、発展させたものだという気がしてきた。そして、それは理解をしようとせずとも、心から惹かれるものだという気がした時、コンテンポラリーダンスが楽しくなってきた。

体の可能性を追求し続けることは、ダンスのジャンルを分けるのではなく、ダンスの核の部分として誰もが共感し会えるものだと思う。メンバーの錦見氏が現地の子供たちに伝えた、上方舞の仕草も、それに通じると思える。



1 回目の訪独時には特に、クラシックバレエの指導者として、いろいろな角度からダンスを勉強しようという気持ちであった。しかし、今ではダンスのジャンルはそれぞれの歴史的背景を大切にした上で、お互いに歩み寄りながら発展していくもののように感じる。そのため、例えばクラシックバレエであって

も、コンテンポラリーダンスや、フォークダンス、日本舞踊などの基礎知識を得ることや、歴史的背景を知ることが、大切であると思えた。

私がこの訪独で得たものは、ダンスの違いはジャンルではなく、個々の感性から来るものであるということである。指導者としては、ジャンルや形式を重んじる前に、生徒一人ひとりを良く見ることでありと確信し、私がなすべきことはテクニックを教え込むことではなく、生徒本人から何を引き出すことであると思った。

(若佐久美子)



3. 派遣事業の報告会について

平成 29 年 2 月 10 日、午後 2 時より日本バレエ協会本部事務所において派遣団の事業実行委員会への報告会が開催された。

尚、平成 28 年度事業の成果報告は冊子化されて（本冊子）当協会全支部のほか、関係機関に配布される。



報告会はまず当協会会長岡本佳津子による冒頭挨拶に始まり、続いて派遣団団長諸角佳津美により、第一回目の訪問時には日本側と同じくドイツに於ける舞踊の多様性を主に紹介してくれたが、今回はドイツにおける舞踊教育についての視察をメインにしたプログラムを組んでいてくれたとの概略紹介が成され、続いて事前に決めていた分担にしたがって時系列で視察・訪問の内容、得た印象などが語られた。（詳細は第 3 章の派遣者のレポート参照）

一通りの報告が終わった後、フリー・ディスカッションに移ったが、話題はドイツでは鑑賞を主目的とし、プロの舞踊手達によって担われている「舞踊芸術」の流れと、一般社会に浸透し、様々な形と様々な目的を持って踊られている「舞踊文化」の流れがあるという認識が舞踊関係者の間の共通認識になっているがわが国はどうか、わが国では余りに舞踊がそこに携わる者の生活の手段になり過ぎており、舞踊の可能性を自ら閉ざしてしまっているのではないか、といった議論が成された。

また派遣団のほぼ全員が青少年を指導する立場にあり、わが国の場合、小学校入学前後に「習い事」として始めたダンス（バレエ）が、ある生徒には将来の職業的な選択枝となって続けられ、ある生徒は受験を期に辞めるというのが一般的なパターンであるが、これを必ずしもプロを目指さなくとも楽しんで続けられる工夫ができないものであろうか、という話題も呈された。

そしてそれは日独共通の課題ではあるが — 但しドイツ側は既にそこに着手した上での試行錯誤であるが — 社会的に認知されるだけの権威を伴った舞踊指導者認定の制度の必要性に話題は収斂した。

尚、本事業の当協会会員への報告は、平成 29 年度総会の席上を借りて行えあれる予定である。

平成 28 年度「青少年国際交流推進事業」・日独青少年指導者セミナー B3(芸術分野)ーバレエ(ダンス)分野における交流ー 第2回派遣メンバー募集要項

＜文部科学省委託事業＞

日独青少年指導者セミナーについて

日独青少年指導者セミナー事業は、日本ドイツ両国の政府主催（日本側実施主体は文部科学省）で実施され、相互交流や研究協議、意見交換等を通して両国間の理解と親善を深め、信頼関係を構築することを目的として長年に亘って実施されている事業であり、両国の青少年指導者及び青年リーダーのそれぞれ派遣、受け入れを行って意見交換や両国の青少年育成活動、施設等の現地調査を行うなど研修を伴った相互交流を実施します。

今年度の B3（芸術分野）での交流は「バレエ（ダンス）分野での交流」に設定され、日本側実施団体は公益社団法人日本バレエ協会、ドイツ側実施団体はドイツ連邦ダンス協会（Deutscher Bundesverband Tanz：DBT）に決定され、一昨年、第一回の訪独、本年 5 月第一回の訪日を実施されました。

派遣事業募集要項

● 趣旨

上記の事業趣旨に従ってドイツを訪問し、同地のバレエ（ダンス）関係者と意見交換や実地見学を通じて、両国の理解と友好を深め、国際的視野に立った有為な青年の育成方法の研究と両国間における青年指導者交流の発展を図ります。

● 研修テーマ

「日本とドイツのダンス（バレエ）教育のシステム・制度の違い」

● 日程

事前研修会：平成 29 年 1 月 14 日（土）同日東京宿泊

派遣事業：平成 29 年 1 月 15 日（日）成田発～ハンブルグ着

1 月 28 日（土）ベルリン発帰国予定

13 泊 14 日（事前セミナー 1 日別）

※事前研修セミナーの会場は、東京都品川区五反田日本バレエ協会事務所（予定）です。

● 募集人員 6 名

● 応募資格

以下の条件を満たす者で、ドイツでの研修の成果を日本の社会や職場・生活に活かすことができる者。

（1）日本の国籍を有し、平成 28 年 4 月 1 日現在、40 歳以上 60 歳位までの方

- (2) 心身が健康で協調性に富み、研修計画に従って規律ある団体行動ができる方
- (3) 派遣事業・事前研修セミナーの全期間参加が可能な方
- (4) バレエ（ダンス）に関する職、特に青少年への教授、指導に就いている方
- (5) 報告義務（研修レポート等提出）を期日までに確実に果たせる方
- (6) 平成29年4月以降まで有効なパスポートを取得済の方

※ 語学能力は特に問いません。

● 諸経費（当協会にお支払いいただく経費） 参加金：120,000円前後

- (1) 文部科学省が定めた「青少年交流推進事業（国際交流事業）実施要領」により、航空運賃の1/2以上を受益者（参加者）が負担する原則。（上記金額は運賃相場により変動します）
- (2) ドイツ国内でのプログラムにおける宿泊費、全食事、移動交通費はドイツ連邦政府が負担します。
- (3) 事前研修会セミナーにかかる費用は無料です。（4）成田空港までの往復交通費、ドイツ側プログラム中に提供される食事以外の飲食費、渡航中の海外旅行保険加入（必須）は、別途自己負担となります。

● 応募方法

平成28年8月31日（水）（必着）までに当協会事務局へ提出書類を郵送又は持参してください。

● 参加決定について

提出書類を基に厳正な選考を行い、当協会理事会にて決定の上、文書で通知いたします。

● 提出書類について

(1) 参加申込書

- ・ 申込書は、本要項付属のもの、又は当協会ウェブサイトよりダウンロードしたものを使用。

申込書記入上の注意

- ・ 「現住所」資料の郵送先としますので、常時本人に連絡可能な場所を記入してください。
- ・ 「訪独中連絡先」訪独中の日本での連絡先（ご家族住所など適宜）

(2) 参加志望動機書 <題名は各自自由に付し、以下の4点について記述してください>

- ・ ドイツ研修における関心事項
- ・ 自身の仕事や活動内容について、ドイツに伝えられることは何か。
- ・ ドイツでの研修の中で何を学びたいか
- ・ ドイツでの研修で学んだことを、帰国後どのように活かすか

(800字以上1,200字以内、A4横書きを使用、題名及び氏名を記入、手書き不可。パソコンを使用してください。)

(3) パスポートの写しを必ず添付して下さい。

申込書送付先及び問い合わせ先

公益社団法人日本バレエ協会事務局

〒141-0031 東京都品川区西五反田7-17-5 宮下ビル3階

TEL 03-5437-0371 / (平日の午前10時～午後5時) FAX 03-5437-8464

E-mail kobayashi@j-b-a.or.jp

参加申込書

平成28年 月 日

公益社団法人日本バレエ協会 殿

私は日独青少年指導者セミナーB3（芸術分野）派遣メンバーに応募致します。

フリガナ 氏 名				性 別 年 齢	男 ・ 女 才
ローマ字表記					
現 住 所	〒				
電話番号		ファックス番号			
携帯電話		メールアドレス			
勤務先名称					
役 職 名	＜勤務先での役職・身分等＞				
勤務先住所	〒				
勤務先電話番号		勤務先 FAX			
訪独中連絡先 ・ 現住所 ・ 勤務先 ○印して下さい	＜上記いずれでもない場合はご記入下さい＞ 連絡先名称、または氏名： 〒				
連絡先電話番号		連絡先 FAX			
学歴・職歴 賞 罰 等	＜書式自由＞				
海外在住歴等	有 ・ 無 有の場合の国名：				

※ 参加の選考基準として健康状態を考慮させて頂く場合がございますので予めご了承下さい。

ドイツにおける大学制度について

ドイツの大学は国立大学、私立大学、カトリックまたはプロテスタントの教会が運営する教会立大学がある。国立大学の授業料は無料、またはかなり低額に抑えられており、大半の学生は国立大学に通学している。

また、それぞれの大学は大きく次の3種類に分けることができる。

- ・学術研究のための総合大学
- ・実地志向の勉学のための専門大学
- ・芸術を学ぶための芸術大学、映像大学、音楽大学

総合大学には大学入校資格取得試験のアビトゥーアの合格が必須となるが、専門大学へはアビトゥーア合格以外にも ①ギムナジウムのグレード 12 を修了、②実科学校を終え職業上級学校を修了、③基幹学校を終え職業学校・職業専門学校を修了 のいずれかに該当すれば入学資格が得られる。

またこうした大学とは別に専門教育に理論と実践を組み合わせ、学修アカデミーでの教育と企業等での専門教育訓練を交互に行うことを特徴とする“職業アカデミー Berufsakademie”という教育施設がある。

専門大学と同等の水準の学修を、協力企業ないし社会施設での専門教育訓練と結びつけることにより3年間という短い期間で理論と実践に基づき現場の問題にすばやく対応できる能力を身につけさせることが目指された。大学入校資格取得試験であるアビトゥーアを取得しなければ入れない。

職業アカデミーの修了資格を専門大学の修了資格と真の意味で同等に扱われることはなかなか難しかったが、度重なる会議を経て1995年、上の資格を同等に扱うことが連邦文部大臣会議より勧告された。これに関連してヨーロッパ全体での承認が進められた。

ヨーロッパ諸国の間で、高等教育における学位認定の質と水準を国が違っても同レベルのものとして扱うことができるように整備するのを目的として「ボローニャ・プロセス」という改革が実施された。これは三段階の学位構造、高等教育における質保証、ヨーロッパ高等教育圏内の学位・資格と学修の成果の相互認証に焦点を置いた。これによって学業修了資格が欧州内で比較可能となり、学生の国家間の移動が容易になった。

ドイツはこの大学改革の一環として、これまで主要な位置を占めてきた「ディプローム Diplomgrad」「マギスター Magistergrad」に代わり「バチェラー Bachelorgrad」「マスター Mastergrad」「博士 Doktorgrad」の学位が通常高等教育での学修に対する修了資格になることが予定されている。しかし高等教育機関は現在もまだ「ディプローム」と「マギスター」の学位も授与することは出来る。「ディプローム」は総合大学と専門大学の双方で授与されるが、「マギスター」は総合大学でしか授与されない。また、専門大学の「ディプローム」には専門大学をあらわす“FH”が付記されて総合大学のそれと区別される。これに対して「バチェラー」や「マスター」は高等教育機関の種類にかかわらず同等に扱われる。

日本とドイツの一般教育制度の違い(その2)

	日本	ドイツ
<u>就学年齢</u>	満6才	満6才 ※保護者の申請を条件に早期就学を認めている
<u>義務教育期間</u>	6才～15才の9年間	6才～15才の9年間、もしくは6才～16才の10年間 ※ただし義務教育後も全日制の学校に通学しないものは就職する傍ら定時職業学校に通学する義務がある
<u>初等教育</u>	6年間	4年間
<u>中等教育</u>	居住地域の公立中学校にそのまま進学できる。 受験をして公立以外の中学校へ進学することは自由。	職人の徒弟制度に由来する職業教育と、大学教育に代表される高等教育が教育課程として明確に分離されているため、小学校卒業とともに進路を決めなければならない。
<u>試験</u>	大学入試センター試験を受け、その後各大学の試験へ進むのが一般的だが、推薦や特別入試など様々な受験方法によって学力以外で判断する方法も増加。 また、センター試験は年齢や回数制限がないため何度でも受けることが可能。	大学に入学するためには必ずアビトゥーアを受けなければいけない。一度しか受験できず、この成績によって大学が決まる。 アビトゥーアの成績は一生有効。
<u>問題点</u>	出身大学が就職に大きく左右されるため、一流の大学へ進学することが重視される。そのため仕事に必要な専門的知識は就職後に身につけることが多い。また社会的地位や賃金も就職先企業や学歴に左右されるため、専門職に就く人が減少している。	以前は優秀な職人を輩出する制度であったが、近年は大半の子どもがギムナジウムへ進み、基幹学校へ進むのは社会的に恵まれない子や移民の子、落ちこぼれの子となってしまう。 その結果、優秀な技術者不足をまねいている。 また、ギムナジウムへ行けなかった子は大学へ進学することが難しく、10才にして一生のキャリアが決まってしまう。

日本とドイツの一般教育制度の違い(その1)

